し傳へても宜しう御座いますが。」

「さあ、さうですな……。」毅はひどく當惑したやうに眉根を寄せてその儘暫くの間低く首を垂れて考へ込んでゐたが、軈て思ひ入つたやうな眼付をしながら、

「實は少し申上げ憎い話で、もう此方でも御存知かも知れませんが……。」と、云つて臆病らしくふつりと云ひ澱んでしまつた。

母親は豫期してゐた通り津崎の話であることがそれとなく分つたので、唯、

「はあ。」と張詰めた返事をしてごくりと喉を鳴らした。

「妙なことを伺ふやうですが……」と、毅は低く沈んだ切なさうな聲で漸う言葉を續けながら、「俊子さんは今度津崎さんから離縁になられたさうですが、眞箇にさうなんで御座いませうか。」

「はあ、まだよく定まつた話では御座いませんが、彼女も彼家で少々不埒な事を致しましたさうでねえ、此方ではそんな離縁なぞと申す不名譽なことは斷じて致させない心算で居りましたんですけど、津崎の方で喧しく申して參るもんですから。」と云つて母親は毅の眼の處をきつと見据ゑた。

毅はそれを聞くと顔を赧めて妙にどぎまぎしながら、

「實はその事で一寸御相談に伺つたんですが、津崎さんのお話しては私が何か俊子さんに對して失禮な事をしかけたやうなお話して、それが今度の御離縁になつた原因だとかいふ事なんですが、果してさうなんですか知らん。」

「はあ、何んだか津崎ではそんな事を申して居りますが、もともと彼女があんな不節制な子だもんで御座いますから……。」さう云ふ母親の眼には漸次と抑へきれぬ興奮が燃えて來た。

「いや、併しそんな事が眞箇の原因だとすれば實に容易ならん話で、私も此方へ對して何ともお詫びの致しやうがありませんが。」と、毅も異樣な興奮を眼に輝かして、「私も此の場合自分の立場を明かにするために辯明の出來る事だけは一應辯明して置き度いと思ひまして……。」と云つて膝の上で兩手を堅く握り緊めながら母親の顔を鋭く見返した。

毅は先づ原田の思ひ懸けない訪問に驚かされた事を云ひ出して、それから徐徐と話しを進めて行つた。

五

毅は今度の離婚事件が自分と俊子との間のあらぬ噂から起つたものとは少しも豫期してゐなかつた。原田の口からそれを聞く迄は全く夢にも思ひ懸なかつたのであつた。そしてその疑ひの起りも單に自分が俊子にやつた手紙からだと聞いては流石に呆れざるを得なかつた。そんな事は男女の間に起り得る最も普通な出來事である、そんな些細な事で姦通などと云ふ恐ろしい罪名を受けなければならぬとすれば、行きずりの男に對しても良人は自分の權利を强ひることが出來る、そんな不條理な話はないと云つて、彼は口を極めてその事實を否認した。そして原田が彼に對しても云ひ出した告訴などと云ふことは全く人を恐喝するものだと云つて、少しづつ憤怒の色さへ見せて來た。

母親は默つてその一言一句に聽入つてゐたが、やがて熱した毅の言葉を抑へて、

「それで原田は貴方に對して何うしろと申すんです？」と靜かに訊ねた。

「何うしろもかうしろもないのです津崎さんの意志では名譽恢復のために此際斷然告訴を提起すると云ふんです。若しそれが困るなら自分が中へ入つてやるから先方の要求通りの條件で示談にしろと云ふんです。つまり金で話しをつけろと云ふんですな。」

「はあ、それで貴方は何う遊ばすお心算なんです？」

「さあ、それが私も弱つてゐるのですが實はそれを御相談しようと思つてかうして伺つたのですが……。」と言葉を切つて、兎に角私としては此れ程の侮辱はないんですから、若し私一個の事でしたら斷然そんな無法な要求は拒絶してしまうんです。男として此れ程不名譽なことはありませんからなあ。ありもしない虛構の事實で恐喝されて金を出すなんて實に意氣地のない話ですし、爭へば何處までも正當に爭へるんですから。」と眉を慄はしながらきつぱり云ひ切つたが、やがて又聲を落として、併しこりやもともと私一個のことではありませんし、先方の口振りでみましても當然俊子さんの名譽にも拘はることなんですから、よく考へた上で愼重に取計らはなければならんと思ふんです。」

「はあ。」と、母親は何かの期待を持つて熱心に話の先を促した。

「それに、みた處、原田と云ふ人は餘まり筋の良くない人のやうですし、ひよつとして玆で事を荒だてゝ後で取返しの附かんやうな眼に逢はされても困りますからなあ。殊に昨日から三日以内に確答をしなければ私の父なり母なりに事實を訴へて一日も早く事を運ばせるなぞと云つてゐるのですから、若しそんな事にでもなると、私も家へ對して面目がありませんし、今の處何う處分したらいゝものかほとほと弱り切てゐるのですが……。」毅はその言葉と一緒に急に悄氣返つて來た。

母親はその顏をじつと瞻つてゐたが、やがて冷たい聲で、

「何うも貴方にまで飛んだ御迷惑をかけましてほんとに相濟みません。實は宅の方へも矢張りそんな事を申して參つてゐるんですけど、此方では何しろ俊子が惡いんですから抗ひも出來ませんで、何うにか穏かな話しが出來るものならさうしようかと思つて居りますんですが……。」と云つて皮肉な調子になりながら、「かうなりましたのも皆私が俊子の教育を過つた爲めて、亡りました良

人に對して何と云つて詫を申して宜いやら私ひとりて氣を揉んでゐるんて御座います。」

それを聞くと毅はふいに顏をあげて、

「ぢや貴方方も矢張り私共に對して何か疑念を持つて被居るんですね。」彼の顏はみるみる眞紅に燃えて來た。

六

「いゝえ、さう云ふ譯ぢや御座いませんけど……。」と、母親は毅の言葉を避けて、「兎も角、津崎も相當な考へを持つてゐる男ですから、まるつきり根のないことを云ひ立てゝ私共を苦しめる譯はあるまいと存じますんです。貴方は立派な教育もおありになるのですからそんな無分別な眞似をなさる筈は御座いませんけど、彼女はあんな至らない性分で御座いますし、それに先頃の病氣以來何うも夫婦の折合ひも宜しくなかつたもんですから、ひよつとして何んな不心得な事を致して居るか知れませんし、此ればかりは親の眼にも分りませんのですから

ねえ。」

「さう仰有ればもう私としては申上げる言葉もありませんが、併しちよつとお考へになつたつて、私と俊子さんの間にそんな事が起るか起らんか位はお分りになりさうなものだと思ひます。子供の時から兄妹のやうにして育つて來たんですから、手紙の遣り取り位したつて別に惡いとは思はれません。そんな事て人を疑つてゐた日には自分の妻を往來へ出すのすら危險ぢやありませんか。」毅は氣負つて云つた。

「てもさうは申されません。」母親は急に聲を高めて、「貴方がたはさう云ふ風にお考へになるかもしれませんけど、世間の良人の眼から見れば手紙なんて云ふものはさう容易く見過ごせるものぢや御座いません。それも俊子がまだ宅に居ります時分なら宜しう御座いますが、かりにも津崎といふ者の妻になつて居りますんてすから、滅多に手紙なんぞ頂いては津崎だつて決して好い氣持ちは致さないに極まつて居ります。私は貴方のなすつたことが惡いとは申し上げませんが、これぱつかりは確に貴方の落度だらうと存じます。」と、きつぱ

り云つた。

毅は母親の語調が荒くなつて來たので稍逡巡ながら煙草ばかり吸つてゐたが、やがて眞面目になつて、

「そりや私が手紙なぞを上げたのは確に良くなかつたかも知れませんけど、そんなことて津崎さんの感情を害したのは誠に殘念です。一々開封して御覽になれば分りますが、私は決して人の妻に上げると云ふ範圍以外のことは一言一句でも書いた覺えは御座いません。その點は私たとへ法廷へ立つても確信して云ふことが出來ます。」

「そりや貴方のことて御座いますから、そんな事をお書きになる譯はありませんけど、津崎から見ればまた何んな事が誤解の種になるか分りませんのですからねえ。」母親は意味ありげな眼つきをして云つた。

「併し、私のことですから或は隨分細かい感情の移り變りなんかを書いたこともあるか知れませんけど、そりや自分一個のことて、俊子さんにはまるて關係のない事なんです。もし津崎さんがほんとに文字を解する方ならそれ位な事

はお分りになりさうなもんです。兎に角、人の妻になつてゐる女と、相當な年になつてゐる男とがあんな手紙位で心を動かすなんて云ふことは全く有り得べからざる事なんですからなあ。今の男と女はそんな容易な事で決して結びつき得るものぢやないんです。」毅は妙に歇斯的利的な陰鬱な眼つきになりながらしどろもどろに云ひ放つた。

七

「それはさうかも知れませんけど、昔からもよく申します通り遠いやうで近いものは男と女の間柄で御座いますからねえ。何んなに緊りした方でもふとした氣の迷ひて飛んでもない間違ひをなさる事もあるんですから。」と、母親は角のある言葉で云つて、「兎に角、かう申しちや何んですけど、今度でも貴方のお手紙さへなければ此んな不面目な事にはなりませんのですし、津崎の方で何う誤解しましたにしろ此方では何も申す權利は御座いませんのですからねえ。私からこんな失禮なことを申上げてはお腹が立つかも知れませんが、貴方もまだ

お若いのですしそれに將來の事も御座いますんですから、もう少し御自分のなさることをお慎みになつては如何かと存じます。それに貴方がたはあんなお立派なお家柄のお子さんですし、若しひよつとして此んな事からお家の名でも出るやうになつたらそれこそ大變ぢや御座いませんか。あのお母様の御氣象として何んなに御立腹遊ばすか、私共は考へてみただけでもぞつと致します。」と、母親は嚴格な顔容になつて極めつけるやうな調子で云つた。

毅は聞いてゐられないやうに焦々しながら膝を搖ぶつてゐたが、唯時々陰鬱な眼で母親の顔を見据ゑるだけで到頭一言も口をきかなかつた。

母親は暫くすると又言葉を低くして、

「私としてみますと、貴方へお恨を申上げ度い事もまだ澤山あるんて御座いますけど、俊子も今日明日と云ふやうな重態になつて居ります事ですし、それに今更未練がましい事を云つた處が何うなるもんでも御座いませんから、もう一言も申上げない心算で御座います。」と云つて今度は涙含んだ聲になりながら、「俊子も自分の不身持からかうなつたとは申せ、到頭こんなことて一生日蔭者に

なつてしまはなければなりません。當人に致せばいつそ此儘父の傍へ參つてしまふ方が耻を殘さないで宜しいかも知れませんが、考へてみれば不運な子で御座います……。貴方もそこはようくお考へ遊ばして、可哀相と思召して下さらなければ……。」その言葉はいつか涙に溶けてほろほろと母親の頰に流れて來た。

毅は身動ぎもしずに身體を固くしてゐたが、大きく睜つたその眼には一杯涙を溜めてゐた。

そこへ階段口の方から忍ぶやうな足音が聞えて、叔父が心配さうな顏をしながら案内もなくぬうつと入つて來た。挨拶もそこそこにして座に就くと、二人の顏容から直樣對談の内容をそれと察して、突如毅へ質問の矢を向けた。毅は仕方なしに今迄母親に話した原田のことや、自分の所信などを言葉少なにもう一度繰り返した。

叔父はそわそわしながら時々口を入れて聞いてゐたが、逐一聞いてしまうと急に肩を張つて、

「そりや何うも實に怪しからん話だ。いや、此れには他にいろいろ事情があるんて……。」と云つて、津崎の現下の事情や、原田の良らぬ思惑や、毅の潔白を信ずることなどを次から次と語り出した。そして親切氣な調子で、

「どうもお互に社會とか一家の名譽とか云ふものを考へんければならんので、至極事が面倒になるんですが……。」と云つて杉浦の方でも總てを田中に依頼して原田には一切面接せぬやうにしたら何うだといふやうな忠言までした。そして母親も毅も深い憂慮と悲しみに包まれて口を噤んでゐる間に、彼はたつたひとりで種々な事を話續けてゐた。

そこへ今度は消魂い足音が階段を駈け上つて來て、喜三郎の慌しい聲で、

「母樣、母樣ッ姉さんが又息をしなくなつてしまつたんです。早く來て、早く來て。」

その聲で三人はぎくりとして顏を見合はせた。母親は眞蒼になつて、

「直に大瀧さんへ電話を懸けさせて……。」と、おろおろ聲で叫びながら直ぐさま起つて行つたが、それを見ると毅も度を失つたやうにすつくと起ち上つて、

「私はこれて失禮します。」と云つて、ふらふら階段の方へ出て行つた。その顔は恐ろしい絶望のために蒼く拘攣つてゐた。

八

「まあ、一寸待つて下さらんか。杉浦さん、毅さん。」と、叔父は張り詰めた聲で後から呼び留めて、「今貴方に歸られてしまつては後の始末がまるで付かんからもう少時、俊子の容體が開くまで居つて下さらんか。そして兎に角今夜のうちに貴方の方ともよくお打ち合はせをして前後の手筈を極めて置かんと、田中の方も處置がしにくいですからなあ。」

毅は座敷の入口の處で立留つたまゝ振顧つて叔父の方をきつと見返したが、やがてつかつか火鉢の傍へ歸つて來て、座蒲團の上へ中腰になりながら、

「併し俊子さんの容體がそんな風なら、もう何もお打ち合はせをする必要はないてせう。俊子さんに若しもの事があつたら、もうそれで萬事が了つてしまうのですからなあ。」

「そりやさう云つてしまへばさうだが、併し私達はそんな不幸な場合を考へて此の事件を投げ遣りにして置くことは出來んぢやないですか。そりや最後の場合です。今から俊子の命を顧慮して事をすると云ふのは餘り慘酷な話だ。」

叔父は眞顏になつて云つた。

「譬へ慘酷でもなにしろもう最後の運命が來てゐるのですからなあ。」毅は悲しさうな聲で呟きながら、涙を紛らかすやうに衣嚢を探つて煙草を取り出した。そしてぶるぶる小刻みに慄へる指先で少時の間吸ひ口の所を弄くつてゐたが、やがて眞白な灰を搔き立てゝ火を點けた。蒼ざめた煙は彼の口からふつと吹き出されて心細げにゆらゆら搖めきながら明るい電燈の光のなかを次々と天井の方へ昇つて行つた。

叔父はその樣をぢつと瞻つてゐたが、何を考へてゐるのか深い憂慮が漸次と眼の底に輝いて來て、時々長い嘆息だけが自然と彼の唇を洩れてきた。

毅はその儘口を噤んで矢鱈と煙草ばかり喫かしてゐたが、遠くの方で足音や、電話の呼鈴などが聞える度に耳を峙てゝその物音に聞入つた。そしてしまひ

には迚もかうしてはゐられないと云ふやうに焦々體を揉みながら急に顔をあげて、

「若しなんでしたら、病室の外からでも宜う御座いますから、一寸俊子さんにお眼に懸つて歸り度いのですが……。」と思ひ入つた聲で云つた。

叔父はそれを聞くと嚴格な顔になつて、

「さあ……。」と云つて躊躇してゐたが、やがて急に憐れむやうな眼つきで毅の顔をまじまじ見ながら、「醫者からも堅く止められてゐるのですから病室へお入れする譯にはいかんですが、兎に角御一緒に行つて容子を見て來ませう。」

二人はやがて階段を降りて茶の間の緣側から離座敷の方へ行つた。家中のものは皆其方へ集まつてゐると見えてどの間もどの間もがらんとして電燈ばかりが明るく輝いてゐた。

離座敷へ來ると、叔父は入口の紙襖をそつと細めに開けた。毅は其隙間から貪るやうに室内を覗き込んだが、喜三郎や大瀧や、お藤達の頭に遮られて、僅かに夜着の裾と、氷嚢を釣つた麻紐が見えてゐるばかりであつた。そして枕許に坐

つた母親の顔は木彫の面のやうに眞蒼に拘攣つて、その眼は瞬もせずに人陰へ隱れた俊子の顔をきつと凝視してゐた。

毅は氣が浮ずつたやうに胸を躍らせながら脊延びをしてせめて俊子の顔だけでも見ようとした。その途端に柱へ突いた手がごとりと紙襖へ觸つたので、その物音で一座の人は一齊に此方を振顧つた。

母親はそつと起ち上つて、やがて紙襖際へ寄つて來た。そして毅の姿を見ると急に蔑すむやうな眼つきになりながら、

「此場合ですから、何と仰有つても俊子をお眼に懸らせる譯には參りません。貴方も少し前後をお考へになつて下さらなけりや困るぢや御座いませんか。」と素氣ない聲で詰るやうに囁いた。そして毅が容體を聞かうとする間も待たず、片手で入つちや可けないと云ふ合圖をしながら突如紙襖をごとりと閉てしまつた。

毅はそれを見ると口惜しさうに叔父と眼を見合はせたが、やがて怒つたやうな顔をしながらなんと思つたか、たつたひとりでつかつかと玄關の方へ出て行

つた。そして叔父が後を追つたときにはもう靴を突懸けて戸外へ飛び出してゐた。

露頭

運命は再び俊子の味方になつた。

元來俊子は病氣に對しては頗る運のいゝ方で、以前の大病の時ももう今日明日といふ切迫塞つた容體に陷つてゐながら不思議と持ち直したが、今度も亦それと同じ樣に、病狀は手の裏を返すやうに轉移した。丁度毅のやつて來た翌々日の午後、あれ程激しかつた肺炎の症狀が俄に順調に復つて、熱は突然平熱以下に下ると同時に胸を壓し塞いでゐた苦惱がまるで薄紙でも剝がすやうに漸次と消え去つていつた。午後の回診に來た大瀧は看護婦が示す熱度表を見ると、まるで豫期してゐなかつたやうに愁眉を開いて、これで型通りの症狀を執つたのだと云つていろいろ肺炎と云ふものゝ病理などを說明して聞かせながら自分の事のやうにひどく喜んだ。

俊子が思ひがけない容體になつたのを知ると、今迄火の消えたやうに打濕つてゐた松倉一家の人達は俄に蘇つたやうに勢づいて、皆の眼の底には隱し

きれぬ歡びが輝いて來た。なかでも喜三郎はさも嬉しさうにいそいそしながら、麻布の叔父の處へ電話をかけたり、自分から病室の取使ひをしたりしてゐたが、やがて奥の間の母親の所へやつて來た。

母親は心配と看病疲れで頭痛がするといつて朝からまだ臥床を出なかつたが、喜三郎が入つて來るのを見ると、重さうにむくむく頭を擡げながら、

「何うだい、姉さんはあれから變りはありませんか？」と、弱々しい聲で訊いた。

「え、あれからは別に變りはないけど咳が餘程減つたやうですよ。なにしろもう大丈夫だつて云ふんだから、僕は嬉しくつて仕樣がないんです。肺炎て隨分可笑しな病氣ですねえ。昨夜まではもう迚も駄目だらうと思つてたのに、たつた一晩でけろりと癒つてしまうんだもの。」さう云ふ喜三郎の聲には胸一杯に溢れた嬉しさが籠つてゐた。

「まあ、まあ、此れて私も安心しました。餘まり安心したんて今度は母樣の方が肺炎にでもなりさうです。」と云つて母親は久振りに笑顏になりながら、「だけど今度はあれで癒りはするだらうけど、あんな弱い身體になつてしまつて此先が

案じられるねえ。起きられるやうになつたら又何處か海岸の空氣の好い處へてもやつて、十分養生をさせなければ迚も丈夫な體にはなりますまいよ。」と云ひながら何か他の事でも考へてゐるやうにぢつと眼を据ゑて考へ込んでしまつた。

それを見ると喜三郎は噴笑して、

「母様はそれだから可けないんですよ。一つの心配がなくなると、先々と自分で心配を探して歩かなくつちや氣が濟まないんだもの、病氣さへ癒りやそれで可いぢやありませんか。また大洗へでも行つて、二三箇月養生して來れば舊のやうな丈夫な體になるに極まつてゐるんですもの。それに今度はもう家の人になつたんだから津崎の義兄さんなんかに氣兼ねをしないで、ゆつくり養生することも出來るんだし……。あゝさうだ。僕ももう直に冬季休暇になるんだから、今度は姉さんに頼んで一緒に大洗へ連れてつて貰はうや。ねえ、母様。僕が隨いていけば姉さんも心強くつて宜う御座んすねえ、一緒に行つてもいゝでせう。」喜三郎はもう一人でその氣になつてゐた。

二

「お前も隨分氣が早いねえ。今からそんな事を極めといて何うするもんですか。」と、母親は又笑顔になつて、「冬季休暇よりも何によりもその前に大事な學期試驗があるんぢやないか。今度はひとつ一生懸命に勉強して善い成績を取つて呉れなくちや可けませんよ。姉さんも此な事になつてしまつたんだし、母様がほんとに頼りにするのはお前ひとりなんだからねえ。お前が早く學校でも卒業して一人前の立派な人間になつて呉れなけりや私やお父様にお詫びを申し上げる顔がありやしません。もう姉さんの病氣も心配することは要らないと云ふんだから、明日から、學校へお出でなさい。」母親は諄々と訓すやうな調子で云つた。

喜三郎は自分の責任を感じるやうな、氣耻かしいやうな妙な顔付きをして聞いてゐたが、唯母親の期待に背くまいといふやうに子供らしく肩を聳やかしただけで何とも返事をしなかつた。

母親はそれから長いことたつた一人で何事か深い思ひに沈んでゐたが、やがて思ひ切つたやうにむくむく起き上つて、

「私ももう起きませう。頭痛がする位てこんなに弱り込んでしまつては仕様がない。」と云ひながら、そゝくさ着換へをしはじめた。そして何か氣懸りらしい調子で、

「あれから田中から電話は懸つて來なかつたかい？」と訊いた。

「え、誰れからも懸つて來ないやうでした。今叔父さんの處へは僕が一寸懸けましたけど。」

「まあ、手廻しが早いねえ。姉さんの容體を申上げたのかい？」

「え、叔父さんも大變喜んで被居いましたよ。そして今日は一寸用事があるから晩てなきや來られないつて云つてらつしやいました。」

「まあ、さうかい。ぢやきつと田中の所へ行つて下すつたんだねえ。」と、母親は獨語を云ひながらその儘臺所の方へ行つてしまつた。

跡に殘された喜三郎は所爲なさゝうにぼんやりしてゐたが、やがて起上つて

口笛を吹きながら輕い足拍子をとつて椽側へ出た。そして晴れやかな顏をしながら離座敷の方へ行つた。

大瀧も歸つた後と見えて、病間には看護婦がたつた一人で眠さうな顏をしながら鉛筆を甜めなめ病床日誌を付てゐた。俊子は白蠟のやうに蒼ざめた顏を夜着の襟に埋めて、さも快よさゝうにすやすや寢息をたてゝゐた。無雜作に束ねた髮は枕から崩れ落ちて、息をする度に輕く搖いでゐる。落ち窪んだ眼にも、隈の出來た小鼻の傍にも、色の褪せた唇にも見違へるやうな衰弱の痕は印してゐるが、それでも何處か嵐の吹き去つた跡のやうな落着いた平安が顏一面に浮いてみえた。喜三郎はをづをづその顏を覗き込んだが、憂慮に包まれた昨日に引換へて、今日は姉の容貌がこんなに美しく見えたことはないとさへ思ふ程氣が噪いでゐた。

喜三郎はやがて窓際へ行つて有り合ふ座蒲團へ坐を占めた。姉が眼を覺ましたら久し振りで何か話さうとそれを樂しみにしながら、そこらにあつた雜誌を取上げて讀むともなく頁々に眼をさまよはせてゐた。

西へ傾いた日射しは小春日和のやうにほつかりと障子の面に射し渡つて、間内は何ひとつ隈もないやうにあかあかと照し出されてゐる。藥の蒸氣を立てるために大火鉢の上へかけてある藥鑵はひそやかに喘いで、眠りを誘ふやうな溫氣が四邊一面に甘い藥の匂ひを漲らせてゐる。

何處かで小禽の聲がちゝと聞えた。

三

俊子は暫らく經つと喉でも渴くのか、微かに舌を鳴らしながらぽつかり眼を睜いた。

「あの、牛乳を少し飲まして下さいな。」と、彼女は身動きもしずに看護婦の方へ云ひ懸けたが、その聲は腑がぬけたやうにまるで底力がなかつた。

それを聞くと喜三郎はばたりと雜誌を伏せて、姉の顏を覗き込みながら、

「姉さん、もう眼が覺めたの、氣分は何うです？」

「あら、喜三郎さんもそこにゐたの。」と、俊子は勢ひのない笑顏を見せて、「何んだ

かまだはつきりしないけど、頭痛はとれたし、息も樂になつたから胸が清々したやうだわ。」

「さうでせうとも。なにしろ熱がすつかりとれてしまつたんだからもう大丈夫ですよ。隨分長い間、さぞ苦しかつたでせうねえ。この二三日はもう迚も可けないだらうと思つて、皆して何んなに心配したか知れやしませんよ。」

「私ももう今度こそは助かるまいと思つて、すつかり諦めてゐたのよ。苦しい時には氣が遠くなつて何の感じもしないから宜かつたけれど、熱が少しでも下るともう切なくつて切なくつてねえ、此儘死んでしまへばいゝと思つたことも幾度だか知れやしないわ。」と切なさうに呟きながら喜三郎の顏を見てゐたが、やがて急に落ち窪んだ雙眼に一杯涙を浮べて、

「ほんとに皆さんに心配を懸けて濟まなかつたわねえ。津崎の方もあんな事になつてしまつたのに、その上こんな病氣までして、……姉さんはそれを思ふといつそこの儘死んでしまつた方がいゝやうな氣がするわ。」

「そんな馬鹿なことを云ひ出しちや可けませんよ。折角癒りかけたのに緣喜

が悪いぢやありませんか。」と、喜三郎は姉の言葉を揉み消すやうに云つて顔を背けながら、「あんな津崎の義兄さんの事なんか心配する必要はないぢやありませんか。あんな人は何うなつたつて構やしない。それよりも姉さんの體の方が幾ら大事だか知れやしない。」と氣負つて云つたが、何だか一座が漸次と濕つぽくなつてゆきさうなので、話題を變へながら、

津崎と云へばねえ、姉さん。一昨日の晩杉浦の毅さんが來ましたよ。姉さん知つてゐる？」

俊子は久しく聞かなかつた懐かしいその名を耳にすると、かつと惱亂したやうに頰を染めた。病氣になつて以來、まるで消息も聞かないし、それに前後の事情が何うなつて居るのかそれもまるつきり分らないので、毅といふ名が次の瞬間には淡い恐れと不安とに彩られながら心に映つて來た。そしてまた急にその名を云ひ出した喜三郎の思惑も推し兼るので、彼女は返答に困つて唯まじまじしてゐると、喜三郎は何氣ない調子で、

「一昨日の晩、さうだ、丁度姉さんがひどく苦しんでゐる最中に來たんだから知

らないでせうねえ。僕も實は知らなかつたんだけど、あとで叔父さんに聞いたんです。」

「まあ、さう……何にしに被來つたんだらう。」

俊子は眼を逸らしながら怪訝さうに呟いた。

「それは僕も知りませんけど、叔父さんは姉さんの病氣見舞に來たんだつて云つてらつしやいましたよ。」喜三郎はさう云ひながら何か言葉の底に祕密を隱してゐるやうな眼つきをした。

四

喜三郎はやがて姉が餘り氣懸りな樣子をしてゐるので、前後の考へもなくつい口を滑らしてしまつた。母親や叔父の話の末からそれとなく聞き知つたいろいろな事の紛紜をすつかり話してしまつた。原田が杉浦家へ押懸けて行つたことも、田中がその中へ入つてひとりで交渉の任に當つてゐることも無論話した。そして姉に安心を與へ度い一心から津崎の事を自分の想像まで加へて

散々悪ざまに云ひ罵しつた。

俊子は默つてその一言一句も聞き洩らすまいとするやうに眼を据ゑて聞いてゐたが、話が津崎のことになると喜三郎の言葉が兎もすると露骨になるので、傍にゐる看護婦の思惑も計り兼ねて、やがて濕布を交換するやうにと命じて、彼女を暫時の間病間から避けさせた。そして喜三郎とたつた二人になると、乳首を添へた牛乳の壜を枕許へ寄せて貰つて、靜かにそれを吸ひながら話の一伍十什に聞き入つた。

「ぢや原田は到頭毅さんにも家と同じやうな御迷惑を懸けたんですね。まあ、ほんとに何うしたらいゝでせうねえ。私まさかそんな酷いことはしまいと思つてゐたのに……。」俊子は喜三郎の言葉が切れると乳首を口から離しながら途方に暮れたやうに云つた。

「なんでも昨日一杯に返事をしなけりや毅さんの母様にさう云つて大事にしてやるつてさう云つてゐたさうですよ。隨分酷いことをするぢやありませんか。何にも知りもしない毅さんこそいゝ迷惑でさあねえ。」

「まあ、そんな事になつたら私どうしよう。それてなくつてさへ御氣の毒だと思つてゐるのに……。」と、俊子は焦々したやうな聲で云つたが、そのうちに眩暈でもするのか身體を急に引き縮めて苦しさうに咳き入りながら眼を瞑つてしまつた。

喜三郎はそれをみると吃驚りして、

「姉さん、姉さん。何うしたんですよう。」と云ひながら臥床の傍へ居坐り寄つた。そしてはらはらしながら姉の顏を覗き込むと、俊子はまたぽつかり眼を睜いて、

「いゝのよ。何うもしないの。」と絶入るやうに云つて、ほんとに私何うしよう。どうしたらいゝでせう。」さう云ふうちにも涙は一滴づつ頰に傳つて來た。そして彼女の病み疲れた神經にはほんの些細な感情でも恐ろしい反應を惹起させると見えて、かすかに慄へる唇にも、きつと睜いた雙眼の瞳にも激しい歇斯的利性の恐怖が歴々と現はれて來た。

喜三郎はそれを見ると益々不安になつて來て、つまらぬ自分の饒舌を後悔し

ながら、いろいろに云ひ慰めようとしたが、俊子はそれには少しも耳を藉さうとはしなかつた。そしてしまひには譯もないことを口走りながら胸に押塞がつて來る咳と一緒に聲を曳いてしくしく啜り泣きしはじめた。

喜三郎は到頭處置に窮して、涙ぐみながらついと起ち上つた。そして離座敷を出て、茶の間へ驅けて行つたが、そこにゐると思つた母親の姿も見えないので、今度は其足で客間の方へ驅けて行つた。そしてそこの紙襖をがらりと引き開けようとすると、その時ふとなかで人聲がするのに氣がついて、隅の方をそつと細めに開けてみた。なかではかつかと熾つた火鉢を取圍んで、叔父と母親と、もう一人見知らぬ洋服の男が何か重大な事件でも起つたやうな眼眸をしながらひそひそしめやかに語りあつてゐた。

五

喜三郎は少時の間紙襖の陰へ立つてなかの話聲をこつそり偸み聞きした。なかでは洋服の男が檢事だとか上告だとか横領罪だとかいふやうな恐ろしい

言葉を頻に云ひ續けてゐる。途中から聞いたので話の筋道はさつぱり分らなかつたが、やがてそれが津崎に關した事だといふことだけはやつと見當がついた。彼は何かしら氣になるので先から先へと氣を配りながら聞き入つてはゐたが、姉のことを思ふと心配で耐らないので、到頭思ひきつて紙襖をそつと押し開けて、

「母様、母様。」と、小聲でなかへ呼び懸けた。

母親はその聲を聞きつけると吃驚して此方を振顧つた。一座はそれと同時にぴたりと話をやめてしまつた。

「母様。また姉さんが變になつてしまつたんです。直ぐに來てみて下さいな。」

喜三郎は何か惡い事でもして氣が咎めるやうに恐る恐る云つた。

母親はその一言てみるみるさつと顏色を變へて、

「まあ、何んな鹽梅だい、また熱でも出て來たのかいッ」と云ひながらそわそわ起ち上つて、叔父を眼で促して座敷から出て來た。

叔父も呆氣にとられたやうな眼つきをして躊躇つてゐたが、

「田中さん、ちよつと失禮します。」と洋服の男の方へ云ひ殘して、すぐ母親の後へ引添つて出て來た。

喜三郎は默つて先へ立つた。二人はその後に隨いてもうそろそろ薄闇が迫つてくる廊下を俊子の病間の方へ行つた。

離座敷へ來てみると、もう俊子の枕許には電燈が點つて、戸外から障子越しに流れ込んで來る紅黃い夕暮れの光と力を爭ひながら四邊を夜ともつかず晝ともつかぬ不思議な色に照し出してゐる。そのなかで俊子は頭まですつぽり夜着のなかへ入つて、上の懸蒲團をかすかに波打たせながら頻りにせぐり泣いてゐる。そして臥床の傍には看護婦が膝の上へ兩手を束ねた儘途方に暮れたやうにしよんぼり坐つてゐた。

母親は間うちへ入ると突如、

「一體何うしたんです？」と云ひながら訝しむやうに看護婦の顏を見た。と、彼女はふいに顏を上げて、

「何う遊ばしたんで御座いますか、私はちつとも存じませんが……。」と云つて、

喜三郎の方をじつと見た。喜三郎は耐らないやうに眼を落とした。

「また容體でも變つたのかね？」今度は叔父が枕許に歩み寄つて、心配さうに訊いた。

「いゝえ、そんな御樣子はちつとも見えませんですが。」と、看護婦は打消すやうに云つて猶も喜三郎の方を見ながら、

「唯今まで若樣と何かお話しになつて被居いましたんですが、私がお濕布のお仕度をしに參りまして歸つてみますと、この通り御機嫌が變つて、何を申上げてもまるでお聞入れになりませんのです。」

母親はそれを聞くと眼を移して喜三郎の顏をみた。そして彼の胸のなかを讀むやうな眼つきをしてゐたが、やがてきつとした顏色になつて、

「喜三郎、お前は姉さんに何か話して聞かしたんだね？」と低いながら激しく詰るやうな聲で云つた。

「だつて姉さんが……。」喜三郎は急にをどをど云ひ澱んで泣きさうな顏になつてしまつた。

「ほんとに仕様がない人だねえ。あれほど云つちや可けないつて云ひ付けて置いたのに。今が大事な時ぢやないか。」母親は怒つたやうな當惑したやうな口小言を云ひながら、その儘俊子の枕許へいつてそつと坐つた。

六

「俊子、俊子。」と、母親はやさしい聲で呼びながら夜着の襟を持つてそつと俊子の顔を覗き込んだ。

俊子はもう精も根も盡き果たやうに泣き疲れて、括り枕の懸布をじとじとに濕らしながら肩當ての毛皮の中へ顆を埋めてゐたが、やがて泣き膨した眼をあげて、

「母様。」と呟いた。後はせぐり來る嗚咽に唇を塞がれて、何か云はうにも言葉が閊へて出て來なかつた。

「これ、俊子。一體お前は何うしたと云ふんだねえ。見つともないぢやありませんか。しつかりなさいと云つたら。」と、母親は氣を引立てるやうに云つたが、

それ位なことでは泣き止みさうもないので、今度は叔父の方を振顧ながら、

「ほんとに困つたことになつてしまひましたねえ。かう神經が昂ぶつてしまつては何を云つて聞かすことも出來やしません。」

「まあもう少し靜かにして置く方が可いでせう。泣度いだけ泣いてしまつたら氣が晴れるでせうから。」と、叔父は強て沈着いた調子で云つたが、さう云ひながら自分でも沈着いてゐられないと見えて、枕許の正面の處へ來て母親と並んで坐りながら、

「おい、俊子。何んでそんなに泣き度いのだ。何も泣くことはありやせんぢやないか。」と作り笑ひを浮べながら慘ましさうに俊子の顔を瞶めた。

俊子は暫らくすると漸う少しづつ泣き止んで、枕許にゐる二人の顔を思入つたやうな眼つきで涙とともに見くらべながら、

「今喜三郎から聞いたんですけど、ほんとに飛んでもない事になつてしまひました。私何う致しませう……。」と途斷れとぎれに云ひ續けた。

それを聞くと叔父は力めて快濶に裝ひながら、同情の溢れた優しい調子で、

「お前が泣くのはあの事なのかい。あの事ならもう少しも心配することは要らんさ。もうすつかり解決が着いたんだから。」と云ひながら母親の方を向いて、

「なあ、嫂さん、もうかうなつた以上はすつかり俊子に話してしまつた方が可いてせう。どうせ隠して置いたつて早晩知れる事だし、それに要らんことで心配させてまた體にでも障ると却つて馬鹿な目を見んけりやならんのですから。」と叔父は我慢しきれないやうに云つた。

「さうですねえ。でもう少し氣が落着てからの方が宜かあ御座んすまいか。」母親は先を危ぶむやうな考へ深い眼つきをして云つたが、叔父はすぐその言葉を引取つて、

「いや、それもさうですが、併し此の場合話すのが一時間遅れゝば一時間だけ餘計に氣を使はせる事になるのですからなあ。どうせ話さんけりやならんものなら、一刻も早く話して聞かせて、俊子にも安心のいくやうにして遣る方が可いと思ふんです。第一これほど心配しとるものを可哀相ぢやありませんか。」と、

叔父はもう一度俊子の顔を見遣りながら憐れむやうに云つた。

母親は仕方がないと云ふやうに默つて合點いた。

看護婦は自分がゐては邪魔になると見て取つたか、消毒用の金盥を持つて皆に氣付かれないやうにそつと病間を出ていつた。

七

叔父は俊子の顔をぢつと瞶めながらやがて改まつた嚴格な語調になつて、

「なあ、俊子。お前にはもう暫らく話さんで置く心算だつたが、實は津崎が今日裁判所からの令狀で、到頭拘引されてしまつたのだ。」と打割つて話して聞かせた。

餘まり意外な事實なので、叔父も母親もさぞ俊子が吃驚することだらうと思つてゐたが、彼女はその割りには顔色も動かさずに、

「まあ拘引されましたんですつて？　矢張り駄目だつたんで御座いますわねえ。」と寧ろ以前からその事を薄々豫期してゞもゐたやうな口振りで靜かに涙を拭

きながら云つた。

叔父はその様子をみると稍張合ぬけのしたやうな顔をして押默つてしまつたが、やがてまた言葉の調子を變へて、

「いや、どうも何とも云ひようのない不埒な話で、お前としても籍はまだ津崎のものになつてゐるのだから、さぞ厭な氣もするだらうが……。」と云つて、津崎が今朝拘引されて行つた顚末を搔抓んで話した。

津崎の犯した罪といふのは文書僞造と横領罪であつた。兜町で人知れず一攫千金の夢を見てゐた彼は、長い間結託してゐた仲買の一人が夏の頃からの株式界の變動で急に沒落してしまつたので、その餘波を受けて却て思ひも懸けぬ莫大な負債を身に引受けてしまつた。その跡仕末に窮して彼は到頭銀行にあつた某子爵家の株券を融通したり、文書を僞造して他の關係會社などから金を引出したりした。それが最近に至つて少しづつ曝露しかゝつて來たので、彼は慌てゝ罪跡を糊塗しようと試みた。大阪へ金の調達にも行けば、九州の郷里にあつた自分の山林なども賣拂つたりした。併しすべては到頭無効に終つた。

銀行の方でも此頃内輪が面白くない上に決算期も近づいてきたので、處置に窮して遂にわれとわが銀行の重役たる津崎を告訴しなければならぬやうな非運に陷つてしまつた。

初は重役達のなかでも銀行の信用を重んじて津崎を庇ふ方法もいろいろに講じられたのであつたが、凡ての事情はそれに味方しなかつた。津崎が拘引されると同時にその犯罪の帷幄に參じた原田も共に拘引された。そして田中が今日津崎家を訪ねた時は丁度家宅捜索の最中であつたと云ふ。

その話を聞くと俊子は幾度か深い嘆息を洩しながら自ら恥るやうな顔をした。併し叔父や母親が心配してゐたやうな憂慮の風はなくて、終には却て津崎の拘引を氣味がいゝと思つてゐるやうな氣振りさへみせてきた。

叔父は調子に乘つて、津崎の人格や、所業をば散々罵倒した。彼の男は高等教育を受けた惡漢だとか、彼の社會的生命は全然亡失してしまつたとかいふやうな言葉は幾度となく繰返された。そして此上は一刻も早く手續をして、俊子の籍を津崎家から取返してしまつた上、津崎へ殘してある彼女の荷物や所持品も

すつかり始末をつけて、斷然彼との關係を斷つてしまはなければならぬと云つた。そして田中が早速その手段に取懸る心算でゐることまで云ひ添へた。

俊子は最後まで默つて聞いてゐたが、漸次と焦々した顏色になつてきて、やがて幾度か云ひそびれながらやつと思ひ切つたといふ風に、

「それで杉浦さんの方のことは何うなりましたんです？」と口を切つた。

「うん、さう、さう。その話もせんけりやならんのだが……。」と、叔父は大きく合點いたが、少時經つと考へ深い眼で俊子の顏をきつと瞶めながら、「田中の話では何でももう原田が杉浦の夫人にあの話を申出してしまつたらしいのだが、併し眞實の事はまだよく分らんのだ。兎に角毅さんは昨日から家を出たつきり歸つて來んと云ふのだからな。」と云つて、叔父は妙に言葉を濁してしまつた。

「まあ、お家へお歸んなさらないんですつて？」と、俊子はその咄嗟俄に顏色を曇らせた。

「いや、恐らく夫人の差金で何處かへ隱れてゐるか、或は居留守を使つてゐるのだらうとは思ふが……。」と、叔父は打消やうに云つて、「兎に角、他人の事は何うでもいゝぢやないか。此方の方の始末から早く附けんけりや、今日の場合またどんな面倒なことになるか分らんのだからなあ。」叔父も母親もその言葉と一緒に漸次と憂愁に包まれてゆく俊子の顏を暗然と打眺めた。

車中の人

俊子はそれから日に増し元氣づいて來た。食慾が增進するに從つて、血色も漸次と生々して來て、健康が再び彼女の體に歸つてくる兆候が日々に著るしく見えて來た。

併し健康が恢復するにつれて、彼女の神經は反對に益々歇斯的利的に傾いてゆくらしかつた。病中のやうに外部にまで發動してくることは少くなつたが、それでも心中の苦悶は餘程激しく彼女を苦惱させてゐるやうに見えた。寐ねがてに過ごす夜も多いらしく、そして人の見てゐない折々には聲を呑んで泣いてゐることなども珍らしくなかつた。彼女が何を思ひ、何を苦悶してゐるかは知つてゐても、松倉一家の人達は創口に手を觸れるやうな慘ましい氣がして、彼女の枕許でそれを語ることを態と避けた。そして唯、その苦悶が漸次と恢復しつゝある彼女の健康に害を與へやしまいかと云ふ事ばかりをひどく恐れてゐた。それは他人の手では何うにも出來ない事なのであつた。

津崎も原田も檢事局からすぐに未決へ送られてしまつたので田中もその後離婚の談判を進める手段にこまつた。津崎の入監を聞いて、郷里からは小學校の教員をしてゐる彼の弟が早速に上京はして來たが、まだ年若なうへ、まるで事情を知らないので、談判の對手には到底なれなかつた。そして朴訥な、頑固な男なので、一途に兄の犯罪を否定する許で、松倉の云ひ分などには一つも耳を藉さなかつた。て、處置に窮して幾度か談判を重ねた揚句、兎に角、津崎の豫審が決了した上で正式の離婚はすることにして、俊子の手廻りの衣類や、日用品だけをやつと津崎から實家へ引取つて來た。

杉浦の方はその後何うなつたのか薩張り樣子が分らなかつたが、俊子が座敷うちの散歩位は出來る頃になつてから、田中の手でやつとその間に伏在してゐる事情が略ぼ探られた。原田は事實に於て毅の母なる杉浦夫人に對して嚴重な談判を持懸けたのであつた。今度の清水子爵家との結婚談が破約になつて以來、毅の擧動にそれとなく疑ひを抱いてゐた夫人は、原田の話を聞くと一も二もなく彼と俊子との關係を信じてしまつた。そして家の名譽と尊嚴の傷けら

れるのを恐れる餘りに原田の申出した條件はその儘そつくり承認してしまつたらしかつた。何ういふ形式でその條件が受入れられたかはよく分らなかつたが、田中の推測では無論尠からぬ金で毅の惡名が購はれたのであらうと云ふことであつた。そしてその事のあつたすぐ翌日、原田が拘引された樣子から推してゆくと、或は思はぬことから兩家を恐喝した姦通の事實までが曝露しやしまいかと云つて、田中は稍〻安堵の思ひをしてゐた松倉一家の人々に又新しい心配の種を殘して行つた。

それから暫らく經つて、田中は又新しい事實を齎して松倉家へやつて來た。行方のよく分らなかつた毅は實際に今杉浦家にはゐないのであつた。原田の最後の來訪があつた日、杉浦家では夫人と毅との間に丁度松倉家で起つたやうな激しい爭論があつて、毅はその夜思ひ切つた手紙を母に宛てゝ殘したまゝ突然何處へともなく姿を隱してしまつたのであつた。平常から毅の氣象を恐れてゐる夫人はその失踪を知ると今度は蒼くなつて心配しはじめた。そしていろいろに手を盡して行方を搜した結果、二三日前になつて彼が箱根の塔の澤の

さる溫泉宿に隱れてゐることが、やつと分つて、今歸宅を勸めてゐる最中だといふことであつた。

事件はその儘で一日一日と漸次に日數を過して行つた。唯默つて時の推移を待つより他には仕方がなかつた。そして俊子は津崎や毅とはまるで別な境遇に立つて、唯ひとり我れと我が思ひを胸に包みながら惱ましい日を送らなければならぬ身となつてしまつた。

十一月も中旬過ぎになると、俊子の健康も漸う轉地に適する程度に恢復したので、今度は沼津の海岸にある極く親しい知己の別莊を借りて、そこでゆるゆる病後の靜養をする準備をした。

二

俊子が東京を發つ日は雲ひとつ見えぬ好晴で、朝なあさなに薄霜の置く今日此頃にしては珍らしい程ほかほかした日和だつた。今度は母親か喜三郎かふたりのなかの何方かゞ一緒に隨いてゆく筈になつてゐたのだが、津崎の方の事

件が何時どんな轉換を見るか分らないし、それに喜三郎の方は學期試驗を眼の前に控へてゐるので、矢張り大洗の時と同じやうにお初が伴をすることに極まつた。そしてその前の日、既に夜具や行李のやうな大懸かりな荷物と一緒に沼津へ向けて先發させてあつたので、俊子はこまこました身のまはりのものを入れた信玄袋ぐらゐな簡單な旅支度で發つことが出來た。幸ひ土曜日だつたので學校を少し早めに退いて、喜三郎が沼津まで保護がてら一晩泊りの豫定で送つてゆくことになつた。

新橋の停車場を發つたのは丁度午過ぎて間もない時分だつた。大瀧の處へ廻はつたり、銀座で買ひものをしてゐたりしたので遂時間を外して、發車間際になつてやつと列車へ乘込んだ。學校からすぐ停車場へ廻つた喜三郎は列車へ入つてからまで、待たされた不平をぶつぶつ云つてゐた。母親は發車の信號が鳴つた後も車窓から首をさし入れるやうにしながら、呉れぐれも體を大事にしろとか、東京の方の事は一切心配するなとか云ふやうな分り切つた事をくどくどと煩さく訓して聞かせた。そして漸次と列車が遠のいてゆく時には俊子の

眼にも母親の眼にも譯もない涙が輝いてゐた。

朗らかな日の光の充ち溢れた野や海の景色は長い間病床に閉ぢ籠められてゐた俊子の眼にはどんなに快よく映つたであらう。枯れ色をみせた雑木林、たわたわと米の稔つた水田、さてはまた麥畑に續く村里の家並などは彼女の眼を痛いほど刺激して、再生の歡びは時折抑へきれぬ力を以て思ひのある彼女の胸にもつきあげて來た。彼女はしまひには喜三郎から顔を背けて冷たい窓硝子に頬を押しつけるやうにしながら移り變る窓外の景色をうつとり瞶めてゐた。

横濱へ着くと、時間が時間なので、何處か海濱の別莊へでも一晩泊りて出懸けるらしい人達がぞろぞろと乘り込んで來た。薫りの高い葉卷を匂はせながら快活に話し合ふ西洋人の群はいつともなく車中の色彩をすつかり變へてしまつた。喜三郎は信玄袋のなかからボンボンの袋を出して約ましやかにぽりぽり甜りながら西洋人の會話に聞き惚れたり、姉の樣子を偸みゝたりしてゐた。

車中の人影が少しづつ薄くなりかけた頃には列車はもう馬入川を渡つてゐた。大磯へつくとまた乘客がぐつと減て、跡に殘された人蒸息と煙草の煙が徒

らに寂しさを彩るばかりであつた。

大磯を發車すると間もなく、俊子は手の汚れが氣になるのでそれを洗ひ落とす心算で何氣なく洗面所の方へ行くと、その時ふと隣の一等室に思ひ懸けない人の姿を發見した。華模様を置いた座席へ埋まるやうに腰を下ろしながら葉巻を吸つてゐる洋服姿の紳士と、もう一人は毛皮の襟巻をした年若い夫人である。それは毅の兄の恂と、妹の夏子だつた。

俊子はひどく吃驚してそのまゝ其處へ立止つてしまつた。

三

俊子は息が彈むのでたゞ、

「あら、俊子さん！」夏子は俊子の姿を見つけると、突然さも吃驚したやうに聲をかけたが、その聲の底には妙に氣拙いやうな調子があつた。

「まあ、……」と云つたぎり低く頭を下げて、よろよろしながら距ての扉の把手へしつかりつかまつてしまつた。

「ほんとにお珍らしい、そこは危う御座んすから、さあ此方へ來てお腰掛け遊ばせよ。」と、夏子は氣を變へて例の調子になりながら、つかつか起ち上つて來て、俊子の手を執つて自分の座席へ連れて行つた。俊子は引かれるまゝに恂へ挨拶しながら夏子の隣へ腰を懸けた。

「ほんとに暫くでしたわねえ。御病氣だつて云ふお話は聞いてたんですけど、安達が先達から演習へ行つてゐるもんですから、ついお見舞ひにも伺はないで、御免遊ばせよ。」と、夏子は力めて親しげに云つて、「一時は隨分危險だつたやうなお噂ですけど、かうして見るとさう大した御病氣のやうには見えないわねえ。もうすつかりお宜しいんでせう？」

「え、有難う。お庇護さまで今度こそほんとに命拾ひをしましたわ。」俊子は嬉しさうに云つて、夏子の顔を懷かしげに見ながら、「隨分思ひ懸けない處でお眼に懸つたもんですわねえ。何處へ被往るの？」

「え、ちよつと函根まで行くんですの。」夏子は冷たい眼眸で兄の恂と顔を見合はせながら云つた。

「函根へ？まあ……」俊子はその瞬間にあの事件以來函根から歸京した噂を聞かない毅の事を思ひ浮べながら、「何か御用でもおありになるんですか？」と探るやうに訊ねた。

「え、少し急用が出來たもんですから……。」と夏子は言葉を濁して、「貴女は何處まで被往るの？」

「私　これから轉地先へ參りますの。」

俊子は話を逸らすまいとして手短に答へた。

「まあ、此れから轉地遊ばすの、何方へ？」

「沼津ですわ。」

「沼津？まあ、お羨ましいわねえ。彼地は寒さ知らずの土地だから此れからはさぞ宜う御座いませうねえ。」と云ひながら夏子は俊子に口をきかせまいとするやうに、「私も少し何處か海岸へでも行つてゐたいと思ふんですけど、今の體ぢや迚もそんな我儘は出來ませんわ。そこへいくと貴女は結構ね。　私もちつと病氣でもしようかしら。」と云つて聲高に笑つた。

俊子は氣のない微笑みを洩らして、

「ほんとに貴女はいつお眼に懸つても御丈夫さうですねえ。貴女こそほんとにお美やましいわ。」

「お庇護さまで體だけは丈夫ですけど、丈夫だからと云つてちつとも面白いことはありや致しませんわ。　私から云ふと貴女みたやうに方々の海岸へでも行つて、保養だのなんのつて、我儘が云へたらさぞ面白いだらうと思ふわ。」その言葉には皮肉があつた。

俊子は氣恥かしさうな顏をして微笑んでゐたが、その時、姉の行方を氣遣つて喜三郎が扉の處からそつと顏を出した。それをみつけると夏子は晴れやかな聲を作つて、

「まあ、喜三郎さんも御一緒なの。喜三郎さん、喜三郎さん。貴方も此方へお出で遊ばせよ。」

それを聞くと喜三郎は恥しさうに顏を赧めて叮嚀に辭儀をした儘また自分の座席の方へばたばたと遁歸つてしまつた。

四

「まあ、變な方ですわねえ、そんなにお隠れなさらなくたつて可いぢや御座いませんか。ほゝゝゝ。」と、夏子は喜三郎の後姿を見送りながら艶やかに笑つたが、

「でもほんとに大きくおなりになつたわねえ。來年はもう御卒業なんですつてねえ。お背なんか貴方よりは却ておみ大きいぢやありませんか。」

「なんですか、弱蟲で困りますの。」俊子は外の事を考へながら氣のない返事をした。

俊子には夏子の思ひ切つて悧巧な樣子が漸次と變に思はれて來た。あの事件以來、初めて出逢つた人にしては餘りに言葉つきがさり氣なさ過ぎる。毅とはあゝ云ふ噂を立てられ、良人の津崎は又津崎で法律上の容易ならぬ罪を犯した今の俊子としては到底夏子からこんな待遇を受ける筈がない、かう見えても夏子は心の中では何も彼も悉く知りぬいてゐて、それとなく俊子を弄んでゐるのではないかと思ふと、彼女は急に穴へでも入り度いほど羞恥を感じて來

た。殊に未決監へ入つてゐる良人、それを思ふと譬へ二人の間にはもはや夫婦關係は斷絶したにしろ俊子は胸を刻られるやうな苦痛を覺えずにはゐられなかつた。

恂はそれ迄一言も口をきかなかつたが二人の話が切れるとまた葉卷に火を點けながら、突然冷笑するやうな調子で、

「私は新聞で、一寸拜見したんですけど、津崎さんは飛んでもない事でしたなあ。兎角あゝ云ふ敏腕な方はいろいろな事で世の中から注目されますから、無いことまで有るやうに噂されてしまうんですな。どうも實にお氣の毒な話だと。」

十分反感を含ませた口振りて云つた。

それを聞くと俊子はさつと顏色を變へながら俛首れて、

「あの事を仰有られると、私もうお耻かしくつて、とてもかうして皆樣にお眼に懸れる體では御座いませんのですけど……。」とをどをどしながら云ひ澱んでしまつた。

「いや、何も貴女に罪がある譯ぢやなし、世の中のことは總て行懸りですからな

あ……。」と、恂は冷たい聲て云つて、

「さうして貴女は津崎さんから御離縁になつたとか云ふ事を聞きましたが、ほんたうてすか？」

「は、もうすつぱり縁を切つて貰ひました。今度の事が起ります前からどうせさうなる事になつて居りましたんてすから。」と、俊子は切なさうに云つて、力めて氣を取直しながら、「またその事に就きましてお宅にまて何か御迷惑を懸けましたさうて、何を申上げましたか存じませんけど、どうせあんな人の申す事て御座いますから、お取上げにはなるまいと存じますけど、私、それが申譯がなくつて……。」

「いゝえ、あんな事は何とも思つては居りませんわ。」今度は夏子が慌たゞしくその言葉を引取つて、「實家ても皆てさう申して居りますの、まさか津崎さんはそんな事を仰有る方ぢやないんだから、これにはきつと誰か惡い人がゐて、問て何か仕事をしてゐるんだらうつてねえ。私達だつて、ねえ、兄様、皆さう信じて居りますわねえ。」

「無論さ。そんな馬鹿な事があらう筈がない。」

恂は葉卷を不味さうに吐き出しながら、俊子の方を向いて、「併しあの事に就ては毅の方にも多少責任があるんですから、彼も今度は隨分後悔してゐるやうです。それに母も此先また此樣なことが起るやうては彼の將來にも關するからと云ふんて、此際斷然彼に結婚をさせてしまう事に取極めたんてすが、私達もそれには至極贊成で、つまり一人てあんな事をしてぶらぶらしてゐるからそんな忌まはしい疑ひを受けることになるんてすからなあ。」といかにもさらさらした調子て云つて退けた。

俊子は俛首れた儘默つて聞いてゐたが、やがて低い聲て、

「さうなされば、それが一番結構て御座いますわ。いろいろ御迷惑を懸けて私毅樣にも何んてお詫びを申し上げていゝか分りませんわ。」とやつと此れだけ云つた。

「貴女も御存じでせう、ねえ、俊子さん。いつぞやそれ帝劇で御紹介した房子さんね、あの方が今度愈〻兄の處へ被來る事になりましたの。」と、夏子は俊子の顔を見ながら態と無邪氣な調子になつて、

「私ほんとにあの方好きなんですけど、あんな華族方から被來るんだから、私達は何だか肩が塞まるやうで、今から心配してますのよ。」

「そんな事は御座いませんわ。あんな平民的な方ですもの、ほんとにいゝ御緣ですわ。」俊子は自分でも何を云つてゐるか分らないやうな調子で云つた。

「でも清水家つて云ふと昔から有名な堂上華族なんださうですからね、房子樣はあんな氣のさくい方だからいゝけど、御親類の方なんかにお眼に懸る時には私達の方で氣が退けますわ。それに兄があんな性分ですから猶心配いたしますの。」夏子はさも困つてゐるといふやうな表情のなかに包みきれぬ得意の色を現はした。

俊子は帝國劇場の喫煙室で毅から聞いた清水家の話を思ひ出しながら、

「でもほんとに結構な御緣ですわ。」と同じ言葉を繰返してゐたが、やがて、「それで御結婚はいつ頃で御座いますの？」

「そりやまだよく決りませんけど、年内には濟ますことになつて居りますの。」

「まあ、ぢやもう直なんで御座いますわねえ。」と思はず聲の調子を張つて云つたが、それと氣付いて顏を赧めながら、「毅樣は今お宅なんですか？」

「え、その支度で忙がしいもんですから……。」と、夏子が言葉を濁さうとするのを恂は傍から引取つて、

「弟もあの事件以來すつかり體を毀してしまつたもんですから、今函根へ養生にやつてあるんです。實は今日此れから一寸見舞ひに行つてやらうと思つてゐるのですが。」彼は毅の失踪一件をまだ俊子が知るまいと思つてゐるらしく、何の心算でか此樣な事を饒舌つてしまつた。

「まあ、御病氣なんですつて？餘程お惡いんで御座いますか？」俊子はまた顏色を動かして訊いた。

「いや、例の神經衰弱なんてす。今度の事が餘程强い刺戟を與へたと見えて、いつもと違つて大分苦しんでゐる樣子ですが、これで懲りて少しは行動を愼むやうになるてせう。」と云つて苦笑ひをした。

「でも惡いと云つたつて體の方には別に障りはないんですから、出來ることなら明日一緒に連れて歸り度いと思つて居りますの。結婚の支度をするにしましても、何しろ當人が東京にゐて呉れなければ何かにつけて不便ですからねえ。」

夏子は兄が詰らない事を云ひ出して呉れたと云ふやうな顏つきをして、兄の顏と俊子の顏とを等分に見較べながら云つた。

そのうちに列車はいつの間にか茅葺屋根の續いた海沿ひを馳つて、やがて消魂しい轟響を松林の間に響かせながら眞暮に停車場のプラットフホームへ入つていつた。

「國府津、國府津」と云ふ驛夫の呼聲は流れるやうに車窓を掠めて聞えた。

「あら、兄樣、うつかりしてゐて、もう國府津ですわ。」夏子は慌てゝ起ち上つて、上の網棚から信玄袋と贅澤な洋傘とを取り下ろした。それを見ると恂も煙草を捨てゝ、傍に置いた鞄を取上げながら續いて起ち上つた。

「ぢや俊子さん。此處で失禮いたします。何うぞお大事に。またいづれそのうちにお眼に懸れますわねえ。」

「え、また……どうぞ兄樣によろしく。」俊子も起ち上りながら息の切れるやうな聲で云つて、我にもなく自分の心を先の胸に鐫りつけるやうな眼つきで夏子の顏を見た。

夏子は愛想のいゝ笑ひを洩らして、その儘恂の後に引添つて車室を出て行つた。

俊子は車窓に寄り懸つた儘暫らくの間二人の行方を見送つてゐたが、二人はプラットフォームへ降りると、そこに待受けてゐた溫泉宿の番頭らしい男の挨拶を鷹揚に受け流しながら改札口の方へ出て行つた。そして此方へは振顧り

もせずにそのまゝ停車場前の電車停留場の方へ急ぎ足に歩み去つてしまつた。番頭らしい男は赤帽と二言三言話し合つてゐたが、やがて二人から受取つた荷物を持つてちよこちよこ小走りにその後を追ひ懸けて行つた。と、みると、その男の袢纏には見覚えのある福住樓のしるしが染め出してある。思はぬ事から毅の居處が分つたので、俊子の胸には云ひ知れぬ嬉しさが湧き上つて來た。

自分の座席へ歸つてみると、喜三郎は車窓へ倚懸つた儘、學校の教科書を側へ投げだしてこくりこくり居眠りをしてゐる。俊子は餘程呼び起さうとは思つたが、何んだかたつた一人で考へ盡したいことが胸に溢れてゐるやうなので、其儘彼から少し離れた處へそつと腰を下ろした。

長い停車時間が過ぎると、列車は又吠えるやうな汽笛を殘して國府津を發車した。廣々として酒匂川の河盂に沿つて、今度は漸次と山地の方へ登つてゆくのである。西へ傾いた夕陽は函根、足柄の連嶺を濃紫に美しく染めなして、その山裾からは遠い彼方此方の村里の炊煙とともにもうそろそろ夢のやうな暮靄が立ちそめようとしてゐる。

俊子は肩掛のなかへ顎を埋めながら遠い處へ眼をやつてゐたが、その時にはもうどんな美しい景色も彼女の瞳には映らなかつた。さまざまな憂い悲しい思考がまるで先を爭ふやうに彼女の胸へ簇り起つてゐた。なかでも毅の結婚のことは心臓を押狹めるやうに彼女を悲しませた。毅とあの房子との結婚、そんな事が果して事實にあり得るだらうか、彼女には何うしても何う考へなほしてもそんな緣組が取結ばれようとは信じられなかつた。彼女の胸に深く刻まれてゐる毅の言葉と、毅の思念が堅くそれを打消した。

あゝは云つてゐながら、恂や夏子は自分と毅の間の噂を根にもつて、二人を遠ざけようとする爲め殊更に嘘を仕組んで話したのではあるまいか、さう云へば言葉の末々が妙に秘密の蔭をもつてゐた。殊に夏子の冷たいやうな馴々しいやうな煮えきらぬ樣子が俊子にはひどく憎かつた。態と津崎の話を持出して彼女を恥かしめた恂の口振りも腹立たしかつた。大磯へ來て初めて顏を合はせたやうな風はしてゐるが、二人は既に新橋を出る時から俊子が同車してゐるのを知つてゐて、態と彼女に逢ふのを避けてゐたのではなからうか。そんなこ

んなを思ひ合はせると、車中で聞いた總てのことは皆片端から嘘のやうにさへ邪推されてきた。そしてしまひには自分一人が皆から憎まれ、嘲笑はれ、退け者にされてゐるやうな突詰めた氣持ちさへしてきた。

俊子が涙の滲むやうな氣持で毅の事を一心に思ひ詰めだした頃には、もう夕陽もとつぷりと暮れて、列車は薄闇い谿間を隧道から鐵橋へ、鐵橋から隧道へ、まるで喘ぐやうな轟音をたてながら遲々として駛つてゐた。

七

列車は今富士の裾野の大傾斜をまるで疾風のやうな勢ひで眞驀に駛り下つてゐる。

車窓から眺めると、すぐ眼の前には眞白な積雪に掩はれた三角峰が地殼の亡靈のやうに矗々とそゝり立つて一望の枯野原や、杉並樹や、村々の小さな灯は蒼ざめた月光のなかに深く深く眠つてゐる。何處をみても大自然の寂寥と、黄昏から夜に移つた靜けさに包まれて、時々車窓を掠めてゆくシグナルの青い光

はその間に發する閃光のやうにみえた。

俊子はまるで石像のやうに身を辣めて唯一心に毅の事を思ひ續けてゐるのである。病み疲れた彼女の神經はもはや物音を聞いたり、光を見たりするだけの餘裕をもつてゐなかつた。戀しい毅の面影を瞶めてゐるほかにはもう何ものも彼女の心象の面には映つて來なかつた。

事實、俊子は今程毅を戀しいと思つたことは今迄に唯の一度もなかつたのである。良人には奴隷の如くに虐げられ、病苦には死を以て劫かされ、そして總てから漸う自由になつた今、彼女の靈魂には毅の他に誰の姿が映らう。處女の頃から自分でもそれとは氣付かずに戀してゐた戀は初めて目覺めて來た。果して眞實に戀してゐるのであらうかと疑つてゐた疑ひは今になつて初めて明白に確められた。そして確にさうと意識すると、彼女の畸形になつた感情はまるで奔馬のやうな勢ひで毅の方へ引付けられて行つた。渴したものが水を求めるやうに、今迄嘗て味はひ得なかつた愛情の高潮を毅の唇から、その胸から貪ぼり求めようとした。そして彼女の現在の境遇はそれに向つて自暴自棄な力

を擲たせるに十分だつた。

あの事件があつた以來、飄然と家を出てしまつた毅が、寂しい谿間の溫泉場でたつた一人孑然と日を送つてゐるさまは慘ましくも彼女の眼に映つて來た。この幾日、何を思ひ、何を惱んでゐたかは語られずとも彼女にはよく分つてゐた。いつぞや平河町の邸で逢つた後はまるで顏を合はせる機會もなかつた毅が、今から思へば此の幾旬の間、幻になつて影身に添つてゐたやうにさへ彼女には感じられた。あの眼、あの唇、あの頭髮、彼女には實に何ひとつとして忘れ得るものはなかつたのである。そして今、月の照り渡つてゐるあの山脈の彼方には繊しい毅が兄や妹に取圍まれながら懷かしいあの唇を動かしてゐるのかと思ふと、彼女にはその聲がひそひそと夜の空を渡つて聞えて來るやうにさへ思はれて、思はず胸を抱きしめながら人知れず涙を呑んだ。

喜三郎は姉が變な樣子をしてゐるのて、それをひどく氣にして、

「姉さん、何うしたの？寒いんぢやない？寒けりや僕の外套を着て被居いよ。」

と云ひながら學校の金釦のついた外套を脱いて、姉の肩へ羽織らせた。

「いゝのよ。寒かないの。」と涙含んだ聲で云ひながら俊子がそれをとつて返さうとするのを、喜三郎は後から抑へながら、

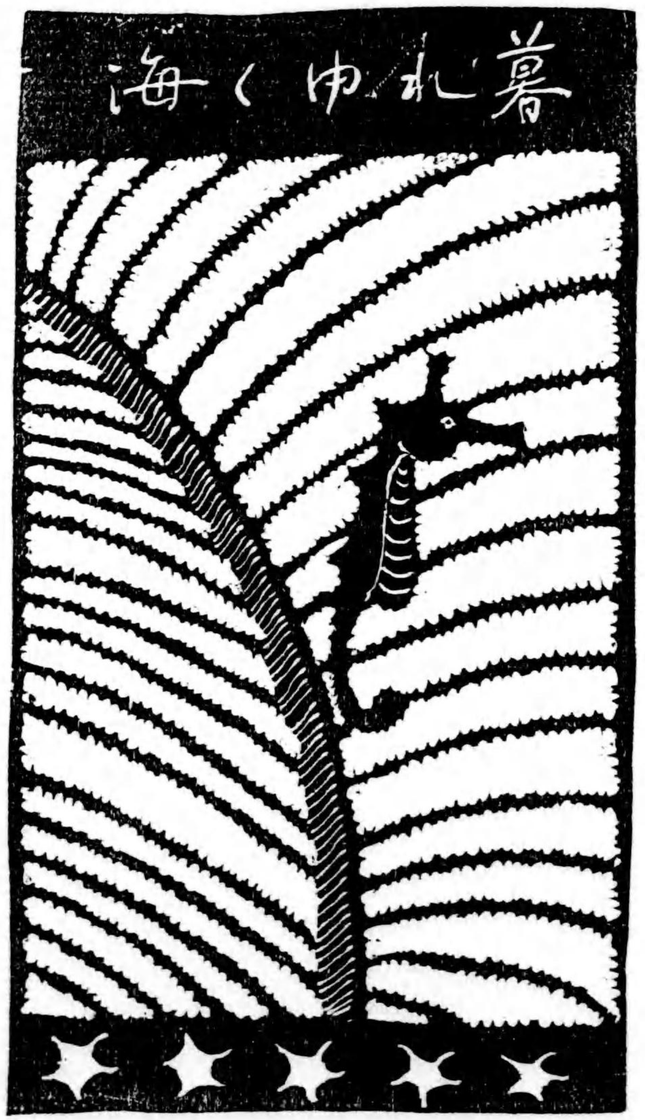
「いゝぢやありませんか。少しぐらゐ見つともなくつたつて着て被居いよ。又體に障ると可けないから。」

俊子はその言葉を聞くと急に感傷的な調子になつて、

「ほんとに心配ばかし懸けて濟まないわねえ。自分ぢやしつかりしてゐる心算なんだけど、つい心配が多いもんだから……酷い姉さんだとは思はないて頂戴よ。喜三郎さんがそんなにまで姉さんの事を思つて呉れるのかと思ふとほんとに嬉しいわ。」と云つて冷たい弟の手を握り緊めながら、「さあ、何か話しませうよ。默つてゐると氣が沈んで仕樣がないから。」と強ひて笑ひはしたが、その頰には涙が筋をひいて流れてゐた。

喜三郎は呆氣にとられたやうな顏をして今更のやうに姉の顏をぢつと瞶めてゐたが、さうかうするうちに何時の間にか樹立の彼方には遠い沼津の町の灯が點々と見え隱れに近づいてきた。

沼津の停車場へ着くと、プラットフォームにはお初が別荘番の息子に提灯を持たせて出迎へに來てゐた。彼等はその人達に導かれて、やがて寂しい夜の町を車で別荘の方へ駛らせた。



一

夜ひと夜、云ひ甲斐もない悪夢に襲はれながら寝ては覺め覺めては假睡みしてゐるうちに夜はいつしか東の窓からしらじらと明けそめて來た。波の音は何處からともなくひそひそと枕に通つて、吹く風もないのか、曉方の空はまるで死んだやうにひつそりと鳴りを靜めてゐる。

俊子は何うにかして眠りつかうと焦つてはみたが眼を瞑ればつぶる程、傍に寝た弟の寝息が耳についてて、却つてさまざまな耐へ難い思ひが犇々と胸に集まつてきた。

毅は今頃どうしてゐるだらう。あの鮫川の流れに懸けだした小座敷で兄や妹と枕を並べながら矢張り自分と同じ思ひに寝ねがての夜を過ごしてゐるのではあるまいか、と思ふと俊子はふと夢にみた逢曳の場面をもう一度心に繰返さずにはゐられなかつた。……空は初秋の様にうらうらと晴れ渡つてゐる。山道は蜿々と絶えつ續きつ鮫川沿の傾斜を登つて、四邊には眼も綾に樹の間の緑

が射しそつてゐる。鮫間からは流れの音に縺れながら時折忍ぶやうな山鶯の囀りが聞えて來る。其なかを俊子は毅に手を執られながらいそいそ登つて行くのである。ともすると後れ勝になる彼女を瞶める毅の眼はまるで氷のやうに冷たく輝いてゐる。そして時々彼の唇は聲も立てずに、

「私は何うしてもあの頂上まで行く。彼處へ行つて津崎さんにお詫びをする。」

と呟いてゐる。彼女の雙眼からは何とも知れぬ涙が五彩に輝きながらはふり落ちて來る。そしてふと上を見上げると、眞白な積雪に掩はれた山巓が今にも自分達の上へ倒れ懸つて來さうに漸々と空の此方に延びあがつてくる。彼女ははつとして突如毅の胸へ縋りついた。と、今まで毅とばかり思つてゐた人は、その刹那、津崎に酷似したあらぬ男に變つて、而も五體も叶はぬやうになつた自分の死骸をさも氣味よさゝうにまじまじ凝視してゐるのである。……その時の恐ろしさと口惜しさは夢にも増して強い力で俊子の胸へ歸つて來た。

此んな事をうつらうつらと思ひ續けてゐるうちに夜は全く明け離れてしまつた。臺所の方でお初が朝の支度に懸つた物音がしはじめると、やがて別莊番

の爺やが椽端の雨戸を開けに來た。

俊子は睡むがる喜三郎を起して、井戸端へ手水を使ひに行つた。朗らかな朝日は松林から裏山の山腹に暖かな光を漲らせて、とみると、朝靄の彼方には繪のやうな富士が積雪を美しく輝かしながら思はぬ高さに聳えたつてゐる。俊子は何とも云へぬ清新な歡びを覺えずにはゐられなかつた。

手水を使つてしまふと俊子はその儘喜三郎を連れて海岸へ出てみた。波の音を聞いてゐると海岸までは可成りの道程があるやうに思へたが、松林を拔けるともうすぐ鼻先に蒼い海と島影が見えて來た。

御用邸の松林から牛臥の岬まで連つた砂濱には、白い波頭が斷絶なしに崩れかゝつてゐるばかりで、人ッ子ひとり歩いてゐない。そして遠く駿河灣の彼方へ延びた大洋の面には鏡のやうな朝凪が流れて、伊豆の島影は眞紫に澄み渡つてゐる。

喜三郎はうつとりその美しい景色を眺めてゐたが、やがて鼻を鳴らしながら、

「姉さんはほんとに德だなあ、此樣な處に毎日ゐられて。僕は今日またすぐに

東京へ歸らなけりやならないのねえ。」

俊子は氣の毒さうにさう云ふ弟の顏を見た。

二

お初の手料理でいつになく美味い晝餐を濟ますと、喜三郎はそろそろ歸京の支度をしなければならなかつた。自分でも何うにかしてもう一晩泊つて行き度いと云ふし、俊子もならう事ならさうしてやり度かつたのだが、學期試驗のことを思ふとそれも叶はぬ望みだつた。で、二時を打つと、喜三郎は到頭また學校の制服をつけて、その上から金釦のついた外套を羽織つて、すぐすぐ別莊の門口へ出て沼津通ひの馬車を待つた。

俊子はせめて停車場まで見送つてやる心算でゐたが、妙に氣の弱くなつた彼女は停車場での別がひどく氣になるので、到頭思ひ切つてお初と別莊番の爺やに送らせることにした。お初は慌てゝ髮を撫でつけたり、着物を着換たりした。

馬車は間もなくやつて來た。喜三郎はまだもぢもぢ澁つてゐたが、到頭急き

立てられて泣き顔をしながら乘つた。そして馬車が路の角を曲るまで恨めしさうに此方を振顧つてゐた。俊子にはそれが涙の滲むほどいぢらしかつた。

俊子はやがて家へ入つて、椽端から奥の間へ上つた。そして今喜三郎と對坐してゐた餉臺の前へくづをれるやうに坐つて、兩手で顏を掩ひながら何を思ふともなく深い思ひに沈んでしまつた。

取留めもない事をうつらうつらと思ひ續けてゐるうちに、俊子はまた焦りつくほど毅が戀しくなつてきた。その戀しさはすべての思考を排して、やがて抑へることも何うすることも出來ないほど激しく募つていつた。今迄はさほどにも思はなかつた毅の事がかう匆急に、そしてかう激しく戀しくならうとは彼女自身にも不思議でならなかつた。熱病のやうに心の隅々まで炎々と燃廣がつてゐる情火を省みると、彼女は氣が狂つたのではあるまいかとさへ疑はずにはゐられなかつた。

今日といふけふまで何うして此の思ひを知らずに暮らしてゐられたのだらう、津崎といふ枷があつた爲めだらうか、それとも又周圍の事情が自分にそれだ

けの餘裕を與へなかつたのであらうか、さう思ふと、彼女はもう何が何やら分らなくなつて、物心づいてから以來始終かうした氣持ちてゐたやうな氣ばかりしてならなかつた。そして今度の病氣で死んでしまつたとすればもう二度と再び毅に逢ふことも何も出來ないのだと思ふと、限りない再生の歎びと共に總てを打破る大膽さと勇氣とが胸一杯に充滿ちて來た。その瞬間彼女の眼の前には親もなく、兄弟もなく、社會もなかつた。唯戀しい毅が唯一人渾身の愛を強ひるやうに嚴然と突立つてゐるばかりであつた。

彼女は息塞るほど強く乳房を抱き緊めながら暫らくの間喪心したやうにつとりしてゐた。まるで毅の胸にでも抱き緊られてゐるやうな甘い快感が節節の末にまで肉の歡びを呼び醒していつた。彼女は病後の衰弱に惱んだこの四五ヶ月以來、こんな熾な感覺の惑溺に身を浸すのは初めてゞあつた。もう彼女は毅のためには周圍の事情など考へてゐられなかつた。何んな事でも一氣に敢行しなければならないと思つた。何んな犧牲を拂つても、どんな苦しい境遇に陷つても必ずそれを成し遂げ得ると確信するまでに彼女は興奮して來た。

「今だ、今だ。今の機會を外したらお前は永久に穀を獲ることが出來ないのだぞ。」と云ふ不可思議な聲は何處からともなく彼女の耳に力强く響いて來た。

三

俊子はやがて起ち上つて、床の間に置いた信玄袋のなかゝら卷紙と封筒を取出して來た。そして墨を磨りながら頻りに考へ込んでゐたが、書き度いことは胸先に溢れてゐながら、扨何から筆を起こしていゝやらまるで見當がつかなくなつてしまつた。

それでも書いては破り、破つては書きしてゐるうちに胸の思ひは自から文章をなして、一尺二尺と卷紙の丈は次第に繰展げられて行つた。別れてから後の思ひも懸けぬ出來事や、病床に就いてからの苦しい、惱ましい思ひなどを細々と書き續けてゆくうちに、彼女はいつか胸が一杯になつて來て、つい涙の滲むやうな今の心の切なさまで繰り返し繰り返し書き綴つてしまつた。

「……もはや御目もじのふしも叶はぬことゝは思ひあきらめ居り候へど、明日

の仇なる望みをたよりに生きながらふる世のならひにて候へば、もしやと思ふ心に先だたれてこの文したゝめまゐらせ候。思はぬ人の妻とかしづき、よしなきさだめには弄ばれ候ても、今より思へば片ときとても御許様のこと思ひ忘れし日とては御座なく、大洗に參り居りし頃より數々の御文みるにつけ、御なつかしさのみいやまさり候。ひとたび人妻となりし身、いづれは路傍に朽ちはつる花と覺悟は致し居候へど、今はもはやこの胸に燃ゆる思ひつつむに由なく、このまゝ永の御別れ致すは何と致しても口惜しきかぎりにて御座候まゝ、甲斐なきくり言とは存じながら年月心にひめしことゞもひとゝほりかくは聞えあげまゐらせ候。かくなり果て候も宿世のえにしとは申しながら、世のさだめのほど今更情なく、寐ねもやらぬ夜なよな御許様の御面影をしのぶにつけいはけなき涙のみとめどもなく湧き出で候。この上はもはやいづかたへなりともさだめに身をまかせ、泣いて泣いて泣き暮らさばいつかはいのち絶ゆる日も參るべく、それのみひたすら心に念じ居り候……。」

かう書きつゞけてゐるうちに餉臺から疊へ零れ落ちた卷紙の長さは身の丈

にも餘つて來た。そして彼女の雙眼にはいつしか涙が一杯に溢れて來た。

やつと書き了ると、彼女は幾度か初めから讀み返した。讀んでゆくうちにこんな事を書くのではなかつたと思ふやうな箇所がいくつとなく眼につくので、いつそもう一度書き直さうかと思ひ惑つてゐると、その時、玄關の方で人の足音が聞えた。彼女は吃驚して慌てゝ卷き收めて封筒へ入れてしまつた。そして慄へる手先で表書を書いてゐると、そこへお初が顏を出して、

「只今、何うも遲くなりまして相濟みません。」と云ひながら叮嚀に手を支へた。

「あゝ御苦勞だつたね。」と、俊子は素氣ない聲で答へながら今度は裏書にあらぬ男の僞名をしるして、お初に見られないやうに懷へ捻ぢ込んで、その儘ついと座を起ち上つた。

「あら、奥樣。何方へお出で遊ばすんで御座います？お手紙なら私が入れて參りませう。」と、お初が慌てゝ起ちさうにするのを、俊子は眼で抑へて、

「いゝんだよ。お前はそれよりも早く御夕飯のお支度をおし。」と云ひ捨てゝそわそわ椽端から庭に下りた。そして小走りに裏木戸をぬけて、別莊からは二

町ほどもある郵便局へ自分で態々投函に行つた。

四

それから二三日の間、今日は來るか、明日は來るかと返事を待ちあぐねてゐたが、毅からは何うしたものか何の消息もなかつた。あの儘恂や夏子に連れられて歸京してしまつたのではなからうかと疑ひ初める頃には、何だか毅の心さへそれと測り兼ねて、いろいろな疑惑とともに取返しのつかぬ悔恨の念が俊子の胸を暗くした。それでもまだ仇な望みをたよりに時偶訪れる郵便配達の足音を氣にしながら落着かぬ日を送つてはゐたが、手紙を出してから五日目になると、さすがに俊子も深い深い失望の底へ沈まずにはゐられなかつた。

その日は朝から頭痛がして何となく氣分が勝れないので、日が高くなるまで溫かい臥床のなかでうつらうつらしてゐた。

枕許の障子に一杯射しかゝつた暖かな日の光を瞶めてゐると、またさまざまな悲しい思ひが先々と胸に湧いて、此頃はもう習慣のやうになつてしまつた寂

しい頼りない心持ちがいつとはなしに俊子の胸を引包んでしまつた。毅のことを思ふと、まるで暗い海を差覗くやうで、希望もなければ光明もなく、唯熱い涙ばかりが譯もなく流れて來た。何うにかして消息を聞きたいとは心に念じながら、それさへ最早詮術盡きたやうに思はれた。そして行末のことを思ふと、何を目的に何うして生きて行かうとするのか自分自身でも疑ひ惑はない譯にはいかなかつた。

午少し前に俊子はふと玄關の方で人の訪ふ聲を聞いた。取次ぎに出たお初は暫くの間何事かごとごと話合つてゐたが、やがて俊子の枕許へやつて來て、

「あの、奥様。唯今三島館からお使ひがこれを持つて參りまして御座います。」

と云つて、襷をはづしながら一封の封書を差出した。

俊子は云ひ甲斐もなく躍る胸を抑へながら枕から頭を擡げたが、ひとめ封書の表書をみると、彼女の顏色はみるみるさつと赧らんで來た。

「何か返事でも呉れとは云つてゐなかつたかい？」と彼女は封書には手も觸れずにひどく慌てた聲で吶りながら云つたが、お初は氣にも留めてゐないらしく、

「いゝえ。別に何とも申しては居りませんでした。唯お客様が此れを届けて來いと仰有つたさうで、もうお使ひの人も歸りまして御座います。」

「さうかい、それならいゝんだよ。」と、俊子は力めて輕く云ひながら慄へる手でそつと封書を取り上げた。

お初が行つてしまうと、俊子は夜着のなかで直ぐさま封を切つてみた。例の右上りな字で走り書がしてある。

「今朝早く函根を發つて、今漸う此の宿へ着きました。さうして今度の急行でまた歸らなければなりません。あなたにお目にかゝつてゐられるのも僅か三時間か四時間に過ぎますまい。併し僕は生れてから今日まで此の短い時のために生きてゐたやうな氣がします。唯一刻も早くお目にかゝり度いばかりです。何事も拜眉の上、取急ぎ右まで……杉浦生」

それを見ると、俊子は突如夜着をはねのけて起き上つた。その儘湯殿へ行つて湯の水のとお初を急き立てながら大急ぎで身仕舞ひをした。そして鏡臺を置いた四疊半を閉切つて暫らくの間なかでごとごと物音をたてゝゐたが、やが

ていつになくこつてりと化粧して、派手な縮緬の羽織の紐を結びながら出て來た。

「奥様。お晝餐は何う遊ばしますと」と、お初が怪訝な顔つきをして訊くのを、彼女は耳にも懸けずに、浮々した調子で、

「直に歸つて來るから、歸つてからにしませう。お前は私に關はずに先へお頂き。」と云ひ捨てゝ、椽端から庭へ下りた。そして急ぎ足に松林の小徑を突切つて濱の方へ出て行つた。

五

歩き難い砂の上を無我夢中で歩いたので、砂濱の端れまで來た頃には眩暈がする程息が彈んで、額にはしつとり汗が滲み出して來た。そしてふと眼をあげると三島館の門は直ぐ眼の先に見える。俊子はそこまで來ると急に氣臆れがして、いまゝでの嬉しさに引換へ何とも云へない恥かしさが胸一杯に込み上げて來た。

それでも彼女は思ひ切つて門のなかへ入つた。奥まつた帳場へ行つて、折柄出て來た婢に杉浦の名を云ふと、その婢は何と思つたか、胡散臭さうに彼女の姿を見上げみおろしながら、

「どうぞ此方へ。」と云つて草履も直さずに慌たゞしく奥廊下へ入つて行つた。俊子は破れるやうに躍る胸をぢつと抑へながらその後に隨いていつた。

廊下の端れに近い一間の前へ來ると、婢はふと立止まつてその紙襖を開けて、「あの、旦那様。お連様がお見えになりまして御座います。」と手を支へながら聲を懸けた。と、なかからは夢寐にも忘れ得なかつた懐かしい毅の聲が、

「あ、さうか。ては此方へ。」

それを聞くと俊子は唯譯もなく嬉しくなつて、恥かしさも何も打忘れてそつと間内へ入つた。

毅は脊廣の上へ外套を着た儘床の間の傍の小机の前へ坐つて、ぢつと此方を瞶めてゐた。前に据ゑた膳の上には一緒に呑みさした麥酒のコップがのせてあつた。そしていつになく膳の傍には麥酒壜が二本もあ

けてあつた。

俊子は婢に勧められるまゝに火鉢の向ふへ敷かれた座蒲團の上へ淑やかに坐つた。そして顔も得上げずに、

「しばらく、……唯今は有難う御座いました。」と心持頭へを帶びた聲で云つた。

「いや、お眼に懸かれるか何うかと思つて一寸使ひを上げて見たんですが。」と、毅は妙に改まつた調子で云つて、

「併し貴方は大變丈夫さうになりましたね。血色なんかまるで見違へるやうだ。」

「お庇護様で此方へ參りましてから大層宜しう御座いますの。」俊子は無意識に嬌態をしながら初めて顔をあげた。

と、今度は毅が眼を逸らして、唇の邊に間の悪さうな惑亂を示しながら、

「併しよく癒つたもんですねえ。いつぞや僕が伺つた時なんかもう迚も駄目のやうでしたが……。」

「ほんとに私も今度こそはもうとても助かるまいと諦めて居りましたんで

すけど、……人の命つてほんとに不思議なもんで御座いますわねえ。」

「さう。此様な處で今かうしてお眼に懸れるのも考へてみれば一種の奇蹟と云つてよう御座んすね。」毅は強ひて笑ひながら云つたが、直にまた話を逸らして、

「此間汽車中で兄や妹にお逢ひなすつたさうですね。」

「え、一寸お眼に懸りました。ほんとに餘り偶然だつたんで吃驚致しましたわ。その時にお兄様から貴方が函根へ被居つてゐることを伺ひましたの。」

「ぢや僕の居處は兄が饒舌つたんですね？」毅は怪訝さうに云つた。

「いゝえ、福住に被居ることは仰有いませんでしたけど、私一寸他の事でそれを知りましたの。」と云つて俊子は艶やかに微笑んだ。

「さうでせうとも、兄や妹がそれを饒舌る筈がない。なにしろ家の者は僕の居處を貴女に知らせまいとして、そりや苦心してゐるんですから。」毅は嘲けるやうな調子で云つて、小刻みに慄へる手で麥酒のコップを取り上げた。

六

婢が茶を入れて去つてしまうと、毅は云ひ難くさうにもぢもぢしながら、

「此間のお手紙はほんとに有難う。僕は何んなに嬉しく讀んだか知れません。」

と早口に云ひながら又麥酒をぐつと一息に呷つた。

「どうも失禮な事を申し上げて……。」俊子は急に耳の附根まで眞紅になりながら、「あの時分は少し氣が變になつて居りましたもんですから、……さぞ厭に思召しだらうと思ひまして、後から隨分後悔致しましたわ。」と消え入るやうな聲で呟いた。

「いや、そんな事があるもんですか。あのお手紙ひとつで僕の決心はすつかり定まつてしまつたんです。あの手紙がもう少し遲く來たら僕の運命は何う變つてゐるか分りません。」と、毅は沈んだ聲になつて、「早速返事を上げなけりやならないと思つてゐたんですけど、何しろあれから母はやつて來る、伯父はやつて來る、それに房子までやつて來る騷ぎなんで、たつた一人でゐる事はまるで無か

つたもんですから、つい手紙を書く機會がなくて、ほんとに失敬しました。」

「いゝえ。どう致しまして。唯あれを讀んでさへ頂けば、私はもうそれで宜しいんで御座います。」俊子は賴りなささうに云つて、その儘低く俛首れてしまつた。

毅は旨くもなささうに麥酒ばかりがぶがぶ飲んでゐたが、漸次と陰鬱な顏色になつて、

「貴方はまだ知らないでせうけど、僕は今非常に苦しい境遇にゐるんです。あの事件からこつち家の者は僕をまるで罪人か何かのやうに思つてゐるんです。母や妹は無論さうですが、比較的理解を持つてゐる筈の兄達までがさうなんですからねえ……。」と云つて毅はひどく興奮した調子になつて杉浦家で起つてゐる紛紜の顚末を語りだした。

先頃の事件は全く毅の將來にとつて一種の致命傷といつて宜かつた。あの爲めに總ての信用は失墜する、社會といふものが問接に與へる威嚇は一時に彼の周圍に集まつて、もう何んな不利益な事にても、何んな思ひも懸けぬ事にても

彼は無條件に服從してしまはなければならないやうな位置に立たせられてしまつた。名譽を恐れ、自家の尊嚴を保つことにばかり汲々としてゐる杉浦一家の人達は、毅の將來よりも先に家といふものを考へた。それが爲めに毅の心は益々理解されなくなつて、迫害はいろいろな貌になつて彼の上に加へられた。房子との結婚のことも無論彼は包まず隱さず俊子に話した。その結婚を承諾しさへすれば總ては圓滿に納まつたのだが、彼は此の最後の迫害に向つてだけは何うしても屈服しなかつた。彼は家出をしてまでその結婚を拒んだ。その結婚を承諾する位なら寧ろ一家と自分との關係を斷絶してしまつた方がいゝとさへ云ひ張つて一歩も後へ退かなかつた。新たな紛紜はまた其處から生じたのであつた。

今度の結婚談の起りは、此の後又あんな事件が起つては可けないといふやうな單純な杞憂からではなかつた。あの後房子と毅との間に以前から關係のあつた事實も暴露するし、それに母親の貴族を崇拜する盲目的な性癖から清水家とも普通の交際以上に關係も出來たし、何やかやで兩家はもう切つても切れぬ

やうな關係になつてゐたのであつた。それ故杉浦家の方から云ふとこの結婚が成立しない場合には二重にも三重にも負擔を負はせられる事になるのであつた。

この一週間ばかりの間、函根へは杉浦一家の人が入れ換り立ち換りやつて來た。そしていづれも强硬な態度で毅を威嚇したり、慫し和めたり、歎願したりしてみたが、毅が何うしても聞入れないので、到頭處置に窮して愈々最後の手段に訴へる事になつてしまつた。杉浦家の親族會議は一時追放同樣に毅を外國へ遣ることに取極められたのであつた。

七

「……そんな事て實は貴女から手紙を頂くまでは、僕はもうすつかり外國へ行くことに決心をきめてゐたんです。たつた一人でこつそり此地を發つて、もう一生日本へは歸つて來ない心算てゐたんです。さうしてさうなりやもう自棄ですから、外國でも暴れられるだけ暴れて、最後は誰れにも知らさずにこつそり

自殺でもしてしまはうと思つてゐたんです。」と、毅は眉根を焦だたしさうに拘攣らせて云つたが、やがて急に聲を落として、併し此間のお手紙を見てから僕の決心はすつかり變りました。外國へ行くのがひどく厭になつたんです。」

俊子は涙含みながら一心に聞入つてゐたが、

「どうも貴方にまでそんな御迷惑を懸けて、私、それがほんとに申譯がないんて御座いますわ。さうなりましたのも皆津崎が惡いんで御座いますから、津崎さへ居りませんければねえ……。」と、はふり落つる涙をそつと押拭ひながら、でもかう申しちや何んですけど、お母様方のお仕打も餘りぢや御座いませんか。」

「いや、僕だつてもう子供ぢやないんだから、親がどんな考へでゐるか位はようく分ります。親なんて云ふものには到底僕達の心持ちは分りやしないんです。又分つた處が何うにもならないんですたらねえ。僕達は僕達で自分の道を歩いて行くより外には仕様がないんです。何も一生の幸福や、眞箇の自分を犧牲にして迄妥協して行く必要はありません。それに人間の一生なんて云つたつて、長いやうで實に短いもんですからねえ、僕はもう少し自由に、ほんとの自分に

近い生活をして行き度いと思ふんです。さうして幸福といふものを離れて此の人生を考へることは何うしても出來ません。」と議論でもするやうな語調で云ひ續けてゐたが、やがて自分の心を瞶めるやうな眼つきになつて、一體僕の今迄の生活は皆嘘だつたんです。もう少し深く考へて、始終強い自分で周圍に對してゐさへすれば決して此樣な事にはならなかつたんです。貴女を自分のものにしなければ何うしても生きて行かれないと云ふことを知つたら、その通りにそれで押通して行けば可かつたんです。」と云つて、又麥酒を自分のコップへ注いだ。

「ほんとにねえ。私だつてさうて御座いますわ。津崎へ參ります時にもう少し自分といふものが分つて居さへしますればねえ。」と、昔を顧みるやうに云つたが、毅が餘まり麥酒ばかり飲むので、

「もうお止し遊ばせよ。そんなに召飲ると毒ですわ。いつからお酒を召飲るやうになりましたの？」

「いや、もう此頃は酒でも飲まなけりや頭がくさくさして耐まらないんです。

ウヰスキイの生の奴をぐつと飲むと實にいゝ氣持ちだもんですから、つい酒を飲むことを覺えちやつて。」と、其儘コップを置いて、少し醉つた顏に決意を示しながら、併し僕も今度こそほんとにすつかり自分の覺悟を極めてしまひました。周圍の事情が何うであらうと、僕は僕で勝手に自分の道を探します。若しそれを妨げるものがゐたら親だつて兄妹だつて構やしません。飽く迄反抗します。さうしなければ今の境遇を打破ることは到底出來ないんですから。」と云つて、又他の考思を追ふやうに口を噤んでしまつた。

戸外では風が出て來たと見えて、硝子戸で仕切つた椽先の石崖には潮先がざつざつと騷々しく打寄せて來た。無數の皺を刻んだ海上には眞白な光が流れて、帆を張つた漁船が幾艘となく引續いて歸つて來る。伊豆の連峰も午後の光を受けていつの間かに赭裸な肉膚を露はして來た。

俊子は遠くを瞰めるやうな眼つきをしてうつとりしてゐたが、その眼は漸次とまた涙に濕んで來て、しまひには何を思ひ出したのか聲を呑んでしくしく啜り泣きをしはじめた。

八

毅は傷ましさうにその樣を瞻つてゐたが、いつまで經つても俊子が泣き止まないので、

「何うしたんです、何を思ひ出したんです？」と優しく訊いて、そつと横から彼女の顏を覗き込んだ。

俊子は突如袂で顏を隱しながら、

「いゝえ、何うもしや致しません。私、唯悲しくなつて來て……。」と頻に泣き續けてゐたが、暫らくすると泣啼りながら、「でも私さう思ひますわ。私がいろんな事を考へたつてもう駄目なんで御座いますわねえ。こんな體になつてしまつて、……もう一度どうにかして昔の自分になり度いと思つても、もう二度と再びあの時分の私は歸つて來や致しませんわねえ。それを思ふと私、ほんとに口惜しくつて……。」

「そんな事はもう何うだつて可いぢやありませんか。かうなるのが運命だつ

たんですもの、今から何うしようと云つてそりや駄目です。それよりも此れから先の事をお考へなさい。これから先何うなつて行くかと云ふことが今差當つての問題ぢやありませんか。」

「いゝえ、此れから先はもう何うなつたつて、私ちつとも構ひませんわ。どうせ此の間の病氣で死んだと思へば何んな事だつて出來ますわ。」俊子は夢中で云つた。

「それだけ覺悟が極まつてゐりやそれでいゝぢやありませんか。かうなつた以上はもう成るやうにしきやならなんだから。」毅はまたコップを取上げてグッと飲み干して、それへ新らしいのを注ぎながら、「そんなに泣いてゐないて麥酒でも一杯お飲みなさい。さうしたら氣がさつぱりするでせう。」

俊子は何と思つたかそのコップを受取つて苦さうにグッと一息に飲んだ。そして袂から手巾を出して涙を拭きながら、

「でも私もうこれで滿足しなければならないんで御座いますわ。かうしてお眼に懸る事が出來さへすればそれでいゝんで御座いますから。」

「そんな卑怯な事を云ひ出しちや駄目です。お互に自分の心のなかにあるものを意識したら、最後までその通りに押徹して行かなくつちや駄目ぢやありませんか。此れだけの犧牲を拂つてゐながら、可い加減な處で妥協してしまうのは厭です。」毅は語氣を強めて云つた。

俊子は處女らしく手巾を手弄りながら俯向いてゐたが、やがて嗚咽を抑へて、

「ぢや、何うなりますの？」

「そりや貴女にも分つてゐる筈ぢやありませんか。」

「そりや分つては居りますけど、……私はそりやもう何うなつたつていゝんで御座いますけど、貴方のことを考へますと。」と、云澱むのを毅は引取つて、

「僕だつて同じことです。もう行く處まで行くより外には仕樣がないんです。端て何んな妨害をしようと、もう構つやゐられません。人間は生れてから死ぬまでたつた一人で生きて行かなけりやならないんです。それを考へたら何な事でも平氣でやり遂げらるゝ筈です。今になつて先の危險と困難とを考へて躊躇する位なら初つからこんな事になるのを避けてゐた方がいくら可か知れ

やしません。僕はもう人から悧巧だと云はれるやうな、そんな意氣地のない道は執り度くないんです。」毅は異常な興奮を眼に現はしながら、俊子に云ふよりも自分の内心に對して云ふやうに荒々しく云ひ放つた。

俊子はそれを聞くと又激しく啜り泣きしだした。涙は留途もなく流れて來て、ともすると泣き聲が喰緊ばつた唇を洩れさうにした。併しそれは悲しい涙ではなくて、總てを理解した後の涙だつた。心の底では毅の一言一句が此上もなく頼もしく思はれるのであつた。

それを瞻る毅の眼もいつか涙に濕んで來た。

九

二人はいつまでもさうした濕つぽい話に耽つてゐたが、そのうちに時は容赦もなく過ぎて、黄昏は漸次と伊豆の山々を濃く彩どつて來た。そして海上から照反して來る寂しい光のなかで顔を見合はせた時には、もう二人ともお互に何も彼も理解し合つたやうな氣になつて、深い悲しみの底からいろいろな光明や

慰藉を見出したやうな心持ちに浸つてゐた。

毅はそろそろ歸函の支度をしなければならないので、俊子にも勧めて二人一緒に食事をとつた。俊子にとつてはそれは忘れ得ぬ樂しい晩餐なのであつた。

勘定を濟まして、三島館を出る頃には夕陽も愛鷹山の西へ沈んで、四邊にはほの黄い黄昏が一面に立罩めてゐた。帳場で態々車の用意をしたのを斷つて、二人は眞闇な松林のなかを互に肩を摺寄せながら沼津の町の方へ歩いて行つた。

俊子は先刻の樣子とは打つて變つて、殆んど病的に見える位噪いでゐた。そして處女の昔に復つたやうにさまざまな矯態をしながら聲まで浮々させて、

「私、ほんとに今日ぐらゐ嬉しい日は御座いませんわ。でもよくこんな遠い處まで被來つて下すつたわねえ。それを考へると、私、何んてお禮を申上げていいか分りませんわ。」

「そんなお禮なんて云ふのはよして下さい。僕はかうと思つたら何んな處までも行く性質なんですから。」

「嬉しう御座いますわねえ。」と、俊子は眞から嬉しさうに云つて、「でも此樣な處

を夏子さんにお眼にかけたら何と思召すでせう。まさか今頃かうして貴方と御一緒に歩いてゐやうなんとは夢にもお思ひなさらないでせうね。」俊子は愉快さうに笑つた。

「無論そんなことを考へるもんですか。」と、毅は静かに云つて、「もう直にお別れしなけりやならないんだから、そんな話は止して、先刻の問題に就いてもう少し話さうぢやありませんか。」

「でも、もう何にも申上げることは御座いませんもの。」俊子はその儘口を噤んでしまつた。

そのうちに二人はいつの間にか、沼津へ通ふ川添ひの町へ出た來た。毅は汽車の時間が遅れさうなので、到頭思ひ切つてそこから車に乗ることになつた。俊子は停車場まで送つて行くと云つて聞かなかつたが、毅に宥められてやつと思ひ止まつた。そして車のある處まで來ると思切り悪さうに立止つて、

「ぢやもう此處でお別れしなければなりませんのねえ。此次には何日頃お眼に懸れますの？」と頼りない聲で訊いた。

「さあよく分りませんけど、一週間以内には是非もう一度やつて來ます。」と、毅は車に乗りながら云つた。

「まあ、そんなに早く被來れて？　でも一週間て云ふと隨分長いわねえ。私たつた一人で寂しう御座いますから、是非お手紙を下さいましな。樂しみにして待つて居りますから。」

「えゝ。それぢや體をお大事に。」

「さよなら。きつと被來つて下さいましな。きつとで御座いますよ。」

「さよなら。」

「御機嫌よう。きつとお手紙をね……。」

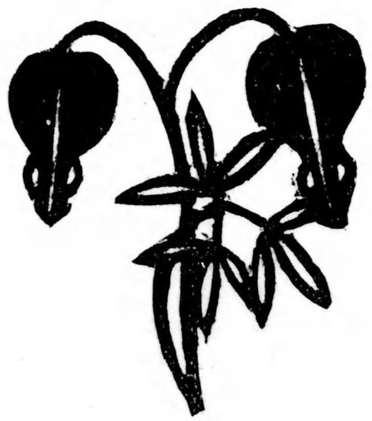
俊子が泥除けに懸けてゐた手を離すと車はその儘すぐに駛り出した。凸凹の激しい田舎道を右左に揺れながら車は漸次と遠ざかつて行つた。

俊子はいつまでもその後を見送つてゐたが錯雑紛糾した家庭の渦亂のなかへあゝやつてたつた一人ですごすご歸つてゆく毅の心の内を思ひ遣ると又熱い涙がいつとはなしに流れ出て來た。そして深い憂慮と、歎びと、感謝の念とは

ごちやごちやに縺れ合つて暫らくの間彼女の胸を激しく動搖させてゐたが、そのうちに此れ程接近しあつてゐながら、互に手さへ握らずに別れてしまつた事が急に物足りなく思はれて來た。一度人妻になつた俊子には、愛情の表白が單に言葉だけではどうしても滿足されないのであつた。

俊子はやがて何とも云へない寂しい氣持ちで、寒い夜風に追はれながらしよんぼり別莊の方へ歸つて行つた。

霧



毅に逢つてから後の俊子は氣持ちなり擧動なり、以前とはまるで別人のやうに變つてしまつた。自制力といふものがすつかり無くなつて、今迄深い憂愁に包まれてゐたかと思ふと、五分も經ないうちにもう十六七の處女のやうに埒もなくきやつきやと噪て廻つたりした。そして夕暮になると、しよんぼり椽端に佇んで、紫紺色に暮れてゆく大空を眺めながら譯もなく涙を流してゐることなども珍らしくはなかつた。さうした時にはいつも毅の妻が彼女の眼の前に髣髴して來て、逢ひ度さが胸を壓つけるやうに犇々と責め寄せてきた。唯の一度の逢瀬で、それも心の底まで悉く打明けて云ひ交はしたといふ程のことでもないのに、彼女にはもう毅の思惑も氣持ちも殘らず分つてしまつたやうな氣がして、その上の戀しさ、懷しさが日增しに燃え募つて行つた。一度良人といふものを持つた自分に再びかうした若々しい處女のやうなみづみづした感情が歸つて來ようとは、彼女自身ですら不思議でならなかつた。そしてこの感情が

何處まで昂まつて行くことかと思ふと、彼女は時折は自分の心が却て恐ろしくさへ思はれるのであつた。

限りない歡びと光明とが心に歸つて來ると同時に彼女の肉體にもまた再び血の力が甦つてきた。清新な海氣と、溫暖な氣候が此上もなく彼女の體に適應したと見えて、健康は眼に立つやうに日に日に恢復してきた。骨だつてゐた頰もふつくら肉づいて、生々とした血の氣がさして來ると一緒に、じつとものを瞶める瞳にさへ抑へきれぬ活潑さが見えてきた。何にも知らないお初は俊子の氣持ちの移り變りを全く健康が恢復した爲めとばかり思ひ込んで、浮々した笑ひ聲を聞く度に、自分も一緒になつて喜んだ。

毅からはその後二日おきぐらゐには必ず消息があつた。或時は字數さへ數へられるぐらゐな短文で、また或時は身の丈にも餘るやうな長い長い手紙で、彼は今自分が經驗してゐる心の歡びと悲しみと、そして境遇の苦悶とを餘すところもなくこまごまと書き綴つて寄越した。俊子は日に二度も三度もこつそり手文庫を物蔭へ持つて行つて、一々その手紙を展げてみては一言一句の末々ま

て暗誦の出來るまでに讀耽つた。そして自分の心に眞實の歡びを吹き込む文言や、しみじみ同情の湧く樣な悲しい文言の處へ出會はすと、彼女はその手紙に顏を埋めてたつたひとりで泣いたり笑つたりした。晩になると、そのなかでも一番好きな一通をぬき出して、そつと枕の下へ敷いて寢た。戀しい毅の面影がせめて夢枕にでも立つて呉れるやうにといふ子供らしい果敢ない戲れなのであつた。

二度目に毅が沼津へやつて來たのは、約束の日限よりもずつと遲れて、もう十二月の月へ入つてから後のことだつた。其時も午頃に三島館へ着いて、僅か三四時間の逢瀨の後にはもう別れなければならなかつた。そしてその時も唯嬉しさに取紛れて、他愛のないことばかり語り合つてゐるうちに、時間は矢のやうに過ぎ去つて行つた。美しい黃昏の薄明りのなかを今度は停車場まで送つては行つたが、唯ひとりて歸り路に就く俊子の心には以前にも增して强い强い寂しさと焦だたしさとが殘つてゐた。

二

もう十二月も中旬過ぎてからの事である。いつになく朝からどんより曇つて、今にも粉雪がちらちら降つて來さうな空合の日であつた。毅は三度目に沼津へやつて來た。

三島館からの使ひて俊子はいつものやうにいそいそしながら美しく化粧して出懸けて行つたが、此間の時とは違つて毅は一番奥まつた角の座敷にゐた。その日は大島の平常着の儘で、寒さうに背なかを圓めながらぼんやり火鉢へあたつてゐた。

「まあ、隨分しばらくですのねえ。十日の日に被來るつていふお約束でしたから、私どんなにお待ち申したか知れませんわ。」と、俊子は座敷へ入るといきなり嬉しさに眼を濕ませながら云つて、毅の傍へ行つて坐りながら「昨日差上げた手紙は御覽下すつて？」

「いゝえ。僕は一昨日からまだ函根へ歸らないんですもの。」毅も嬉しさうに

微笑ながら何處か力のない調子で云つた。
「まあ、何處へか行つて被居つたんですか？さう云へばこの四五日ちつともお手紙を下さらなかつたわねえ。」
「實は貴女にはまだ云ひませんでしたけど、僕は一昨日から東京の家へ呼び返されてゐるんです。」
「あら、また何か御面倒なことでも出來ましたんですか？」俊子は眼を峙てゝ訊いた。
「え、ちよつと面倒なことが起つたもんだから。どうも折角好い工合に納まつたかと思ふと直にまたこんな事が起つて來るんですからなあ、それにこんだの事は少し重大な結果になりさうなんで、僕はもう實に弱つてゐるんです。」毅は心の底の困惑を眼に表はしながら云つたが、すぐに又思ひ返したやうに語調を變へて、
「兎に角まあそんな事は何うてもいゝ。貴女はあれから別に變りはないんですか？」

「え、有難う御座います。お庇護さまでずんずん肉が附いて參りますの。」と、俊子は氣懸りさうな顔色になつて、「でも、その御面倒な事つて云ふのは何んなんで御座います？聞かして下すつてもいゝんで御座いませう？」
「いや、何んでもないんですよ。まあ後でゆつくりお話しませう。」毅は投げ出すやうに云つて俊子から眼を逸らした。
「そんな他人がましい事を仰有らないで、聞かして下さいましな。それでないと私氣懸りで耐りませんもの。」俊子は顔色を讀むやうにじつと毅の顔を瞶めながら、「それにお顔色も良くないし、きつと何にか差迫つた御心配ごとがあるに相違御座いませんわ。」
「そんなに氣に懸けなくつたつていゝんですよ。どうせ一度はこんな事になるだらうと思つてゐたんだから。」毅は強ひて作り笑ひをしながら云つた。
俊子はさういふ毅の顔を怨めしさうにまじまじ瞶めてゐたが、やがて何と思つたか急に涙含んで來て、
「そんなにお隠し遊ばさなくたつて宜う御座いますわ。私にはもうちやんと

分つて居りますの。きつと何で御座いませう、何か私に關係した事で御面倒が起つたんで御座いませう。」

「いや、そんな事ぢやないんですよ。まるで違つた方面のことなんです。」毅は慌てゝその言葉を打消しながら、「そんなに貴女が心配するんならすつかり茲で話してしまひませう。併し、そのかはり後で……」と云つて何故かふつと口を噤んでしまつた。

三

毅は少時經つと、煙草に火を點けながら諄々と語り出した。

俊子と最初に會見して以來、彼は母や兄妹達やその他親戚の面々に對しても全然態度を變へてしまつたのであつた。今迄は妙に反抗的に、そして總てを破壞してしまうやうな自暴自棄な態度ばかり見せてゐたが、それが急に自分の方から折れて出て、何事もなるべく妥協的に穏かに運ばせる事に苦心した。房子との結婚の話はもういつの間にか當面の問題ではなくて、杉浦家ではその頃彼

の洋行の相談で持切つてゐた。一番硬骨と見られてゐる彼の伯父なども、三四年の間歐羅巴の空氣に觸れて來ることは彼の心身の鍛練に至極適當だらうといつて、頻りにその準備を取急ぐことを勸めてゐた。毅自身も亦皆に安心を與へるために一家の人々の前では態と外國へ渡れる歡びを公言して、その以前に大學で學んだ書籍やノオトを一應整理して置く必要もあるし、旁今少し語學の修練もして置かなければならぬと云つて、内々出發の期日を出來るだけ遲延させてゐた。その間に機を見て俊子との間に何等かの解決をつけてしまはうと云ふのが毅の存念だつた。そして清水子爵家の方も兎に角毅が歸朝してから改めて話を進めるといふやうな條件で一先づ話が落着して、房子はそれまで必ず待つてゐるといふことに納得した。毅もなるべくその場を丸く納めるために、歸朝した後は彼女との結婚を承諾するやうな意志さへそれとなく仄めかした。毅はそれほどその場遁れの手段を講じてまで、僅か茲一二箇月の間の樂しい戀の陶醉を欲した。それで事件は兎に角曲りなりにも解決がついて、そのまゝ順當な道に進んでゐたのであつた。

そこへ突然又思ひ懸けもなく今度の事が突發して來た。それは房子の妊娠であつた。清水家から四五日前の夜、突然子爵未亡人が自身で出向いて來て、毅の母にその羞づべき事實をすつかり打明けてしまつた。子爵未亡人がそれと氣付いたのはつい十日程以前のことであつたが、いろいろと處置に迷つた揚句、到頭その事を杉浦へ打明ることに決心したのであつた。そして房子の胎に宿つた胎兒の父は無論毅でなければならぬと云つた。房子自身も自分の口から確にそれを告白したと云ふのである。

房子の節操を信じきつてゐる毅の母はまた一も二もなくその事實を承認してしまつた。假初めにも二人の間に忌はしい關係があつたとすれば、その兒は確に毅のものでなくてはならぬと信じた。新たな波瀾はまたそれから卷き起つて來たのであつた。

毅はその翌朝早速電話で東京へ呼び戻された。丁度その時、彼はこつそり暇を偸んで沼津へ行かうとしてゐたので、いろいろ口實をつくつてその命を拒んだ。それがまた端なくも母親の疑念を增して、何うしても歸つて來なければ母親が自身で函根へ出掛けて來るやうな氣振さへ見せた。で毅も詮方盡きて、そのまゝ何の譯とも知らずに澁々歸京した。

毅は奥まつた母親の居間で初めてその話を聞かせられた時、餘り意外な事なので却て母親の思惑を疑つた。そして房子との關係がそんな深い所までは決して進んでゐなかつた事をさまざまに說明して聞かせたが、母親はどうしてもそれを信じなかつた。彼の言葉にはまるで耳を藉さずに、唯かうなつた上はもう外國へ行くこともならぬ、此儘直ぐに房子と結婚をしろと云つて、泣きながら激しく彼を叱責した。彼は今事を破つてはならぬと思つて頻りに我慢に我慢を重ねてはゐたが、餘り母親の云ひ分が分らな過ぎるので、到頭しまひには我を忘れて勃然と憤怒してしまつた。

四

「僕はその時こそほんとうに母を憎みました。いくら僕達と思考の標準が違ふと云つたつて、餘り物事に對する理解がなさ過ぎるぢやありませんか。僕が

そんな事は斷じてないと云つて、それ程までに說明して聞かせてゐるのに母にはそれがまるつきり分らないんです。さうして二言めには證據のないことだからと云つて頭から僕を威嚇しようとするんです。そんな事を母の口から、云はれるのは僕にとつてどれ程苦痛でせう。寧ろ一種の侮辱です。で僕は到底此上母と妥協していくことは出來ないと思ひましたから、到頭思ひ切つて最後の手段を執つてしまつたんです。」毅は燃えるやうな眼眸をしながら、傍にある茶碗へ茶を注いで、グッと飲み干した。

「でも房子さんも隨分卑劣なことをなさるぢや御座いませんか。そんなに迄して貴方をお苦しめになるなんてほんとに隨分ですわね。私なんか伺つただけでも恥かしう御座いますわ。」と、俊子は我慢してゐられないやうに口を入れた。

「いや、實はそこなんです。もともと房子は僕に復讐するだけの意味でそんな事を云ひ出したんぢやないんです。この前にもお話した通り、あの女には音樂家で中野と云ふ戀人があつて、僕の考へぢやその子といふのも恐らくは中野の

子なんだらうと思ふんです。此頃の樣子でみると何うやら中野も逃腰になつてゐるらしいので、房子は處置に困つて、その跡尻を僕の方へ持つて來たに相違ないんです。實に人を馬鹿にしてゐるぢやありませんか。そんな事で僕の母やあの女の母樣を騙かす心算でゐるのが實に陋劣です。」

「全くで御座いますわねえ。」と、俊子は熱心に云つて、「あの方がさう云ふ卑劣なことをなさるんなら、貴方も思ひ切つてあの方の不行跡なことをすつかり皆さんの前で仰有つてしまへばいゝぢや御座いませんか。さうすれば誰方だつてもう房子さんをお信じになるやうなことはあるまいと思ひますわ。」

「處がそれがなかなか容易なことぢや駄目なんです。僕の母なんかすつかり房子に丸め込まれて、飽く迄あの女の節操を信じきつてゐるんですから、うつかりした事を云ひ出すと、却て此方が不利益な位置に立たなければならなくなるんです。だから僕としてはもうひと思ひに最後の手段を執つて、この際何も彼もみんな打毀してしまふより他には仕樣がないんです。」と云つて、毅は自暴自棄な樣子をしながら昨夜杉浦の家で演じられた活劇の模樣を物語つた。

毅は昨夕になつて何うしても母親が彼の云ふことを聞き入れないので、到頭最後の手段として清水家へ電話を懸けさせて、房子と、房子の母とを麴町の邸へ招んだ。房子は體が悪いといつて來ることを拒んだが、毅はそれを無理やりに連れて來て貰つた。そして人聲の端へ洩れない西洋館の方の應接間で、雙方とも親のゐる前で理否のある所を對決した。毅はその時すつかり覺悟をきめて心のなかにあることは殘らず吐き盡してしまつた。今迄は房子に對する德義の上から包み隱してゐたことも悉く饒舌つてしまつた。中野のことも、それから過去彼女がどんな男とどう云ふ風な關係を結んでゐたかと云ふことまで彼が知つてゐる限りの事實を悉く曝露してしまつた。さすがの房子もその話が出ると死人のやうに顏色を失つてぶるぶる體を慄はしてゐたが、毅が中野のことを云ひ出すと到頭耐らなくなつて、聲をたてゝしくしく泣き出した。

毅は思ふさま痛快に房子を詰つたのてこれて母親の疑ひも解けたらうと思つてゐると、母親はまるで反對に彼は清水家の面目を傷つけ、ひいては自分をはじめ一家の者共の顏へまで泥を塗つたと云つて泣いて激怒した。そして毅の

云つた言葉は上流に育つたものゝ到底口にすべからざる暴言だと罵つて、毅をその儘兄の恂の手へ渡して、彼の口から散々に叱責させた。毅はその晩穩健なこの兄とも火の出るやうな爭論をやつた。

今朝になると、毅はもう到底妥協の道がないのを見て取つて、跡はどうてもなれと云ふ氣て平常着の儘ぷいと邸を飛び出してしまつたのであつた。

五

俊子は話が濟むまて俛首れてじつと聞入つてゐたが、やがて力なく涙含んだ眼をあげて、

「でも、困つた事になりましたわねえ。それて貴方は此れから先何う遊ばすお心算なの？」と思ひ迫つた聲て訊いた。

「もうかうなつた以上は何うするも、かうするもないぢやありませんか。最初の所信どほりに實行していくより他には道がないんてす。僕は飽まて斷行します。それが自分に對する最も忠實な道なんてすからねえ。」毅は暗い顏にな

つて、まるで自分の體が何う云ふ危地に陷つてゐるか知らないやうな調子で云つた。

「さう仰有つてしまへばもう仕様が御座いませんけど、でもそれぢや今迄折角築き上げて被居つた貴方といふものが滅茶々々になつてしまうぢや御座いませんか。私それが心配でなりませんわ。」

毅は默つて眼を据ゑて考へ込んでゐたが、急に苦しげに嘆息を洩らして、

「併し今の場合もうそんな事を考へて躊躇しちやゐられないんです。何でも構はないから、もう總てと連絡を斷つて、今出來上つてゐるものは片ッ端から打毀してしまはなけりや駄目です。さうしてその後で又改めて自分の進んで行く道を確定するんです。さうしなけりや迚も僕自身を今の境遇から救ひ出すことは出來ません。」

「それは私だつてさう思はないんぢや御座いませんけど……」俊子が何か云はうとして云ひそびれてゐるのを見ると、毅はまた荒々しく引取つて、

「そんなに心配する事はないぢやありませんか。僕は今の處もう何にも望み

やしない。唯貴女といふものを確實に自分のものにしてゐさへすりやそれでいゝんです。もう先のことなんか考へてゐられやしない。それでなくつてさへ頭の中はいろいろな事で一杯になつてゐるんです。こんな事をしてゐたらほんとうに氣狂ひになつてしまう。」毅は泣きさうな聲で呟いて、兩手で髪の毛を焦だたしさうに掻きむしつた。そして慴えたやうな眼つきをして空を瞶めてゐたが、やがて何とも云へない苦悶の表情を現はして雙眼からはらはらと涙を流した。

俊子はその涙を見ると、もう我慢がしてゐられないやうに袂で顏を掩つてせぐり泣きしだした。

「ほんとに此樣な事になりましたのも皆私が惡いんで御座いますわ。私さへゐなければ貴方だつてそんなお苦しみをなさらなくつて濟んだんですのに……。」涙の隙に彼女はやつとこれだけ云つた。

「又そんな事を云ふ。それだから僕は此間からあれ程さう云つてゐるんぢやありませんか。かうなつたのも僕達の運命なんです。これから先、どんな苦し

い位置に落ちて行つても僕達は決してそれを悔んぢや可けないつて、あれほど堅く約束したぢやありませんか。貴女だつてそんな早怯な人ぢやないんでせうッ。」

「いゝえ、私ひとりの事は何うなつたつてちつとも構や致しませんけど、貴方はまだ立派な將來も持つて被居るんですし……」

「またそれを云ふ。將來が何んですッ？人間は決して明日のために生きてゐるんぢやないんですよ。今日のために生きてゐるんです。尊い今日といふ日を除けたら、何處に吾々の人生がありますッ。」毅は狂氣のやうに云つて、突如俊子の手を強く握つた。

六

俊子は握られた手を自分でもじいつと握り返して、その儘もう一言も口をきかなかつた。胸の底には種々な嬉しい悲しい感情が渦卷くやうに縺れ合つて、自分でも何を考へ、何を憂へてゐるのかまるつきり分らないやうな氣がしてな

らなかつた。毅のことを思ふと、むざむざ彼を死地に陥れるのが悲しくて、どうにかしてもう一度杉浦の母や兄妹達とも妥協の出來るやうに勸め度かつたが、それもよく筋道を追つて考へてゆくうちに何うやら覺束なさゝうなのが見えて來た。そしてもう自分も世の中の事なんぞ考へて遲疑してゐる時ではない毅の落ちて行く處へは何處までゝも一緒に落ちて行かう、死なゝければならぬものなら死にもしよう。もう自分は將來も、生命も、體も總て毅の前に捧げてしまつたのだ。それだけの尊い犧牲を拂つても、かうして毅と一緒に思ひ合つた仲でゐることが出來ればこの世のなかにそれ以上の幸福はないのだ。――さうした心強い斷念と歡びとはいつのまにか彼女の心を激しく波立たせて來た。

毅は涙含んだまゝ俛首れてゐたが、急にまたつくり笑ひをして、

「もうそんな話はよしませう。いくら泣いたり怒つたりしたつてどうせ出來上つたことは後へ歸りやしない。それよりも僕達は僕達でこれから先のことを考へませう。」と云つて、俊子の顏をじいつと覗込んだが、彼女が何とも返事を

しないので、そっと後から手を廻して彼女の肩を抱きながら、「そんなに泣いてばかりゐちゃ困るぢやありませんか。今は泣いてゐる時ぢやないんですよ。貴女と僕との間にはまだ考へなくちゃならない事が澤山殘つてゐるぢやありませんか。」

俊子は漸う涙を拭いて時々込み上げて來る嗚咽を抑へながら押默つてゐたが、やがて微笑を持つた眼で毅を見上げながら、

「ほんとにもう何うなつたつて構やしませんわねえ。私かうして貴方のお手を握つてゐると、どんな恐い處へでも飛び込んで行けるやうな氣がしてなりませんわ。」と云つて毅の手をもう一度上から握り緊めながら、「でも、今頃東京のお宅ではどんなに騒いで被居るでせう。貴方が此處へ來て被居ることが分るでせうか。」

「そりゃ早晩分るに定まつてゐます。或はもう分つてゐるかも知れません。若しそれで誰かゞ此處へ搜しにでも來たらその時こそ最後の幕が開くんです。僕はもう隱れちゃゐません。貴女とかうなつてゐることをすつかり曝露して

しまひます。さうしてその上で反對に貴女と結婚することを母の前で公表します。其の時あの母がどんな顏をするでせう。實に痛快ぢやありませんか。」

「まあ、隨分ですわねえ。」俊子は嬉しさうに笑ひ聲をあげて、「でも、そんなことを仰有つたらお母樣がどんなにお怒り遊ばすでせう。さうして今度は私が酷い眼に逢はせられる番ですわねえ。」

「さう。あの母のことだから八つ當りで貴女にどんな事を云ふか分かりませんね。」毅は輕く云つて、何か外の事でも考へてゐるやうな眼つきをしてゐたが、やがて、「併しまあそれはそれとして、あの後津崎さんの方は何うなつてゐるんです？貴女は法律上の手續きを履んで離婚をしてしまつた譯ぢやないんでせう。」

俊子は津崎といふ名を聞くと、急に苦しさうな顏つきになつて、何と云ふ意味もなく毅の顏をぢつと瞶めた。

七

俊子は暫らくすると、低い聲で、

「何んだつて今頃そんな事をお聞き遊ばすの？」と詰るやうに呟いた。
「いや、何んでもないけど、一寸聞いて置く必要があるんです。貴女の籍はまだ津崎さんの處にあるんでせう？」
「は。でも先達參りました叔父の手紙で見ますと、津崎の裁判ももう直きに始まるんださうですから、さうしたら籍は自然に津崎の處から消えてしまうんださうで御座いますね。」
「そりや無論です。兎に角あんな犯罪を犯したんだから、今無條件で籍をぬかれたつて、津崎さんの方ぢや抗議を申込む權利はないんです。だからまだぬいてないのなら、一日も早くその手續きをしたらいゝでせう。それでないとまた後で何んな面倒な事が起らんとも限りませんからなあ。」
「はゝそりやもう叔父も始終氣に懸けて居りますんですから、大丈夫で御座います。」俊子はさう云ひながら久し振りで津崎のことを心に思ひ浮べた。今頃はあの獄窓の下でどんな事を考へながら暮してゐることだらう、それにしてもあの丈夫さうだつた顔が今どんなに窶れ果てゐることだらう。さう思ふとさす

がに彼女も暗い氣持になつて、悽まじい運命の變轉を今更のやうに心に描いてみずにはゐられなかつた。
毅は暫らく經つと斷乎とした決意を示して、
「もういくら考へたつて仕樣がない。僕はやる處迄やらなけりやなりません。貴女もほんとうに覺悟を極めて下さい。もう此れから先は情誼とか、涙とか云ふもので決して動かされちやなりません。云はゞ自己の意志と、他人の意志との冷たい戰ひなんですからねえ。」と云ひながら、絶望したやうな、夫でゐて何處かに光明を認めてゐるやうな樣子を見せた。
「そりやもう私だつて疾うからすつかり覺悟を極めて居りますわ、どうせこんなやくざな體なんで御座いますもの、今貴方が死ねと仰有つたつて、決して厭とは申しませんわ。そのかはりねえ貴方、何な場合になりましても決して私をお見捨になつちや厭で御座いますよ。私はもう貴方から離れたら到底生きては行かれないんで御座いますからねえ。」と云つて、俊子は美しく微笑ながら毅の手を又ぢつと握り緊めた。その頰には思ひ入つた感情の閃めきがほん

のり紅く染めだされてゐた。

「いやそれだけの覺悟が極まつてゐさへすりやそれで可いんです。まさかの時になつて、貴方が急に弱い事を云ひ出したりなにかするやうぢや僕も賴りがありませんからなあ。」毅は俊子の肩からそつと手を外して、さも滿足したやうに微笑んだ。

とみると、戸外はもう夕暮近くなつて、後の松林では寒さうな晩鴉の聲がとぎれとぎれに聞えてゐる。どんより曇つた海上にはいつの間にか濃い霧が一面に立罩めて、伊豆の山々も島影もそしてすぐ間近な御用邸の松原まで銀灰色の影の底に葬られてゐる。

「やあ、こりや酷い霧だ。此處邊の海岸にしちや珍らしい空合になつて來ましたね。」毅はひつそりと靜まり返つてゐる落の方を眺め下ろしながら云つたが、急に元氣づいて來て「ねえ、俊子さん。家のなかへ閉ぢ籠つてばかりゐちや詰まらないから、どうです、そこらをひと廻り散歩して來ようぢやありませんか。」

「え、さう致しませう。まあ、ほんとに酷い霧だこと。」

二人はやがて庭下駄をはいて椽先から庭の奥の方へ出て行つた。

八

夕暮は漸次と濃い墨色を四邊に流しはじめて、じめじめした薄寒い微風と共に霧は益々深くなつていつた。沖の方は雲間を洩れる夕陽に彩られて、何とも云ひやうのない美しい飴色に輝いてゐる。そして時折思ひもかけぬ霧の間から歸りを急ぐ漁船が幻のやうな姿をして、ついついと現はれて來る。波の音はその美しい幻の海に子守唄のやうなのんびりした律を刻んでゐるのである。

毅と俊子は岩と岩との間を傳はつて、やつととある小芝の生えた平らな處まで來た。毅はさつき水を渡る時から俊子の手をまだ離さずにゐる。

「あ、俊子さん、あの沖の方を御覽なさい。實に綺麗な霧だ。實に暗示的ぢやありませんか。まるで僕等の心をそのまゝ形に映し取つたやうな景色だ。」毅はふと立留つてさも感激したやうに叫んだ。

「ほんとにねえ。まるで繪のやうですわねえ。」俊子も毅の胸のところへ倚り添ひながらうつとりしたやうな聲で云つた。

「さう。繪のやうにとも云へば云へるが併しそんな形容ぢや餘り平凡過ぎます。あの綺麗な色はとても顔料ぢや描けやしません。ありや全く今の僕達の心をそのまゝ暗示してゐる。あの深い霧は今の僕達の思想や、生活や、觀念などの上にも掩ひ被さつてゐるんです。僕等青年はあの霧の美しさに迷はされて、知らず識らずのうちに自分の踏むべき道を過つてゐる。併しその危險はよく知つてゐながら、僕達はあの霧が吹き晴れるのをひどく恐れてゐる。あの霧が晴れてすべてが實在のまゝの透明な姿を現して來るのが此の上もなく厭なのです。僕達は飽く迄あの美しい霧の中に迷つてゐたい。さうだ、あの霧のなかに迷つてゐたい。道德が何んです社會の制裁がなんです。皆人間自身の自由を束縛するために作つた縛ぢやありませんか。僕達はそんなものに縛られてゐる必要はない。もつともつと自由でなければならないんです」

「ほんとにねえ。世のなかの事や、身の周圍の事なんか考へてゐたら、一日だつ

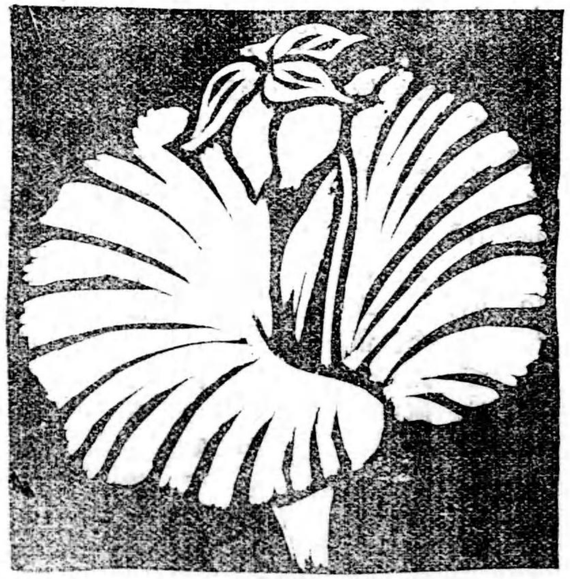
て自分を忘れて樂しく暮らして行くことは出來やしませんわねえ。」俊子は毅の指を弄びながら熱に浮かされてゞもゐるやうに云つて、濕んだ眼でじつと毅の顔を見上げた。

「さうですとも。僕達の前には自由の外には何んにもない筈なんです。人生は即ち快樂と幸福の追窮に過ぎない。それが出來ない者は一種の弱者なんです。年老つた人はよく明日の計と云ふことを云ひ度がりますが、明日といふものは決してそんな尊いものぢやないんです。まるであすこへ打寄せて來る波のやうな果敢ない生命を持つてゐながら、明日々々と云つて空疎な希望に縋つて生きて行くのは寧ろ最も卑怯な態度と云はなければなりません。この先にはまだまだ大きな寶石があるかも知れないと云つて、現在足の下に踏んでゐる美しい寶石を見ずに通つて行くやうなものなんです。僕達には今日のほかには、もう明日もなければ昨日もない。今日といふ日がほんとうの生命なんです。」

毅はかう語り續けてゐるうちに漸次と亢奮して來て、いつか我を忘れて俊子

の手を自分の胸に押當てた。そして自分の眞實の心を彼女の胸へ鐫込まうとするやうにじいつとその眼のところを瞶めてゐたが、到頭迫つて來る感激に打負かされて突然彼女の肩へ手を掛けた。煙のやうに立罩めた深い霧のなかで二人はいつまでも總てを忘れ盡したやうな激しい戀に醉つてゐた。

月光



一

その翌晩は吹く風は寒かつたが、初秋の良夜を思はせるやうな冴々した月が時折雲の切れめから蒼白い光を投げてゐた。

俊子はその日朝から三島館へ行つてゐたが、午後になると毅に誘はれて久々で千本松原の方まで遊びに行つた。そして歸途に沼津の町で夕餐をたべて、もうそろそろ九時にもならうと云ふ頃、疲れた足を引摺りながら、美しいその月影を踏んで別莊の方へ歸つて來た。

三島館へ曲る路の角まで來ると、俊子はふいに立留つて、

「ねえ、毅さま。もう少し御一緒に歩きませうよ。今此處でお別れしてしまふのは何んだか惜しう御座いますわ。もう明日の朝まではお眼に懸かれないんですもの。」俊子は今日一日毅と一緒に又と得難いやうな樂しい日を暮らしてゐながらまだ不足がましい聲で云つた。

「併し、貴女も今日は隨分草臥れたでせうから、もう歸つてお寢みなさい。又明日がないといふんぢやなし。」

「そんな事仰有らないでもう少しお歩き遊ばせよ。」俊子は甘へた聲で訴へながら毅の掌甲へ笑談のやうに熱い接吻をして、「私ちつとも草臥れてなんかゐやしませんわ。ほんのもう少しですからどうか一緒に被居つて下さいましな。それでないと私寂しくつて耐らないんで御座いますもの。」

「それぢやかうしませう。貴方の家まで送つて行きませう。さうしてあの松林の處で綺麗に思ひ切りよく別れませう。」

「え、それでも結構ですわ。もうちつと遲く歩いて下されば、まだ五分位は御一緒にゐられますわねえ。」

こんな事を云ひながら互に手を握り合つて歩いて行くうちに、道はいつしか百姓家の續いた街道へ出た。月は丁度伊豆の山の頂に懸かつて、眞面に射して來るその光は夜の色を眞蒼に彩どつてゐる。砂の多い街道の面は霜でも置いたやうに白く乾いてゐた。

彼等は喋いだ笑ひ聲を立てながらとある道の角まで來懸つたが、その時後か

ら一臺の車が息せき驅けて來て、體をかはす間についと彼等のすぐ傍を驅けぬけて行つた。車上の人は中折帽を被ぶつた杏廣の紳士で、何と思つたか疊んだ幌のうへから眼鏡越しにじろじろ彼等の方を見下ろして行つた。そして小半町ばかり距つてからもう一度此方を振顧つた。

「隨分變な人ですねえ。何んだか氣味が惡う御座いますのねえ。」俊子は毅の方を見上げながら小氣味が惡さうな聲で呟いたが、毅は格別氣にも留めてゐないらしく、

「なあに、何んでもありやしませんよ。餘り大きな聲で笑つたもんだからきつと變に思つたんでせう。それとも嫉妬を燒いたのかも知れない。」

毅が常になく笑談口をきいたので、俊子もそれを受けて艶やかに笑つた。二人の笑聲はそのまゝ更け靜まつた家々の軒先へ異樣な反響を傳へていつた。

別莊近くなると俊子は別れを惜んで、まるで小娘のやうに執拗こく毅の體に絡はつた。そして彼の手を弄びながら、

「ほんとにもう五分で宜う御座いますから、御一緒にゐ度う御座いますわ。ね

え、毅樣。お厭や？」とせがんでゐると、その時、思ひもかけぬ行くての松林のなかからふいに若い女が出て來た。そして月影に透かしてじつと此方を瞻つてゐたが、やがてもぢもぢしながら、

「奥樣ぢや御座いませんか。」とむかうから聲を懸けた。

それはお初だつた。

二

俊子はそれをみると、ついと毅の傍を飛び退いて、

「まあ、お前。何か用なの？」と慌て返つた聲で訊いた。

「は、あの、お客樣がお見えになりましたんで御座いますけど。」お初はそれと見て取つて妙に氣兼ねをしながらをづを云つた。

「お客樣ですつて？誰方なの。麻布の旦那樣？」俊子は思ひも懸けぬ報らせに吃驚しながら、先づ最初に麻布の叔父の來訪を思ひ浮べた。

「いゝえ、あの……」と、お初は云ひ澁りながらそつと俊子の傍へ歩み寄つて來て、

樹陰へ姿を隠した毅の方をそれとなく瞻りながら、
「あの、津崎様の旦那様が被來つたんで御座います。」と小聲で俊子の耳へ囁いた。
俊子はそれを聞くとはつとして自分の耳を疑つた。
「お前、何んか思ひ違へをしてゐるんぢやないの。そんな、そんな筈がないもの。」と彼女は息を彈ませながら云ひ放つて、お初の顔を月明りてきつと見据ゑた。
「いゝえ。ほんとに被來つたんて御座います。八時半の汽車でお着きになりましたんださうで。」お初は眞顔で答へた。
「まあ、ほんとに。」俊子はその儘急の打蹌めされたやうに肩を落として、深い嘆息をついた。津崎が來た！つい二三日前の叔父の手紙にも二三週間のうちには必ず未決から豫審へ廻はされる筈だと書いてあつたあの津崎がどうして今頃こんな處へ來られよう。俊子にはどうしても眞實の事とは思はれなくて、唯胸ばかり躍らせながら夢をみてゐるやうな氣持ちになつてゐた。
「あの、是非奥様を迎ひに行つて來いと仰有つてどうしてもお聞きになりませ

んで御座いますが、何う致しませう。」お初は俊子が何とも云はないので到頭怵へかねて云つた。
「どうしようねえ。ほんとに困つたわねえ。」俊子は浮の空で云つて、「兎に角今直ぐ歸るからと申上げてお置き。私これからどうせ直ぐに歸るんだから。」
「はい、それではさう申上げて置きませう。」お初はそのまゝ素直に歸つて行つた。
お初の姿が樹立の影へ消えてしまうと俊子は突如狂氣のやうに毅の傍へ走り寄つて、
「ねえ、貴方。どう致しませう、津崎が參りましたんですつて。」と泣きさうな聲で訴へた。
「えッ津崎さんが？」毅もびくりとしながら、「一體何うしたと云ふんです。ぢや未決から出て來たんですね。」
「さうと見えますわね。私、厭ですわ、あんな人に逢ふのは。」
「ほんとに何うしたんだらう。示談にでもなつたのかしら。」毅は月の光の中

へ出て來ながら獨言のやうに云つた。

「ねえ、貴方。何うにかして津崎に逢はない工風は御座いませんでせうかねえ。私もうこの儘何處か人に知れない遠い處へ遁げて行つてしまひ度う御座いますわ。」俊子は毅の胸に顔を埋めてしくしく泣き出した。

「そんな事を云つたつて駄目です。此處にゐると知れてしまつた上はもう仕様がないぢやありませんか。」毅も當惑したやうに呟いて、「こんな事をしてゐて、ひよつとして津崎さんに見附かりでもしたらそれこそ大變ですから、兎に角一應別莊へお歸んなさい。さうして逢つて見た上で、若し何か無法な事でもするやうだつたら、又手段の執りやうもありますから。何を云つても今が一番大事な時なんですからねえ。」毅はそろそろ遁仕度をした。

「あら、貴方、毅様。この儘私ひとり置去りにして被來つちや厭ですわ。私どんな目に逢はされるか知れませんもの。」と、俊子はをろをろ聲で云ひながら後から追縋つた。

「だつて、僕だつて他に仕様はないぢやありませんか。茲で若し顔を出せば何

んな事になるか分らないし……」毅は又俊子の肩を抱いて、「兎に角一度逢つて御覽なさい。それでもし酷い事てもするやうだつたら、構ひませんから直ぐに三島館へ遁げて被來い。その時こそ僕は飽く迄貴女を保護しますから。」

「でも、私、あの人が恐くつて仕様がないんで御座いますもの。」俊子は毅の胸のなかで體を慄はせながらいつまでも啜泣きしてゐた。

三

それから十分間ばかりの間、俊子は頻りに泣いて搔口說いてゐたが、到頭毅に勸められて一應別莊へ歸つてみる氣になつた。事が破れたらいつでも最後の保障に立つと云ふ毅の言葉がひどく彼女を勢づかせて、若し萬一のことがあつたら一も二もなく毅の宿へ驅けつける心算で彼女はやつと歸宅の決心を極めたのであつた。そして彼女は堅く明日の逢瀨を誓ひながらやうやう毅の胸から離れたが、それでも何だか妙に心殘りがして、松の樹蔭に見隱れしてゆく毅の姿をいつまでもうつとり見送つてゐた。

別荘へ歸つてみると、いつになく奥の間からは燈火が洩れて、まだ椽先の雨戸もそこだけは繰つてない。俊子は幾度か躊躇らひながら到頭割けるやうに波打つ胸をじつと抱き緊めて、沓脱石からこつそり椽端へ上つた。障子の腰硝子のところへ行つてそつと座敷のなかを覗いてみると、眞中の一閑張りの机の前に趺坐をかいてゐるのは正しく忘れもしない津崎だつた。兩肱を机の上へ突いてそれへ頭を凭せかけながらじつと眼を瞑つてゐる恰好はまるで別人のやうだつた。かうも變れば變るものかと思はれるほど頰の肉が削けて、落ち窪んだ眼のまはりには云ふに云はれぬ暗い色が浮んでゐる。そして二箇月前には眞中から美しく分けてゐた髪も今は見すぼらしい五分刈に刈込んでゐるので、何處となく影まで薄いやうな感じがする。俊子は一目みてついと眼を逸らしてしまつた。そして氣に勝たれて突如がたりと障子を開けた。

津崎はその途端に、さも吃驚した、やうについと顔を振向けた。そして眼鏡の下から呆けた眼つきをしながらまじまじ彼女の顔を瞶めてゐたが、やがて嬉しさうな、それでゐてひどく羞恥を感じてゐるやうな微笑を洩らして、

「やあ、暫らくだつた。餘り突然なんてさぞ吃驚したらう。」と稍慄へを帶びた皺嗄れ聲で云つて、さすがに二の句がつげないやうに口を閉ぢてしまつた。外見にはそれとみえなくても、見馴た俊子には彼が酒氣を帶んでゐるのがよく分つた。俊子は仕方なしに座敷の隅の方の紙襖際へ坐つて、一通りの挨拶をした。

「さう堅くなられては俺も話がしにくいが……。」と、津崎は臆病らしい眼つきになつて、「實は昨日思ひがけない事で俺もやつと未決から出られるやうになつたんだ。お前にもあんな酷いことをして置いて、今更かうしてのめのめと逢ひに來られた義理ぢやないんだが、實は俺も今度はすつかり考へを入變へたし、それにもう一度お前にも逢つてよく詫もせんけりやならんと思つて、かうして耻を忍んでやつて來たんだが、どうだ、お前も昔の俺と思はんで一應話だけ聞いて呉れんか。」津崎の言葉には失意の人の憐れな哀訴のやうな調子があつた。

俊子は低く俛首れた儘返事もしなかつた。

津崎はそれをみると急に氣を變へて、

「いや、お前が返事をして呉れんのも無理のない話だ。全く俺がお前に對して

行つた事は一として良いことはなかつたんだからなあ。併し俺があゝして入監したのがその罰だと思へば、少しはお前の立腹も晴れるだらう。實際この二箇月といふものは俺にとつちや死ぬより辛かつたんだからなあ。」と云つて、津崎はしみじみ過ぎ去つた月日を悔恨するやうに黯然とした。

四

津崎はたつたひとりでくどくど訴へてゐたが、漸次と感傷的な調子になつて、

「今度俺がかうして出獄の出來るやうになつたのも、實を云へば望外な仕合せなんだ。豫審へ廻されりや俺は當然三四年は牢へ打込まれなけりやならん處だつたのだ。俺は確にそれに相當するだけの犯罪を犯した。今ぢやひどく後悔はしとるが、あの時にはどうしても已むを得なかつたんだからなあ。お前はちつとも知るまいが、俺は文書僞造もやれば、横領もやつた。それぱかりぢやない、殆んど盗賊同様の詐欺も働いてゐたのだ。そして悪い事とは無論知つとつたが、併し一方では是だけの事の出來るのも全く俺の力量だと思つとつた。俺

は或自信も持つてやつとつたんだ。」津崎はその儘口を噤んだが、やがてまた泣くやうな聲で、「それでもまあ今度幸ひにして銀行の方の整理もつくし、債權者との折合ひもうまく運んだもんだから、俺は銀行の名でやつと示談にして貰ふことが出來たのだ。到底出られんものを出して貰つたんだ。昨日銀行の羽田に連れられて監獄の門を出た時、俺はつくづく人の情と云ふものを感じて、あんな嬉しい事はなかつた。」その言葉と一緒に津崎の眼には涙が滲んで來た。

俊子は今まで何か恐しいものでも偸み見るやうにそつと津崎の方を見上げゐたが、彼の涙をみると急に又眼を伏せてしまつた、

津崎は猶も言葉を續けて、

「併し、俺もかうして人の情で牢から出て來はきたものゝ、もうどんな事をしつて二度と再び社會へ出られる體ぢやない。銀行なぞは無論のこと、一切の經濟社會ではもう俺のやうな人間を入れて呉れる處は一箇所だつて有りやせん。俺の信用はまるで落ちてしまつたんだ。俺は事實に於て、社會的に自殺を遂げてしまつたんだ。それはもう俺だつて疾うから覺悟してゐる。」津崎は急に言

葉の調子を變へて、「實際今迄俺が大きな資本を動かして、經濟界で活動をしようなぞと思つとつたのは、全く一種の迷ひだつたのだ。その迷ひに釣られて到頭俺は一生を過つてしまつた。そして今頃になつてやつとその迷ひが覺たのだ。もうかうなつた以上は決して卑怯なことは云はん。俺は社會の命ずるが儘に葬られて了はう。そして斷然この社會とは手を切つてしまう覺悟なのだ。」

津崎はさう云ひながら顔をあげて、俊子の方をぢつと瞶めてゐたが、到頭激越して來る感情を抑へ兼ねたやうに、

「俊さん。此處で一つお前に聞いて貰はんけりやならん事があるのだが……」

とまた低い聲になつて、「お前にも此れまであれ程迷惑を懸けて置きながら、今更こんな事を云ふのは實に厚顔しい話だが、そこはひとつ俺の心にもなつて見て呉れて、どうかお前の決心のある處を十分聞かせて呉れんか。實は俺も此れから先何う云ふ風にやつて行かうと云ふ當てもまだついちや居らんのだが、今の考へては一先づ故郷へ歸つて、それから改めて支那の兄貴の處へでも出懸けてみようかと思つとるんだ。彼地へ行けば俺だつてまだ使ひ途のない男ぢやなしどうにだつてやつて行けるに極つてゐるんだからなあ。運が好けりやまたどんな事で一旗揚げる機會が來んとも限らんし、それに兄貴も今ぢや雜貨店の方も大分忙しさうだから、俺の事業の資本位どうにでもして貸して呉れるに違ひないんだ。……。」

五

「……今度こそ俺はすつかり心を入れ換へて或意味での正業に就くんだ。今迄俺が關係しとつた社會には一切顧慮せずに、ほんとの獨立獨行で何か事業がやつて見たい。もう社會的の野心も捨てゝしまつた。一生涯の計畫も無論擲つてしまつた。唯俺は獨力で何か面白い事業を經營して、人にも知らさずにたつたひとりで暮らして行き度いのだ。それが今俺の心に殘つてゐるたつたひとつの希望でもあり、又慰藉でもあるのだ。さうして俺は出發點さへ確立して置けば、たしかにそれで成功するといふ自信を持つてゐる。どうせ此處まで墮落してしまつた俺だもの、日本にさへゐなければ何んな事をして暮らしたつて

一生だ。俺はきつと何んか仕遂げる。今度こそ人に後指を差されるやうなそんな慘めな境遇に落ちる氣遣ひはありやせんのだ。」津崎はすつかり感傷的な心の生地を出して、理路も立つてゐない言葉を頻りに云ひ續けてゐたが、こゝまで來るとまた人に賴り縋るやうな、哀訴するやうな聲になつて、

「そこで俺はお前に對して一生の賴みがあるのだが、どうだ、聞いて呉れるか。……そりや外の事ぢやない、お前ともあんな厭なことで別れるやうな成行きにはなつてしまつたが、あれは決して俺の本心ぢやなかつたのだ。金の必要に迫られ、また一方ではあの原田に唆かされて、俺は到頭あんな不德義な事を平氣でやる氣になつたのだ。今ぢや何とも云はれんほど後悔してゐる。何故あの時あんな氣になつたのか、今ぢや自分ながら不思議でならん位なのだ。俺はその點に就いてはお前に何と云つて詫びをしていゝか分らん。もしお前に滿足の出來ることなら、俺は何んな事でもして詫びをする。その代りにはどうか今迄の俺の仕打ちを恨まないで、もう一度俺の妻として一緒に暮して呉れんか。どうせ出來た事は仕方がないのだから、もう一切今迄の事は水に流して、もう一度

一緒になつて呉れる氣はあるまいか。若しその賴みを聽き屆けて呉れたら俺はどんなに嬉しい事だらう。今度こそまた改めてお前といふ立派な人格の婦人と結婚した氣になつて、俺はお前のためなら何んな事でもする。また今迄俺がお前に對して犯した罪を償ふためには俺はどんな事でもしなければならぬ義務があるのだ。」津崎は啜り泣くやうな聲で云つて、「どうだ、一生に唯一度のお願ひだからどうかさうしては呉れまいか。」

俊子は低く俛首れたまゝ返事もしなかつた。津崎が可哀想とも思はれないではなかつたが、彼が言葉を低くして嘆願すればする程、彼女には男の人格の低さと賤しさが見え透くやうな氣がして、彼を憐れむ心よりも、嘲笑ふ心の方が漸次に募つていつた。そして自分の心がいつの間にかうまで津崎から離れてしまつてゐるのが寧ろ不思議にさへ思はれるのであつた。

少時すると津崎がまるで上から抑へつけてもするやうに決答を促すので、到頭俊子は仕方なしに口を切つた。何か別な事でも考へてゐるやうな調子で、而も内心では或恐怖に戰きながら、

「兎に角、折角のお話では御座いますが、私も一旦かうと心を極めました上はもうどう致す譯にも參りませんし、それに母や叔父などもどう云ふ考へて居りますか……。」

「そりや無論皆さんは俺の事を悪く思つとられるに極まつとるさ。正面からもう一度復縁させて呉れとお願ひしたつて、到底聞入れて下さらんのは知れ切つた話だ。だから俺は先づお前の決心を確めた上で、何かいゝ方法を考へて改めてお願をしてみる氣でゐるのだが……。」

「では、貴方はまだ母にもお逢ひ下すつたんぢやないんで御座いますね？」俊子は顔を擡げて訊いた。

六

「無論まだ誰方にもお眼に懸りやせんさ。まあ、考へても見るがいゝ、俺にしたつて一體何の顔さげて麹町へ行ける。いくら俺が圖々しくつたつて、まだ監獄の匂ひもぬけきらない體をしてどうしてお母さん方に、お眼に懸れやう。」津崎

は苦しさうに苦笑して、「俺は昨日監獄を出てから、羽田の他にはまだ誰にも逢やあせんのだ。頭取が是非逢ひ度いと云つて二度も使を寄越したんだが、それにさへまだ逢はんのだ。もう俺は誰に逢ふ氣もしない。久し振で家へ歸つてみたら、俺はつくづく自分の體に愛想が盡きてしまつた。昨日は一日家へ引籠つて、よくお前と一緒に坐つて話しをしたあの書齋の安樂椅子の上でぼんやり時を過してしまつた。そして昨夜もひと晩ぢう殆んど一睡もしなかつた。いくら睡らうと思つてみてもどうしても眠れなかつた。俺はお前にだけは逢ひ度くて耐らなかつたんだ。お前のことを思ふと俺はもういつても何とも云へん苦痛を感ずるんだ。監獄にゐた間も俺は毎晩々々お前のことを思ひ出してみちやどんなに懷かしく思つたらう。無論自分の犯罪のことも氣にはかゝつたが、併し或時はそれ以上にお前の事が氣になつた。俺は何と云つてもお前に離れて生きてゆくことは出來ん。お前に捨てられたら俺の希望の大半はなくなつてしまうのだ。それを考へたら少しはお前だつて俺を憐れむ氣になつて呉れるだらう。どうか一生の願ひだから俺の申出を聽入れて呉れ。「俺が可哀想

だと思つたらどうか救つて呉れ。」さう云ふ言葉には眞實が溢れて來た。

「でも……。」と、俊子は一生懸命な顏つきになつて、「もうかうなりましたのもどうせ運命なんて御座いますから、私と云ふものは死んだものと思召して、この儘お斷念めになつて頂き度う御座います。斯う申したらお氣に障るかも知れませんが、どちらにしてもどうせ御緣がないんで御座いますから。」

「そんな心細いことを云つて呉れちや困るぢやないか。お前は一體俺に何うなれと云ふんだ。お前に捨られたら俺はもう生きて居られんと云つとるんだぜ。それ程に思ふものをお前は少しも可哀想とは思つて呉れんのか？」

「そりや私だつてお察し致します。あれ程お世話になつて置きながら、今更こんな事を申上げますのはいかにも薄情のやうに思召すかも知れませんけど、もう過ぎ去りましたことは何うにもなりませんのですし……。」俊子はいつかしら戀しい毅の横顏を心に描きながら浮の空で答へた。

それを聞くと、津崎は俄に傷ましい顏色になつてぢつと俊子の方を睨んでゐたが、やがて胸の底から壓し出すやうな聲で、

「ぢや何うしても、何んな事があつても俺の願ひは聽入れて呉れんのかね？」

「どうぞ私の心もお察し下さいまして……」俊子は異樣な恐れを覺えながらやつとこれだけ呟いた。

「それぢやお前は此れから先何うしようと云ふのだ。まだ年だつて若いんだし、いづれ此の後は何處かへ再緣するつもりだらうな。」津崎は少時沈默の後に低い聲で詰るやうに云つた。

「いゝえ、何う致しまして。こんな體でそんなことが出來るもんで御座いますか。私はもう一生獨身で暮らしますつもりで御座います。」

「嘘を云つちや可かんよ。獨身などと云ふことは云ふ可くして決して行はれる話ぢやないさ。」

津崎は嘲笑ひを浮べながら云ひ放つたが、その顏には絕望と自暴自棄の色がありありと浮んで來た。

津崎はその儘長いこと押默つて考へ込んでゐたが、いつか駄々っ子のやうな頑な眼色になつて、突如こんな事を云ひ出した。

「いくら隱したつて俺にはちやんと分つてゐるさ。お前はどうせそのうちに杉浦の息子と結婚する氣でゐるのだらう。」と鋭い聲で云つて、彼は俊子の顏をきつと睨みつけた。

「まあ、何だつてそんな事を仰有るんで御座います。」俊子はその突差さつと顏色を動かして、「御笑談も可い加減になすつて下さいまし。私はもう人の妻になれる體ぢやないぢや御座いませんか。」

「何とでも云ふさ。お前が今何う辯解した處が俺は一切信用しやせんよ。そんな事で俺を欺かさうとしたつて決して欺かされやせんさ。お前は俺が何にも知るまいと思つとるかも知れんが、そんなことで安心しとると大間違ひが起るぜ。これでも俺はお前と杉浦の關係をすつかり知つとるんだ。」津崎は憎々

しげに云つて坐り直しながら、「兎に角お前達二人の間には早晩結婚といふ事が持上つて來るに相違ない。そりや今迄の事件の經過を見ても分るし、お前が今俺に對する態度でもよく分る。併しもしほんとにさう云ふ事が起つて來るとしたら、俺はその時こそ斷じてお前達二人を許して置くことは出來ん。譬へこんな境遇には落ちても、俺にはまだ男の意地と云ふものが殘つてゐる。自分の妻をみすみす人に取られて默つとることは到底出來ん。お前が戸籍上俺の妻である以上は、法律は到底お前と杉浦の結婚を許さんのだぜ。そればかりぢやない、俺の考へ一つでは、お前とあの男を今にも監獄へ打込むことも出來るのだ。俺はどうせもう此迄自棄になつた體だ。どうせ社會に對する面目もなければ、名譽を恐れる必要もないのだから、お前の出ようひとつでは何んな大事を仕出來すか分らんのだぜ。それは豫め承知してゐて貰ひ度い。

俊子はそれを聞くと眞蒼になつて、反抗するやうにきつと眼を据ゑてゐたが、やがて唇を慄はせながら、

「貴方も隨分な方ぢや御座いませんか、今迄だつてあれほど私を酷い目にお

逢はせになつて貰きながら、此上まだお窘めにならうと仰有るんで御座いますか。」と口惜しさうに涙含みながら、杉浦さんの事だつて有りもしない云ひ懸りを仰有つて……」

「何んだ、云ひ懸りだつて？」津崎の聲もそれと同時に險相を帶びて來た。

「云ひ懸りて御座いますとも。私とあの方とは決して貴方の仰有るやうな關係になつてゐや致しません。」

「嘘を云へ。こんな轉地先まで、あの男を引張りつけといて、何の關係もないと云へるか。」津崎は突然激しい憤怒に顏ぢうの筋肉を拘攣らせながら嚙みつくやうに云つて、「お前は今しがた誰れと一緒に往來を歩いとつた？あの男の顏を俺が知るまいと思つとるのか？俺がすぐ後から車でつけて來るのも知らないで、お前達は何と云つて乳繰り合つとつた。これでもお前は關係がないと云ひ張るのか？」さう云ふ津崎の眼は狂氣したやうに据つてゐた。嫉妬、絶望、怨恨、すべての感情は殘酷な復讐を欲する念とともにその瞳の底で火のやうに燃えてゐた。

俊子は慴えたやうに紙襖際へぴたりと體を押し付けて、今にも遁げ出しさうな樣子をしてゐたが、何と思つたか、急に兩手で顏を掩つて聲も立てずに泣き出した。涙は指と指の間から洩れて小刻みに慄へる膝の上へ滲々と滴り落ちた。そして此儘何うされるかと云ふ恐怖に戰きながら、彼女は心の底で頻りに毅の名を呼び續けてゐた。

津崎はその顏をきつと睨みつけながらもう何とも云はなかつた。さまざまな感情が彼の胸を搖がすと見えて、その都度に彼は唇を强く嚙みしめた。もう口をきくにしては餘りに興奮し過ぎてゐるらしく見えた。

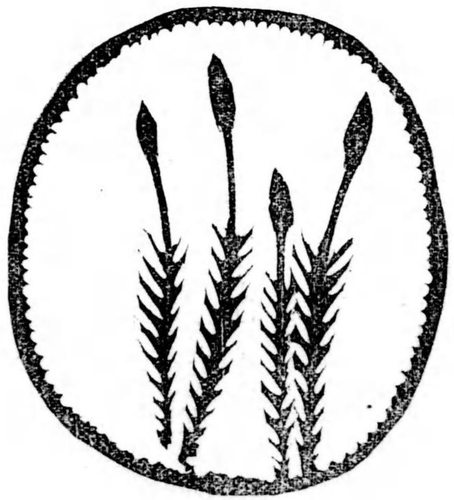
森沈と更け渡つた夜の底には何處からともなく波の音がひそひそと忍び寄つて來る。遠い町の方で汽笛の音がかすかに聞えたかと思ふと、隣の茶の間では柱時計が眠さうな聲で十二時を打つた。それを聞くと津崎は突如起ち上つて、外套をはをりながら、

「兎に角、今夜はもう遲いから、俺はひと先づ歸るとする。猶お前も俺の云つたことをよく考へて、何とかきつぱりした返事をして呉れ。俺は明日の晩までに

もう一度是非お前を訪ねるから。」と稍穏かな聲で云つて、その儘玄關の方へ出て行つた。併しその顔には何とも知れぬ決心が閃めいてゐた。

俊子は待たせて置いた車に乗つてすごすごと門を出て行く津崎の後姿をみると、やつとほつとしたやうな氣になつた。そしてその儘寢間へ入つて、臥床の上へくづれながら前後の手段を思ひ耽つた。いろいろな恐怖や不安が入れ換り立ち換り彼女の心を戰かせた。

自殺



その翌日、俊子は朝起きると朝飯もそこそこに済ませて、人目を忍ぶやうにこつそり別荘をぬけ出した。朝明の美しい海の景色も眼には入らず、唯津崎に逢ひ度くない一心から御用邸の裏の松林をぬけて、砂濱を眞直に三島館へつ驅けけた。

毅はもう朝飯も済ませて、座敷の隅の處に突俯しながら、宿屋の卷紙を廣げて何やら頻りに長い手紙を書いてゐた。俊子が入つて行くと、彼は寢不足らしい紅い眼を上げて、

「やゝお早う。何うしました昨夜は？」と心配さうな聲で聞いた。

「昨晩はほんとに失禮いたしました。」俊子は彼の傍へ居坐り寄りながら、「どうも昨夜はほんとに酷い眼に逢はされましたのよ。私全く殺されるかと思ひましたわ。」とほつとしたやうに云つて、彼女は誇張した調子で昨夜の一伍十什をすつかり毅に話して聞かせた。

「……それでね、若し私達が結婚でもするやうになつたら、その時こそ許さないつて申しますの。早速訴へて二人とも監獄へ打込んでしまうつて威嚇かしますんですよ。私もうほんとに何うしたら宜からうと思ひましてね、うつかりした事を云つて津崎を怒らしてしまつたらもうそれつきりで御座いますからねえ。私ばかりなら宜う御座いますけど、貴方が又どんな酷い眼にお逢はされになるか分らないんで御座いますものねえ。ですから私なるたけ口數をきかないやうにしてゐましたんですけど、何しろ貴方が此方へ來て被居やることも何も彼もすつかり知つてゐるもんですから、大變に喧しく申しましてね、何と申しても承知しないんで御座いますの。」

「どうも困つたことになりましたね。夜昨あの時に早く別れてしまへば津崎さんに見付かることもなかつたんだけど、……どうして斯う運が惡いんでせう。」毅は途方に暮れたやうに云つたが、やがて又捨て鉢な調子に返つて、「まあ、兎に角さうなつた以上は仕方がない。で、その跡はどうなつたんです？何か差迫つた手段でも執るやうな樣子が見えましたか？」

「まあ、私の考へでは大方そんな事を致すつもりなんだらうと思ひますわ。大層怒つて歸りましたからねえ。」俊子も思ひ切つた顏になつて、「何んでも今夜までにもう一度來るから、それまでにきつぱりした返事を考へて置けとは申して參りましたけど、どうせ私だつてかうなりました上は先方の氣に入るやうな返事を致す譯にも參りませんし……。」

「さうですとも。さうですとも。」毅は神經的に合點いて、「もう今更後へも先へも進むことは出來やしません。なるやうに成るより仕方がないんです。併しかうと知つたら早く貴女の籍だけでもぬいて置けばよかつた。さうすれば今何を云つて來たつて平氣でゐられるんです。そればつかりはほんとに手ぬかりだつた。」

「では若し津崎がほんとうに訴へるとしましたら、私達は罪人にならなけりやならないんで御座いませうか？」俊子は恐しげに大きく眼を睜りながら訊た。

「殘念だが、無論さう云ふことになるのです。法律の條文は僕達をこの儘社會的に殺してしまうことも出來るんです。一旦訴へられた以上は、いくら辯明したつて、藻掻いたつて到底法律には勝てやしません。自分達では少しも罪惡とは信じなくても、法理の眼から見れば立派な犯罪を犯してゐることになるんです。」毅は絶望したやうな沈痛な聲で云つて、かすかに涙含みながら、「だから僕達はほんの僅かな間でもそれに十分酬いられるだけの價値のある生活をしなけりやなりません。そして法律の前へ立たせられる前に潔く自決してしまうんです。罪人になつてまで生きてゐることは到底僕には出來ません。僕は二人の間に斷じてそんな醜い最後を置き度くないんです。」

二

そんな話をしてゐる間に毅も俊子も漸次と悲壯な氣持ちになつていつた。もう避け難い最後の運命がすぐ足の下に迫つて來てゐるやうな氣がして、儘ならぬ境遇を悲しみ嘆く心はいつか自暴自棄に變つてしまつた。

俊子は津崎に逢へば最後の確答をしなければならぬからと云つて、頻に毅に勸めて何處か彼の眼につかぬ處へ今日一日だけ身を隱さうと云ひ出した。逢

はなければ諦めて歸るだらうといふやうな淺い考へからではなく、もうどうせ最後の運命が來るものなら、それまでに思ふさま二人の上に殘された歡樂の夢を貪り味はつて置き度かつた。僅か一日でも今では彼等にとつては貴重な日なのであつた。

毅は俊子の考への不條理なことを數へたてゝそれとなく彼女の心を飜へさせようとしたが、しまひにはいつか自分もその考へに卷き込まれて、到頭何處か へ身を隱すことに承諾してしまつた。そしてさうなればもう二度三島館へ歸つて來る必要もないといふので、勘定などもすつかり濟ませて、着のみ着の儘の體には手に提げる荷物さへなく、二人はそのまゝこつそり宿屋の門を出てしまつた。

「ねえ、貴方。何處へ參りませう。どうせ何んなら人眼につかない靜かな處が宜う御座いますわねえ。」俊子は人通りのない松林へ入ると、突如毅の手を握りながら云つた。

「さう。何處と云つて別に考へもないが、此の近くよりも少し離れた處の方が

いゝてせう。」

「さうですわねえ。一寸汽車に乘る位な處へ參り度う御座いますわ。さうして今日は一日貴方とたつたお二人きりで樂しく暮らしてしまひ度う御座いますわねえ。何も彼も忘れて、貴方と御一緒に笑つて暮らせたらどんなに嬉しう御座いませう。たつた一日でも宜しう御座いますから、私ほんとに一生涯の間忘れることの出來ない日を作り度いと思ひますわ。」俊子は握つた毅の手を唇へ持つて行きながら、もう何も彼も忘れてしまつたやうに興奮しきつてゐた。

毅はそれには返事もしずに深い思ひに沈みながら大地の面へ眼を落として とぼとぼと力のない歩調を續けてゐた。

松林を出はづれると、彼等は又途中で津崎に出逢ふことを恐れて、態と小字から小字へ通ふ畑の間の細徑を拾つて歩いた。津崎は唯沼津の町中に宿を取つてゐると洩らしたゞけなので、此邊一帶の土地は總て敵地のやうな恐れを彼等に與へるのであつた。彼等は十歩歩いては立止り、二十歩歩いては又立止りしながら、時々百姓家の彼方にみえる街道の方ををづをづ注視した。そこにはほ

の白い砂塵が時折ふらふらと風に追はれて、その中を沼津通ひの穢らしい馬車や、肥桶を肩にした百姓などが通りすがつてゐた。そして弱々しい日光は午下りの靜かな村里をさも懶げに照してゐた。

漸うのことで沼津へ渡る橋の袂まで來ると毅は町なかを通る危險を恐れて、そこで車を傭はうと云ひ出した。そして車に深く幌を下させて、なるべく裏通をぬけて停車場の方へ行かうと云つて、そこらの立場を探し廻つてゐると、その時、ふと牛臥の方から來る街道の角に二臺の車がついと姿を現はして來た。いづれも梶棒の先に勢ひをこめて一生懸命に息せき走つて來る。そして風にあふられる前幌の影には乘つた客の白い顏がちらちら小さく隱見してゐる。

毅はそれをみると、突然小さな叫び聲を發して頰から唇までさつと眞蒼になつてしまつた。

三

車はやがて彼等の眼先へ飛ぶやうに駛つて來た。となかからは慌たゞしい

聲が突如車夫を呼び留めて、

「おい、車夫、車夫。一寸此處で留めて呉れ。用があるのだから。」と、叫んで、白い手がつッと幌の外へ突出された。

車は勢ひに驅られてその儘橋の袂のだらだら坂の處まで行つてやつと止つた。とそれと同時に先の車からは洋服姿の紳士がひらりと飛び下りて來て、度を失つた毅の方へつかつかと歩み寄つて來た。それは思ひも懸けぬ毅の兄の恂だつた。

「おい、毅。お前は一體どうしたと云ふんだ。俺達に心配をさせるのも可い加減にしろ。馬鹿氣とるにも程があるぢやないか。」恂は俊子の方へは見向きもせずに鋭い聲で云ひ放つて、兎に角何に彼のことは後にして此れから直に俺達と一緒に來い。もう何と云つても俺はお前を離しやしないぞ。」と云ひながらひどく興奮した顏で、突如毅の腕を握つた。

「兄さん。まあ離して下さい。往來端で見つともないぢやありませんか。」毅は執られた腕を振り切らうとして體を蹠きながら叫んだ。

「見つともない事が分るなら、何故こんなことをして呉れるのだ。俺達は一昨日からどのくらゐお前の行方を捜して歩いたか知れやしないんだぞ。家の者が是程心配しとるのがお前には分らんのか。」

毅は燃えるやうな瞳を据ゑて兄の顔を眞面に見ながら口もきかなかつた。舌が縺れてその咄嗟には言葉が出て來ないのであつた。

「まあ何んてもいゝ。兎に角一緒に來い。」恂は聲の調子をゆるめてそのまゝ毅を車の方へ引立てようとした。と毅は又激しく爭ひながら、

「いゝえ、可けません。可けません。離して下さい。僕はもうどんな事があつても家へは歸りません。歸る理由が出來れば兎も角、それでない以上は斷じて歸りません。」

「生意氣な事を云ふな。俺達はお前をこの儘にして放置つて置くことは出來ん。お前はもう立派な精神病患者なのだ。どうしても歸らんと云ふなら、俺達はどんな手段を用ひても連れて歸る。それでも反抗するか？」

「えゝ、反抗しますとも。貴方がたが何と仰有らうとも僕には僕の考へがある

んです。歸らんと云つたら斷じて歸りません。」

毅は其儘兄の手を振り切らうと爭つたが、恂はどうしてもそれを離さなかつた。そして二言三言いひ爭つてゐるうちに物見高な子供達や、橋番の親爺などがそろそろ彼等の周圍へ集まつて來るので、さすがの毅も耐り兼ねて、俊子の方へ一寸流眸を呉れたまゝ到頭兄の後に隨いてしぶしぶ車の方へ歩いて行つた。

後の車からはその時杉浦夫人が毛皮の襟卷で顔を隠しながらそつと下りて來た。そして車の傍へ立たまゝ毅に向つて何事か云ひかけてゐたが、やがて何うしたのか三人は人眼を避けながら急足に橋を渡つて行つた。二臺の車も轍の音を橋板に響かせながらその後から隨いて行く。

俊子はその時まるで物に憑かれたやうな顔をして電信柱の陰へ隠れてゐたが、彼等が橋へ差懸つたのをみると、そつと橋番の小舍の處まで出て來て、ぼんやりその後姿を見送つた。その眼には人眼も耻ぢぬ涙が一杯に溢れてゐた。

俊子はいつまで經つても毅が姿をみせないので、到頭夢中で橋を渡つてしまつた。町へ入ると、大通りには可成りの人影が往來してはゐたが、何處へ行つてしまつたのか彼等の姿は固より、車の姿さへもう其處邊には見えなかつた。俊子は自分でも何をしてゐるのか意識せずにその儘眞直に停車場の方へ歩いて行つた。

二三丁も來ると、道は又もう一つの通りへ突當つて、右左には賑やかな家並が開けて來た。その角から四軒ほど離れた處に彼女はふとさつきの二臺の車を發見した。そこは此邊でも眼につく程の旅館で、二階づくりの店先には定宿の札が幾枚となく懸け連ねてある。彼女は躍る胸を抑へながらその店先を通り過ぎたが、それとなく横眼で見た店口の沓脱石の上には確に見覺えのある毅の薩摩下駄と、恂のらしい赤皮の靴と、もう一足の女下駄がきちんと並べてあつた。

俊子は餘程その近邊に立つて樣子を伺つてゐようとは思つたが、往來の人に

顔を見られるのが恥かしくて、到頭またいつの間にか河岸の傍まで歸つて來た。そして少時の間そこと宿屋の間をうろうろしてゐたが、幾度通り懸つても二臺の車と、彼等の履物は依然としてその店口に殘つてゐた。

さすがの俊子も四度目にはもう待ちあぐねて今度は河沿ひの石舗道をずつと河上の方まで歩いて行つた。そして宿屋の奥座敷で起つてゐる爭論の有樣などをいろいろに想像してみては今にも何か一大事が突發して來るやうな激しい不安に追はれながら殆んど半時ばかりも見知らぬ町を先から先とさまよひ歩いた末、もう一度以前の旅館の前へ歸つてみると、その時には何うしたのかもう車もなければ、下駄も見えなかつた。彼女はその樣をみると、その儘街路の面に打倒れて、聲を限り絶泣したいやうな激しい悲しさに襲はれた。

何處をどう歩いたか自分でも氣付かないうちに彼女はいつか町を出離れてずつと河下の松林のなかへ迷ひ込んでゐた。向岸の牛臥山の岩壁はあかあかと夕陽に輝いて、流れ下る河水を迎へる海波は蹙のやうに算を亂して打寄せて來る。その轟響は松林の奥の方でかすかな反響を呼んで、そこ此處の樹の間

からは寂しい青海原が果しもなく漂渺と廣がつてみえる。四邊には人の氣勢さへしない。

俊子は我を忘れて泣きながら歩いてゐたが、しまひには立つてゐることさへ出來なくなつて、とある松蔭の砂地へべたりとくづをれてしまつた。そして兩袖を顔に押し當てたまゝ聲を呑んで泣けるだけ泣いた。

怪しげな絶望の影はやがて彼女の胸一杯に掩ひ被さつて來た。餘りに强い悲しみは彼女から理性といふものを根こそぎに奪つてしまつたので、もう何を考へる力もなくなつてしまつた。唯この廣い天地の間に自分ひとりが置去りにされたやうな氣がして、涙ばかりが留めどもなく流れ落ちて來た。

夕暮れは漸次と樹蔭から湧き上つて、四邊にはほんのり紅みをもつた光がかすかに流れて來た。海の色も暗く濁つて、もう遠い空の果には星がほの白く瞬きはじめた。

俊子はそんな時刻になつてもそこを動かうとはしなかつた。まるで何者かに引攫らはれたやうに突然姿を隱してしまつた毅の行方を思ひ案じながら、ひ

よつとしてもう二度と再び彼にも逢はれなくなつてしまうのではなからうかと頻りに重苦しい不安に責められてゐた。

五

俊子が別莊へ歸つて來た頃には、もう四邊の村里にはちらちらと灯が瞬いて、昨夜に變らぬ冴え返つた月が伊豆の山の頂にのぼつてゐた。

彼女はひよつとして津崎が來てゐやしまいかと云ふ恐怖から態々松林のなかをぬけて、庭先の裏木戸からこつそり井戸端へ入つた。そして足音を忍びながら臺所口へ歩み寄つて、そつと家の中の氣勢を伺つたが、四邊はひつそりと靜まり返つてゐて、茶の間にゐる筈のお初の姿さへ見えない。

彼女はほつと安心の吐息をついて、その儘湯殿の傍から庭の方へ廻つたが、椽端へ歩み寄つてそつと奥座敷を覗くと、彼女はその途端に思ひも懸けぬ人の姿をそのなかに見出して、はつと胸が潰れるばかりに驚いた。明るい洋燈の照り輝いたなかにはいつのまにやつて來たのか、麻布の叔父がたつた一人でしよん

ぼり腕拱みをしながら坐つてゐる。
足音が聞えたと見えて叔父は片手で洋燈の光を遮りながら硝子越しに此方を見た。
「誰れだ？、初か？」と云ふ聲も何處となく深い憂慮に閉ざされてゐる。
俊子はそれを聞くと、矢も楯も耐らなくなつて、突如椽端へ驅け上りながら、
「叔父さま。私で御座います。」と叫んで、直ぐさま障子を引開けた。
「うむ、俊子か。」叔父は呆れたやうに云つて、暫くの間ぢいつと彼女の顔を瞶めてゐたが、やがて顏色を和げて、「お前は一體何處へ行つてゐたのだ？私は午過ぎからやつて來て待つてゐたんだが、お前の行方がさつぱり分らんものだから、どんなに心配したか知れやせん。」
「まあ、お午過ぎから被來つてゐたんで御座いますか。ほんとに相濟みません、ちよつと用があつて町まで行つて居りましたもんですから……。」俊子は言葉を濁しながらそのまゝ叔父の傍へ行つて坐つた。
「町へ行くのもいゝが、初にも斷らんで行つちや困るぢやないか。急用で來た

ものは何處へ探しにやつてえゝやら分らんで、いゝ加減氣を使はにやならん。」
叔父は思惑ありげな聲で云つて、「初も可哀さうに、先刻からお前を搜しに出てまだ歸つて來んのだ。」
「ほんとに相濟みません。ちよつと斷つて參ると宜しかつたんですけど、急ぎましたもんですから……。」俊子はそれと同時に力なく俛首れてしまつた。
叔父は何か云はうとしては云ひそびれながら矢鱈と煙草ばかり吸つてゐたが、やがて漸う心を極めたと見えて眞面目な顏になりながら、
「實は私がかうして態々出向いて來たのは外の事でもないが、お前は津崎に逢つたらうな。」
「は、昨夜遲く訪ねて參りましたもんですから……。」俊子は激しい不安を覺えながら消え入るやうな聲で答へた。
「そして杉浦の毅さんも此地へ來てゐると云ふ話だが、そりやほんとうの事かな？」さう云ふ叔父の聲は嚴格に引緊つて來た。
俊子はそれを聞くと急に體を縮めて、返事に惑つてゐたが、軈て何と思つたか、

ついと叔父の膝の傍へ突俯して、肩をふるはせながら激しく啜り泣きだした。

六

叔父はその様を傷ましさうにじつと打眺めてゐたが、やがて低い聲になつて、

「いや、それはもう訊くまい。私はもう此際お前に對して何にも云ふまい。いくら今からお前を叱つてみた處で、もう出來た事はどうせ歸つて來やせんのだからなあ。」としんみり云つて、彼が態々沼津へやつて來た譯を事細かに話して聞かせた。

叔父の云ふ處てみると、津崎は昨夜あの儘深夜の急行で歸京したのであつた。そして朝まだきに飄然と松倉家を訪ねて沼津で起つた一伍一什を悉く母親の耳へ入れたらしかつた。そして俊子に復讐するといふよりも、寧ろ彼女を再び自分のものにしたい一心から、告訴をするの、新聞へ書かせるのと散々に母親を嚇かして、どうにかして俊子を毅から引離さうと試みた。

毅が沼津へ行いてゐることを少しも知らない松倉家では、まるて足下から鳥

が立つたやうにその報らせに驚かされた。一刻の猶豫もならぬと云ふので、麻布の叔父は早速電話で呼寄せられた。そして津崎の方へはいづれ二三日のうちに確答をするからといつてやつと彼を和めて歸した後て、母親は叔父と額を集めて善後策を講じた。その結果叔父は取るものも取敢ず沼津へ驅付けて來たのであつた。

「兎に角そんな樣な譯でもうかうなつた以上は私達は決してお前を責めようと思はん。お前だつてもう子供ぢやないのだから、十分前後を反省してみて、惡いと思ふことは飽くまても改めて呉れにや可かん。それをせんやうならお前はもう人間ぢやないのだ。」叔父はまた嚴格な語調に返りながら、「それてお前にはまことに氣の毒だが、こゝてたつたひとつの頼みがあるのだ。それは他てもない。お前ももう大分健康にもなつたのだから、此際思ひ切つて北海道の治子の處へ行つて呉れんか。それといふのも決してお前を遠い處へ追ひこくつて苦しめようと云ふのぢやない、全くお前の身の爲めを思つてそんなことも勸めるのだ。」

叔父はその言葉に續けて、北海道へ行くことがどれ程俊子の將來に益するかと云ふことをこまごまと說いて聞かせた。彼女が毅とどんな關係に落ちても、松倉家としては斷じて結婚を許すことが出來ない事情や、津崎といふものが傍にゐては末始終またどんな恐ろしい出來事が起つて來るかも知れないといふやうなことを、先から先と順々に理路を辿つて說いて聞かせた。そして叔父の言葉の裏には、若し眞實に毅を思ふならば、彼女が北海道へ逃げてゐる間に津崎ともどうにかして全く手を切つてしまつて、その上で又何とか方法をつけてやらうと云ふやうな意味が匂はせてあつた。

俊子は溢れるやうな感謝を以て、この叔父の同情のある言葉を聞いた。一々條理を追つて考へてゆくと、俊子には一言半句の末々まで親身の情が充ち溢れてゐるやうに思はれて、又新たな涙が知らず識らずの間に頰に流れて來た。併し彼女には今が今毅の傍を離れて、そんな遠い北の果へ旅してゆくことは到底出來ないやうに思はれた。毅の事を思ふとその叔父の言葉でさへ影が薄くなるやうに思はれ、そして幾度考へ直してみても毅に對する愛情に取つて換はる

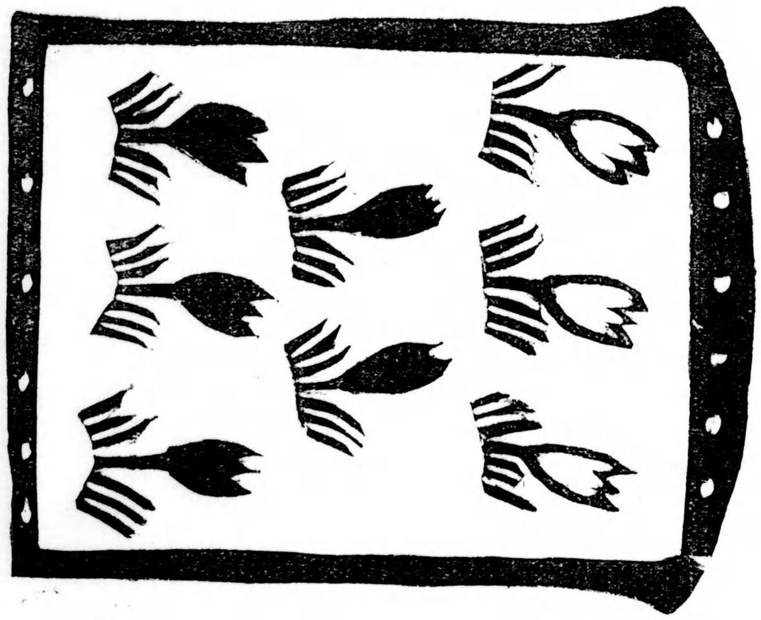
だけの價値のあるものは何處にも發見することが出來ないのであつた。

叔父は俊子の樣子を眺めながら深い思ひに沈んでゐたが、やがて又口をきつて、

「それに實はお前にはまだ話さなかつたが幸ひ治子も今冬期休暇で東京へ出て來とるから北海道へ行くにしたつて決して心細いことはないのだ。彼女も是非お前に逢ひ度いと云つて此間から喧ましく云つとるのだが、何しろ久し振りの上京だもんだから何かと忙しくてな……」と云ひながら、子思ひの氣性をあらはに見せて、「彼女も長いこと逢はんでゐたせいか、ひどく人間が變つてな、昔からみると十歲も老けたやうな事ばかり云ひ居るのだ。はゝゝ。お前が彼地へ行つて呉れると聞いたらどんなに喜ぶだらう。もういつからか寂しい寂しいと云つて泣言ばかり云つとるんだからなあ。」

俊子は治子の寂しい生涯を思つただけでも泣かずにはゐられなかつた。そしてどんな事情になつても決して毅の傍は離れまいと決心した。戀しい毅の傍を離れることは結局生命を擲つことだと堅く信じた。

花の中



一

その晩暁方までかゝっていろいろに説き訓してみたが、俊子がどうしても北海道行きを承諾しないので、さすがの叔父もほとほと持て餘してしまつた。しまひには俊子も我を忘れて、一寸した言葉の間にも包まず隠さず毅のことを訴へるので、今迄は心を寛くしてゐた叔父も稍反感を起さずにはゐられなかつた。

その翌朝になると、叔父は處置に困つてひとまづ東京の松倉へ電話を懸けて、母親とよく相談をしたうへで事を運ばせることに心を定めた。そして朝餐を濟ますと散歩にかこつけてぶらりと電話のある郵便局へ出懸けていつた。

それと引違へに郵便配達が朝の第一便を玄關へ投込んで行つた。一通は毅から來たもので、餘程慌てゝ書いたものと見えて、亂暴な字體で葉書へ倒様に走り書きがしてある。

「先程は失禮。房子の身に重大な不祥事突發致し候まゝ、これより直に歸京致し候。詳しきことは後便にて。……S生」

沼津驛にてと書いてある處をみると、毅はあの儘すぐに母親や、恂達に連られて汽車に乘つてしまつたものと見える。俊子は毅の行方が分つたので、稍安堵はしたものゝ、その重大な不祥事と云ふのが今度はひどく氣に懸つて、何だかぢつと落着いてゐられないやうな氣持になつた。房子の體に起りさうな事件といへば先づ病氣か、さもなくば毅との間に又何か別な紛糾が起つたか、いづれにしてもそれ以外の事とは思はれなかつた。俊子は茶の間の火鉢の前に坐つて、ぼんやり松林の彼方で騒ぐ波浪の音に聞き惚れながら、いろいろな恐ろしい想像に心を浸してゐた。

半時間ばかり經つと、叔父は顔色を變へてそゝくさ歸つて來た。玄關から突如茶の間へ入つて來て、俊子の姿をみるや否や、聲を彈ませながら、

「おい、俊子。大變な事が起つたぞ。清水のお嬢さんが一昨日の晩自殺をしたさうだ。」と云つて、不安と興奮とを眼に輝かしながら俊子の向うへ來て坐つた。

「えッ自殺を？」俊子はそれを聞いた瞬間にさつと眞蒼になりながら、「まあ、ほんとのことで御座いますか？」

「今東京へ電話をかけた處が、お母さんがさう云つてゐられた。何んでも一昨日の晩遅く毒藥で自殺を計つたんださうだ。ありや杉浦と許嫁になつとつたやうな話だが、一體何らいふ訳でそんな思ひ切つた眞似をしたものかなあ。」叔父はそのなかに何か深い意味を求めるやうに考へ込んでしまつた。

俊子はそれには眼もやらず、まるで前後も忘れたやうに、

「それでもう何んて御座いますか、死んでおしまひになつたんですか？」

「いや、電話だから詳しい話は分らんが、家からすぐに病院へ運んだので、生命だけは取留めたとかいふ事だが。……併しそれにしても隨分えらい事を仕出來したもんだ。あんな立派な華族の令嬢でゐながら自殺するとはよくよくの事ぢやないか。原因は何にしろ、餘り自分の身の程を辨へん話ぢやないか。」

「ほんとにねえ。でもあの方はそんな自殺なんて云ふ恐ろしい事をなさりさうな方ぢやなかつたんですがねえ。」俊子は體を慄はせながらふつりと口を閉ぢてしまつた。毅のことや、今迄見聞きした房子のことを思ひ合はせると、俊子は自分が手を下して房子を殺したやうな妙な氣がして、冷汗の滲むやうな激し

い恐怖がいつとはなしに彼女の心を凍らせた。

二

俊子はその儘顏を伏せて、房子の事ばかり思ひ浮べてゐた。帝國劇場の華やかな光のなかで初めて出逢つてから今日に至るまでのさまざまな出來事はまるで夢のやうになつて彼女の眼の前に髣髴して來た。或時は寧ろ嘲笑すべき敵手として、又或時は憐れむべき局外者として房子は常に彼女の間近に立つてゐた。毅は口を極めて房子を罵つたけれども、俊子はこれまでに幾度となく房子といふものを中心に置いて毅の心を推量る方便にした。或時は嫉妬からではなく、毅の心が幾分か房子の方へ惹かれてゐるのではあるまいかと疑つた事さへあつた。俊子にとつてはそれほど氣になつてゐた房子が、今突然聞くも恐ろしい自殺を企てたのである。どうした原因で、どういふ徑路を執つて、そんな恐ろしい覺悟を極めるまでに立至つたのか、彼女にはまるで考へつかなかつたが、それでも懷姙したことや、毅の此頃の素振を思ひ合せると、房子の胸を包んで

ゐる苦悶だけは大方想像することが出來た。人の寢靜まつた深夜にこつそり臥床の上に起き直つて毒藥を仰ぐ房子の姿はやがてはつきりと心に描き出されて來た。と同時に彼女は疼くやうな苦痛を自分の胸に感じた。

叔父は煙草を吸ひながらぼんやり考へ込んでゐたが、やがて、

「まあ、兎に角他の家のことは何うでもいゝ。自殺するものは自殺させて置くさ。はゝゝゝ。」と勢のない聲で笑つて、「實は今電話でお母さんともよく相談してみたが、北海道行きのことはまあ後にして、一應東京へ歸つて來て呉れといふことなんだが、お前はそれも厭かね？」と穏かに訊いた。

「いゝえ。私ももう體の方もすつかりよくなりましたし、いつまでかうして居りますのも母に氣の毒で御座いますから、歸れるものなら是非今日にも歸り度いと思ひますんですが……。」俊子は毅が東京へ歸つてしまつた上は一時も早く同じ土地へ歸り度い氣になりながら答へた。

「ぢや兎に角何彼のことは後の相談にして、これから直に歸つてみよう。それでないと清水のお嬢さんの事でお母さんも大分神經を起しとられるやうだから。」

話はすぐに極まつて、俊子はお初を急きたてながら歸京の支度をさせた。大きな荷物や行李などは後から又誰かを寄越して手配りさせるとして、ほんの手まはりのものだけ纏めさせた。そしてそれまでの留守居にお初たつたひとりを殘して、俊子はとるものも取敢ぬやうにあたふた叔父の後に隨いて別莊を出た。

「ぢや初や。明日早速誰か寄越すからそれまで寂しいだらうけれど、我慢して留守居をしてお呉れ。後のことは宜しく頼んだよ。」と云ひ捨てゝ、彼女は沼津通ひの穢しい馬車に乘つた。

途中、叔父は房子の自殺に就いていろいろと想像を語つてゐたが、俊子は唯浮かぬ返事をするばかりで、彼女の懷姙のことも、毅との間の紛紜のことも一切口へは出さなかつた。

昨日毅と別れた橋の處まで來懸ると、俊子はその時の胸苦しさを思ひ出して、また新たな情感に胸を騷がせた。そしてその時房子の自殺のことを聞かせら

れた毅の心のうちを思ひ遣りながら何とも云へぬ暗い氣持ちに落ちていつた。

三

俊子達が新橋へ着いたのはもう日の暮れぐれ時分だつた。俊子は久しぶりて賑やかな停車場の動搖や、銀座に續く輝かしい燈火の色彩を眺めると、何かしらほつとしたやうな氣持ちになつた。そして叔父の眼を盜んで書いて置いた毅への手紙をそつとポストへ抛り込んで、そのまゝ新橋の停留場から電車で松倉家へ向つた。

暗い屋敷町に續く我家の長屋門の前まで來ると、さすがに俊子もこれから逢はうとする母親の心を計り兼ねて、ひどく氣に滅入つて來た。此間の事さへあるに、今度は又津崎の口から毅のこともすつかり知れてしまつてゐるので、母親は何んと云つて自分を責めるだらう。津崎の方とは緣が切れてゐるとは云へ、以前の時には毅とは斷然そんな關係にはなつてゐないと云ひ張つたものを、今度はどうあつても有の儘に告白してしまはなければならないのである。それ

を考へたゞけても彼女は身を切られるやうな切なさを覺えない譯にはいかなかつた。

玄關て足音が聞えると、次の間からは婆やのお藤がそれと知つてか嬉しさうに笑ひながら電燈の光のなかへ出て來て、

「まあ、奥樣。お歸り遊ばせ。大層御丈夫さうにおなり遊ばしまして……。」と老いの眼を濕ませながら手を取らんばかりにして奥へ導いて行つた。

その聲を聞きつけて、奥からは喜三郎がまた飛び出して來た。

「あら、姉さん。到頭歸つて來ましたね。さつき叔父樣から電話が來たもんだから皆して待つてゐたんですよ。北海道の姉さんも來てゐるの。さあ、早く被來い。」

俊子はにこにこ笑つてゐる叔父の後に引添つて奥座敷へ行つた。そこの障子を開けると中には母親と、絶えて久しい札幌の治子が火鉢をなかに夾んて坐つてゐた。

「只今歸りました。」俊子は先づ母親に挨拶して、直樣治子の側へ摺寄りながら、

「まあ、治子さん。暫らく。ほんとにお珍らしいわねえ。」と力めて心のなかの動亂を押し隱すやうに笑ひながら云つた。

治子はそれを見ると、嬉しさを頰に漲らせて、

「ほんとに暫らくでしたわねえ。是非此の間から一度沼津へ伺はうと思つてゐたんですけど、何しろ參觀やら、講習やらで忙しかつたもんですからつい失禮してしまつて、……ほんとに貴女はお變りなすつたわねえ。痩せては被居るけど。昔よりずつとお若くおなりなすつたわ。」と云ひながらうつとり俊子の姿を瞻つた。

「あら、厭な治子さんねえ。」俊子は若くなつたと云ふ言葉が何かしら胸に響いたので顏を赧くしながら、「さう仰有るけど、貴女も隨分お變りなすつたわ。まるで昔とはお違ひなすつたわねえ。」俊子の眼にはピンひとつ挿してゐない治子の束髮や、光澤の失せた寂しい頰や、色氣のない地味な着物などが何とも云へぬ傷ましさを覺えしめた。

「ほんとに田舍者になつてしまつたてせう？　これで袴をはくと自分ながら恥

かしい程お婆さんに見えるのよ。」治子は氣のさくい調子で云つて、蟠りのない聲ではゝと笑つた。

母親も叔父も靜かな笑ひ聲をたてゝそれに答へた。俊子はそれを聞くと、今迄胸を曇らしてゐた不安が幾らか消え去つたやうな氣になつた。

四

ひとわたり俊子と治子の間の話が濟むと、叔父はやがて清水家で起つた自殺のことへ話題を移していつた。母親はその悽慘な出來事から成る可く皆の注意を逸らさうと力めたが、到頭終には自分まで引入れられて、知つてゐる限りの事實をすつかり話してしまつた。

房子の自殺に關する事は昨日の新聞に漏なく記載されてしまつた。子爵家では一家の秘事が曝露するのを恐れて、種々に手を廻して事實を隱蔽しようとしたらしかつたが、敏活な記者は或は子爵家の臺所口へ、或はまた病院へ、それぞれ持場をつくつて急所を握つてしまつたので、その前後の模樣は大略世間へ向

つて公表されてしまつた。

房子はその晩、華族會館で慈善音樂會があつたのでそれへ出席して、丁度十時頃しよんぼり邸へ歸つて來た。その前から稍精神に異常を來たしてゐたものと見えて、彼女は時折妙な事を口走つたりなぞした。それ故彼女の母なども此頃は彼女に對してはまるで毀れものでも扱ふやうに、荒々しい言葉などは唯一言もかけなかつた。幾ら親の眼にも娘の不行跡がかうした結果を生んだことがやつと分つて來たので、どうにかしてそれを撓め直し本心に立ち歸らせ度いとは思つたが、もう遲かつた。そして毅との間が氣拙くなつて、彼の行方さへも知れないやうになつてからは、房子の心がまた日一日に荒んで行つた。懷妊の身を氣遣つて母親が一寸した注意でもすると、彼女は泣聲を立てゝ騷ぎまはつた。母親も到頭持扱つて、此頃ではもう彼女のするが儘、わが儘の仕放題にして放置つて置くより外には仕樣がなかつた。

その晩も房子と母親との間には體のことから小さな云爭ひが起つた。そして彼女は遲くまで泣いたり、怒つたりして騷ぎ廻つてゐたが、寢室へ入ると間も

なく、恐ろしい苦悶の聲が聞えて來た。驚いて寢衣のまゝその室へ飛び込んで行つた母親は、臥床から乘り出して枕許の疊の上へしたゝか吐血してゐる房子の姿をみた。何處から持つて來たものか、彼女は多量の硫酸を服んでゐたのであつた。

病院へ送られたのはその晩の三時頃だつた。それからもう三十餘時間の時が過ぎてゐる。彼女の生命は取留められたとは云つてゐるが、それもどうやら噂だけに止まるらしかつた。そして新聞紙の報ずる處では彼女の自殺の原因は家庭の不和と、精神錯亂であつた。その他の事實は何にも洩れてはゐなかつた。

母親はそれを語つてしまうと、恐怖に充ちた眼つきをして、それとなくこつそり俊子の横顔を偸み見た。彼女は異常な興奮に胸を衝かれて、顏色も鉛のやうに蒼ざめてゐた。

「でもどうしてそんな自殺なんかなさる氣におなんなすつたんでせうね。そんなお家柄なら家庭の不和と云つたつて大した事ではなさゝうに思はれます

がねえ。」何にも知らない治子は暫らくすると俊子の方を無意識に顧みながら怪訝な顔をして云つた。

と、叔父はそれを引取つて、

「それには又種々深い事情もあるだらうが、兎も角親や家名を捨てゝそんな無法なことをする心根が可かん。子としての義務といふものを考へたら、そんなことが出來る筈はないのだ。立派な華族の令嬢でゐながら餘り身分を考へんしかただ。」

「ほんとにねえ。私にはそんなことをして親を苦める人の思考が分りません。親の身になつたらどんなに口惜しいことでせう。」母親は思入つた顔をして俊子の方をみた。

俊子は若し此の人達に房子が懐姙してゐることや、不行跡なことなどを話して聞かせたら、何と云つて攻撃することだらうなぞと思ひながら深い思ひに暮れてゐた。

五

母親は到頭最後まで津崎のことも、毅のことも、北海道行きのこともふつりと口へ出さなかつた。唯時々遠廻しに訓戒めいたことを云つては俊子の顔を偸み見た。それが俊子には打付けに云ひ出されるよりも一層辛かつた。俊子は心のなかで一々その言葉を解剖してみては母親の心を有難くも思ひ、情なくも思つた。

母親は暫らくすると叔父と相談する事があると云つて、俊子や治子や喜三郎をその儘置き去りにして離座敷の方へ入つて行つた。叔父は妙に氣兼らしい顔つきをして、母親の後へ隨いて行つた。

跡に殘された三人は火鉢の周圍へ集まつて四方山の話をしはじめた。治子は待ち兼ねてゐたやうに口を切つて、

「ねえ、俊子さん。貴女は札幌へ來て下さるさうですが、ほんとに來てくだすつて？父は何んですかひどく乘氣になつてゐるんですけれど、貴女のお心算は何

うなの？」

「え、私も是非行き度いとは思ふんですけど……。」俊子は離座敷へ入つて行つた母親達のことが氣になるので、浮の空でかう答へた。

「まあ、ほんとに來て下さるやうだつたら私どんなに嬉しいでせう。いつも手紙で泣き言を書いてあげる通り彼地はそりやほんとうに寂しいのよ。知つてゐる方は被居らないし、私たつたひとりなんですものねえ。今は一軒家を借りて、婆アやとふたりして暮らして居りますからよう御座んすけど、たつたひとりの時分には實際困りましたわ。晩になつて學校から歸つて來ると、もう穴の底へでも閉ぢ込められてしまつたやうで、その寂しさつたらありませんの。」と云つて治子はほんとに寂しさうな顔をしたが、やがて又眼を輝かして、「でも北海道つて云ふとアイヌと熊ばつかりしきやゐない野蠻な處のやうな氣がしますけど、札幌なんかそりや良い處よ。東京なんぞと違つて、土地が廣々としてゐますからねえ。五月になつて雪溶のした後へ櫻や梅や林檎の花が一時に咲く頃は何とも云へませんわ。アカシヤの並樹が青々と繁つてねえ、牧草がまるで天鵞

絨のやうに綺麗に生えますの。そんな草地へ行つて寐轉びながら鳥の聲を聞いてゐると、ほんとにもう東京へなんか歸り度くなくなりますわ。」とさも快よさゝうに首を傾げながら話してゐたが、急に今度はまた寂しい顔になつて、「でも冬はほんとに厭あね。毎日々々吹雪いて、もう三日四日も戸外へ出られないことなんかあるんですもの。もし札幌へ被來るんなら五月頃がいゝわねえ。今頃被來つたら、それこそ一日て懲りておしまひなさるわ。馬橇の鈴の音と、窓硝子に當る雪の音ばかりて一日が暮れていく時なんぞにはしみじみ心細くなりますわ。そんな時には思ひ出すまいと思つてもどうしても東京の事を思ひ出さずにゐられませんわ。」

俊子は漸次と治子の話に釣り込まれてうつとり聞き入つてゐたが、そんな冬の晩、吹雪の荒れ狂ふ音を聞きながら、遠く離れた毅のことを思ふ身になつたらどんなに悲しいことだらうと思ふと、もう雙眼には涙が一杯に湧いて來た。遠く三百里も四百里も離れた見も知らぬ土地へやられて、戀しい毅に逢ふこともも出來ぬやうになる位なら、いつそ今毅の膝に倚れてその儘死んでしまひ度いと

さへ思はれた。そしてそれと一緒に胸が張り裂けるほど毅が戀しくなつて來た。

六

「私も一度は是非行つてみたいと思つてゐるんですけど……」俊子は治子が餘り煩く返答を迫るので同じ言葉を繰返したが、「でももうこんな體になつてしまつては何處へ行く氣も致しませんわ。世間へ出て恥かしい思ひをするよりも、もうこの儘何處か尼寺へでも入つて、一生寂しく暮らしてしまひ度いと思ひますわ。」

「まあ、今頃からそんな事を云つて。」と、治子はくすくす笑つたが、急に眞顏になつて、「でももう御病氣の方はすつかりいゝんでせう？」

「え、體の工合は大變よくなりましたけれど、此れから先のことを考へるとほんとに心細くなりますわ。どうして私はかう不幸なんでせう。」俊子は寂しく笑ひながら呟いた。

「ほんとにねえ。私父から詳しくそのお話しを聞いてほんとに泣きましたわ。私も自分では隨分不幸な體だと思つてゐたんですけど、貴女に較べたら何んでもありませんわ。」治子は今迄我慢してゐたやうに急に顏を曇らせて、「でも人間と云ふものは全く考へやうひとつですわねえ。不幸だ不幸だと云つて始終物事を消極的にばかし考へてゐたら何にも出來やしませんわ。こんな生意氣な事を云つて失禮に當るかも知れませんけれど、貴女も今迄のことはすつかり斷念めて、何か新しい道をお探しになつちやどうかと思ひますわ。出來たことはいくら悔んだつてどうにもなりやしないんですものねえ。」

「私もさう考へないんぢやないんですけれど、もうかうなつちや何をしたつて駄目ですわ。いつそ行く處まで行き詰めてしまつたら却つて斷念がついて可いかと思ひますわ。此頃ぢやいつそひと思ひに死んでしまつた方がいゝやうな氣がしてなりませんの。」

「そんな意氣地のない事を考へちや駄目ですわ。そんな事を仰有るならまあ私の事を考へて下さいまし。たつた一人て親兄弟の傍を離れてあんな遠方へ

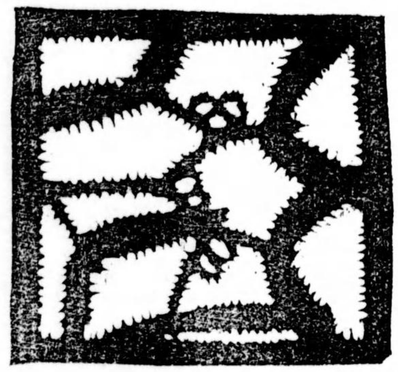
行つてゐても、どうにか獨立してやつてゐるんですもの。あの時に思ひ切つて東京を離れる決心を極めたのが今ではどんなに身の爲になつてゐるか分りませんわ。不幸は不幸でも貴女なんかまだ伯母様もしつかりして被居るし、氣の持ちやうひとつでどうにでもなるんですもの。ですから當分氣晴らしに札幌へ被來いましよ。そして二人して面白く暮らさうぢやありませんか。」治子はいつか涙含みながらしんみりとした聲で云つた。

俊子はさうした情らしい言葉を聞くと我慢がしきれなくなつて、涙に包まれながら、

「でも私にはどうしても思ひ切れませんわ。心ではかうと思つてもそれを遣り遂げるだけの氣力がないんですもの。だから私はもう散々人に踏みつけられて終ひにはきつと人のために責め殺されてしまうに極つてゐます。考へてみるとほんとに意氣地のない一生ですわねえ。」と云ひながら、彼女は心から悲しさうに手巾を取出して涙を拭いた。そして相手の治子が毅のことを知らないらしいのが焦悶かしく思はれて、自分の考へてゐることゝはまるで違つた、意

味で自分を憐れむで呉れるのが彼女には却てひどく寂しかつた。どうせ熱い涙を流して呉れるものなら、責め虐げられる今の境遇よりも、儘ならぬ最後の戀人のために流して貰ひ度かつた。

治子は何だか自分も過去つた昔を思ひ出したやうに、口を噤んで頻りに涙を呑んでゐた。喜三郎も二人の涙に引入れられて、傍を向きながらいつか貰泣きをしてゐた。

やがて叔父と母親とは再び離座敷から歸つて來た。相談は一決したと見えて、安心らしい樣子が二人の頰に浮いてゐた。北海道行きのことに就いては二人とも一言も語らなかつた。

八時を打つと、夕餐の支度が出來たので一家五人は久し振りで一つ食卓に着いた。硝子戸の外に迫る暗い夜はかうした樂しい團欒を殊更に明るく見せるやうに思れた。結ぼれた俊子の胸にもその時ばかりはしんみりとした歡びが燃えて來た。